
超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memories

風音 ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memories

【Nコード】

N0549W

【作者名】

風音 ツバキ

【あらすじ】

ゲームギョウ界のルウィーに現れた謎の記憶喪失の少女、フウ。

ひよんな事から彼女はルウィーの女神様達と一緒に暮らすことになり……

基本的に明るいノリでいきたいと思います！

処女作につき駄文注意です。それでもよろしい方はどうぞです！

タイトル変更。意味間違っていないかな…

主人公設定（前書き）

今後追記されるかもです。

11／3

アブソリュート・クロスエンドはコンビネーションスキルになりました。

主人公設定

主人公設定

○フウ

- ・イメージC V…櫻井浩美
- ・容姿 髪…ロム、ラムと同じ色で、長さは腰くらい。
- ・瞳…少しつり目で青色。
- ・身長…132cm
- ・体重…26kg
- ・スリーサイズ…B―ほとんどないW―ほそいH―ちょっとカップ―A A
- ・服装…ライムコートの上に真っ白なフード付きマント、頭に小さな白いリボン、その上からライムマフィン
- ・武器…ペン形の杖、フウカの使う召喚武器。
- ・適正属性…氷、光

- ・カテゴリ…女神
- ・アビリティ情報
- 変身後消費SP減少
- スキル封じ無効
- 麻痺無効
- 取得EXPアップ
- ・サポート効果
- 魔法ダメージ耐性上昇
- ダメージ限界突破

ルウィーの雪原に倒れていた所をブランに助けられた記憶喪失の少女。

いつの間にかルウィーの女神候補生に含まれていた。

どういうわけか身長・体格・体重までもロム・ラムと類似していて、ブランに貰ったライムコートを着ていると三姉妹と間違われるくらい。

基本的におとなしい性格で、ルウィーでは多分一番常識のある子。でもたまにメタ発言をすることが。

身長について触れると不機嫌になる。ステラが自分よりも少し背が高いのを気にしてたりする。

女神候補生姉妹同様べったんこ、本人達はまだ大きくなると言い張っている。

常識はあるが厨二的な魔法がお気に入りだったりする。

ステラと出会ってから文字式符術というのを教えてもらい、物をしまえたり炎を発したりなど色々な効果の符を作ったりしている。しかしたまに間違えて爆発する。

怒ると性格が少しだけ変わる。わかりやすく言うと東方projectのフランドール・スカーレットみたいな感じ。

さらに窮地などに陥ったりすると…

突然の出来事に弱く、押しに弱い。

それに加えなぜか同性に好かれやすい。

少し照れやな所があるが、ブランがいなくなった後はロムとラムの二人を支えるために色々と頑張る。

戦闘タイプはセットスキル寄りの万能タイプ。

APの消費が多めだが、氷の刃などで攻撃するセットスキルが揃っており、ロムとラムの二人よりも近接攻撃の火力が高い。

スキルもロムラムの二人の覚えるヒールやアイスコフィンなどを覚えたりするなど、ラーニング能力が高い、その気になればゲームの技とかも真似れるとか。

魔法攻撃特化型で、氷属性の魔法なら殆ど扱える。

が、その他の属性の適正はほぼ皆無といってもいいくらいに無いので、ステラに書いてある魔法も氷属性以外のは文字式符術でないと扱うことができない。

その代わり防御が低めなのだが、そこら辺は回避率で補っている。そのため一撃でも食らうとなかなかピンチになってしまう。

サポート効果のダメージ限界突破もあるので、後衛に入れても化。

○女神化

容姿 髪…黄緑色、長さは変わら頭のとっぺんにぴよこんとくせった毛がある。

瞳…髪の色と同じ黄緑色

身長…変身前と変わらず。

Pユニット…初期装備破損につきディーエ・スライト（借り物）

フウの変身後の姿、なぜ変身できるのかはフウ自身も今のところわ

からない。

変身前と性格が少し変わり、テンションが高めになる。

ルウィーの教会で本当の姉妹のように見えるという理由で、名前はホワイトシスターとなっている。今の所は。

相変わらず防御力に問題があるが、攻撃力が高くなってるので主力にも向いている。

攻撃さえ食らわなければ。

・主なスキル

氷・光系統魔法

氷・光系統物理魔法

ラム・ロムから教わったor見て覚えた回復・攻撃魔法
厨二全開な魔法系統（なぜかこれだけ適正を無視する）

・必殺技

U・C・W・

無限の氷製（Unlimited Cold Works）。

自分と標的を特殊な結界に閉じ込め、氷の武器・氷魔法で攻撃する。
あるアニメの必殺技を自己流にアレンジしたら予想以上に強かった。
追加攻撃は結界の中全ての魔力で氷の剣や槍などを生成し、標的に
向けて一斉に放つ。

・セリフ

開始

「よ、よしっ！ 行くよ！」

「手加減して……くれるわけないよね……」

先制攻撃

「隙あり、だよ！」

「これなら、勝てるかも！」

バックアタック

「ひゃああっ！？ て、敵！？」

「みみ、皆っ！ おおお落ち着いて！」

自分のターン

「わたしの番だね」

「こ、効率的な立ち回りを……」

自分のターン（女神）

「わたしのターン！」

「わたしは、負けない！」

撃破

「た、倒せた……」

「よおしっ！ 次！」

撃破（女神）

「弱い弱い！ そんなんじや絶対に勝てないね！」

「永久とわに眠り続けてなさい！」

勝利

「はあ……か、勝てた……」

「皆、大丈夫？」

勝利（女神）

「この程度なら、本気を出さなくても勝てたかもね」

「ラムちゃんとロムちゃんは、わたしが守る！」

戦闘不能

「こんなの…いや…」

「まだ…わた…しは…っ！」

戦闘不能（女神）

「こん…なの…うそ……よ…」

「嘘…こんな所で…」

復活

「あ、ありがとう…」

「まだ、やれる！」

アイテム

「とりあえず、これを！」

「アイテム、使うよ！」

アイテム（女神）

「はい！ これ！」

「ひとまず、これ使うよ！」

女神化

「プロセッサユニット、セット！」↓「プロセッサユニット、セット完了！」

「本気、出すよ！」↓「あなたの罪を数えなさい！ なんてね」

U・C・W

アンリミテッドコールドワークス

「行くよ…無限の氷製！」

この空間では、あなたは無力だよ！

うりゃうりゃうりゃうりゃーっ！

最後に凍って…砕けちゃえーっ！

まだやるの…？ それなら…！
はああああっ！

串刺しだよ！」

U・C・W（女神）

アンリミテッドコールドワークス

「…無限の氷製。

一気に決めさせてもらうよ。

この動き…見切れるっ？

とどめだよ！ 砕けて！

まだ立てるんだ、凄いね。

それなら…これで本当にトドメッ！

さよなら…永遠に、ね…」

おまけボイス

自己紹介「えーと…ふ、フウって言います！ よ、よろしく、ね？」

誕生日おめでとう「誕生日なの？ し、知らなかったよ…えと、おめでとうっ！」

メール「メール、来てるよ？ 誰からかな？」

電話「電話だよ！ 切れちゃうよ！ 早く早く！」

褒める「わあ、すごいすごい！ 君ってすごいんだねっ！」
罵る「鬱陶しいからあっちいってくれない？」

その他1「え、えと…お、お兄ちゃん…？」

その他2「お…お兄、ちゃん…大好きだよっ…！」

主人公設定（後書き）

一応フウもあるハードがモデルですが、今はまだ伏せておきます。

オリキャラ設定 改（前書き）

オリジナルキャラクター達の設定など。

11／29

オリキャラ設定 改

○ステラ

- ・容姿 髪…肩くらいまでの黄色い髪で、黒い長めのリボンでショートポニーテールにしている。
- ・瞳…紫
- ・身長…148cm
- ・体重…38kg
- ・スリーサイズ…B―76 W―52 H―78 カップ―C
- ・服装…薄紫のミニスカートと腋が露出したセーラー風の服、黒いニーソックス。
- ・武器…魔力、魔法銃、魔法剣
- ・適正属性…全

・カテゴリ…魔導書

・カテゴリ効果…魔法攻撃力・防御力アップ

・アビリティ情報

状態異常無効

ステータスダウン無効

加算SP増加

消費AP減少

・サポート効果

魔法ダメージ耐性上昇

消費SP減少

ルウイ一の図書館で眠っていた白い魔導書。

自分を扱うことのできるフウに出会い、行動を共にすることに。

子供っぽくわがままで、気まぐれ。

魔導書だけあって魔法に関してはかなり強い。

ゲームギョウ界の魔法だけでなく、別世界の魔法も書いてあるとか。
(ド○クエとかティ○ズとか)

身長がフウより若干高いせいで、たまに妬ましそうな目で見られている。胸もフウよりあるのでなおさら。

魔法の本なので燃えたり濡れることは無い、が、お風呂などに入るのは嫌がる。

ちなみに本当の人間ではないので別に入らなくても問題はない、魔法でなんとかなる。

本の状態でフウをサポートする際は、魔力をフウの周囲に集めたり下級魔法で援護したりする。

とあるゲームに自分と同名のキャラを見つけ、そのキャラクターの真似をすることがある、使っている武器なんかはそれを基にしている。

○夢見ユメ

・容姿 髪…金髪で左右に跳ねた感じの髪型。

・瞳の色…赤

・身長…156cm

・体重…(血塗れになっている)

・スリーサイズ…B―80 W―50 H―79 カップ―D

- ・ 服装…紫のチェック柄のセーター、白いスカート
- ・ 武器…チェンソー
- ・ 適正属性…闇

・ カテゴリ…幽霊？

・ カテゴリ効果…物理ダメージ耐性上昇

・ アビリティ情報

状態異常無効

消費SP減少

毒無効

麻痺無効

・ サポート効果

物理ダメージ耐性上昇

状態異常無効

リーンボックスの廃墟マンションで出会った少女。見た目はぶっちゃけゆめ2っきのうろつき。

フウと出会ってフウに興味が湧いたらしく、フウに同行してきた。

フウカ曰く幽霊のような存在らしいが、実際なんなのかは不明。

身体能力は普通の人間以上だが…？

何かとフウに私の嫁だとかの百合発言をして、ステラとぶつかっている。ようするに犬猿の仲。

不思議な力を持っていて、透明になったり狼になったりと、さまざまに変身したりできる（ようするにエフェクト）

主にチェンソーを具現させて戦うというのが主流。

オリキャラ設定 改（後書き）

なんか、ステラの魔法万能すぎじゃね？ と思った。

主人公設定 改

○フウカ

・武器…刀…天叢雲ノ剣、両手剣…ダーインスレイヴ、大鎌…ハーディーター。

・適正属性…炎、闇

・カテゴリ…女神

・アビリティ情報

物理攻撃力大幅上昇

防御力大幅上昇

素早さ大幅上昇

HP自動回復

・サポート効果

攻撃力上昇

ダメージ耐性下降

フウの内に存在する、もう一人のフウ。自らをフウカと名乗っている。

フウとの見た目の違いは目の色が赤いのと、口調がどこか大人びたものになっている程度。なので幼女である。

キラーマシンの所になった状態は半覚醒状態で、性格は変わっているが意識はフウのものである。

対して、完全覚醒状態になると意識もフウカのものとなり、フウの意識は眠ってしまう。

女神化なしで、素手で鋼鉄を貫いたり、常人離れした身体能力を発揮する。

RPGなどの職業で言う魔法剣士。

魔法で武器を喚び、それと炎、闇属性魔法で戦う。

ただでさえ高威力の剣撃に魔力を纏わせると、鋼鉄程度なら豆腐のように斬れるくらいになる。

ぶっちゃけチートです。本当に（ry

・主なスキル

炎・闇系統魔法

分身

瞬間移動

・必殺技

DEAD END

自分とダーインスレイヴの力を完全開放し、力任せに斬り刻み、最後に星すらも破壊するほどの一撃を叩き込む。

発動時は相手を異次元に飛ばすので、周囲への被害は無い。

・セリフ（完全覚醒時）

開始

「さ、始めようかしら」

「雑魚に用はないのだけれど…」

先制攻撃

「どこ見てるのかしら？」

「一瞬で消し飛ばしてあげるわ…！」

バックアタック

「へえ、私を出し抜くなんて、少しはやるようね」

「ふん、雑魚がなにをしようと無駄よ」

自分のターン

「ふふ、失望させないですよ？」

「さて、と。どうしようかしら」

自分のターン（女神）

「ふふふふっ…」

「さあ、終わりにしてあげるわ…」

撃破

「つまらない…」

「…弱すぎよ…」

撃破（女神）

「うふっ…次はあなたよ」

「弱い弱い、弱すぎる…」

勝利

「所詮は雑魚、か」

「もっと強いのはいないのかしら？」

勝利（女神）

「本気を出させたあなたが悪いのよ？ あははっ！」

「別に、本気出さなくても余裕だったかもしれないわね」

おまけボイス

自己紹介「フウカよ。フウのもう一つの人格、とだけ言っておくわ
：ふふ」

誕生日おめでとう「へえ、そう。まあ、おめでとう」

メール「メールよ、早く読んだら？」

電話「電話よ。さっさと出ないと切れるわよ？」

褒める「ふうん、中々やるじゃない。少し見直したわ」
罵る「：いっぺん、死んでみる：？」

その他1「コンティニューは、できないわよ？」

その他2「きゅっとしてドカーン！　なんてね」

プロローグ（前書き）

ルウイーの女神達が可愛すぎて思わず書いてしまいました。
まだまだ至らない所もありますが、どうぞよろしく願いたいしま
す！

プロローグ

ゲームギョウ界。

四人の一守護女神（ハード）達によって守護されている異世界だ。

そして守護女神の一人であるホワイトハートが守護する、雪に覆われた景色とカラフルな建物が印象的な都市、ルウィー。

その都市の近くの雪原に、別の世界からやってきた少女が一人、倒れていた。

「う…うう…」

少女は苦しそうに呻き、起きる気配が見られない。

そこへ、三人の少女がやってくる。

「それでね…あれ？ お姉ちゃん！ 誰か倒れてるよ！」

「…本当だ」

「…ルウィーでは見かけない格好…他の国の子？ だとしてもどうしてこんなところで…ともかく、一度教会に運ぶ。二人とも手伝って」

「うんっ」

「…はいっ」

白い服と帽子を被った少女――ブランは、共にいた二人の少女――ロムとラムにそう伝え、倒れている少女を運んでいった。

「……ん、う……こ、ここは…」

少女が目を覚ましたのは、暖房の効いた見知らぬ暖かい部屋だった。

「…わたしは…っ…うう…」

少女はなぜ見知らぬ場所にいるのかを思い出そうとするが、頭痛によって阻害されてしまう。

と、そこにブランが部屋に入ってきた。

「…目が覚めた？」

「あ、は、はい……あの、あなたは…？」

「…私はブラン。あなたは雪原のど真ん中で倒れていたのよ」

「倒れていた…わたしが…？」

少女はなぜ自分が倒れていたのかを思い出そうとして、またもや頭痛がしてうまく思い出すことができない。

「……っ…」

「…あまり無理をしないで。あなたについて聞くのはあなたの調子が良くなってからにする。だから今は安静にしている」

「は、はい……」

ブランは少女の様子を見てから

少女にそれだけ伝えようと、部屋から出て行ってしまった。

その後も少女は自分の事を思い出そうと試みるが……

「……思い出せない……」

結局思い出せたのは自分の名前のみで、それ以外は何も思い出せなかった。

少女は無理に思い出そうとしても無駄だと思い、その日は眠ること

にした。

プロローグ（後書き）

いまいちブランの口調がわからない……

序章主要人物紹介（前書き）

序章に登場する主要人物などです、装備品はフウのみ。

序章主要人物紹介

○フウ

― 装備 ―

・ 武器

「ピュアホワイト」

ラムに貰った白いペン型の杖。

・ 防具

「メモリーブレスレット」

灰色のブレスレット。何かに使えるようだが…

・ 装飾品

「振動石の御守り」

たまにブルブルと小さく振動する石の御守り。

・ コスチューム

「ホワイトマント」

雪原に倒れていた時から着ている全身を覆うくらいの真っ白なフード付きマント。

・ アクセサリー

「ホワイトミニリボン」

頭につける小さなリボン。

・ プロセッサ装備

「名称不明」

フウ専用。今のゲームギョウ界ではあまり見ない型の漆黒のプロセッサユニット。エラーにより装備不可に。

雪原に倒れていた記憶喪失の少女。

ルウィーの守護女神ブランに助けられ、教会にて休養中。

ロム、ラムの二人と一緒にクエストに行った際、守護女神・女神候

補生にしかできない女神化をし、二人の危機を回避する。
しかしその起動を最後に、装備していたプロセッサユニットがエラーを起こしてしまう。

○ロム&ラム

ルウイーの女神、ブランの妹の女神候補生。ロムはおとなしい方、ラムは活発な方の性格を引き継いでいる。

ブランと共にフウを助け、その後ラムとフウの三人でクエストへ行く。

そこで普段は現れない凶暴なモンスターに襲われ、危機に陥るが、フウによって助けられた。

○ブラン

激情家で好戦的なルウイーの守護女神。雪原に倒れていたフウを発見し、助けた人。

フウが来てから自作の本へのイタズラの被害が減って助かっているか思ったりする。

第一話 双子とクエストと女神（前書き）

ちなみに時間軸的には
プロローグの少し前くらいです。

第一話 双子とクエストと女神

――SIDEフウ――

どうも皆さん、記憶を無くしてブランさんに助けてもらったフウです。

あの後ベッドの中で一日思い出そうと頑張ったのですが、結局名前しか思い出すことが出来ませんでした。

…って、心の中の独り言なのになんで敬語使ってるんだろ、わたし…で、とりあえず今朝部屋に来たブランさんにその事だけ伝えると、もう少し安静にしておいたほうが良いといわれたので、相変わらずベッドで横になっている。

…といっても、昨日から寝てるせいであんまり眠くないんだけどね。なんて、暇を持て余していると部屋の扉が開く音がした。

ちなみにわたしは扉を背にして寝ているので、誰が入ってきたのかはわからない。

「こそこそ…」

「こそこそ…」

いや、こそこそって擬音を口にしたらバレバレな気がするんだけど。

「…寝てる？」

「……うん…大丈夫みたい」

「よし…」

声からして小さい子、それも二人かな？

というか何をするk

ピトツ

「ひゃあああああああっ!？」

急に首筋に冷たいものが当たり、思わず変な悲鳴を上げてしまった。

これは…氷…いや、雪？

「やったー! だいせいこーう♪」

「だいせいこーう…♪」

誰の仕業か…なんてのはこの目の前にいる二人の女の子しかないだろう。

「うう…あ、あなた達は…?」

「あれ、怒らないんだ」

「今はそんな気分じゃない…：目はバツチり覚めたけど」

「ふーん。ま、いいわ。私はルウィーの女神候補生、ラムよ!」

と、ピンク色の服を着た、活発そうな女の子が、

「同じくルウィーの女神候補生、ロム…」

続いてピンク色の服を着た子と同じデザインの、水色の服を着た大人しそうな子が自己紹介してくれる。

「ラムちゃんとロムちゃんだね。わたしは…」

「知ってる! きおくそーしつなんでしょ?」

「お姉ちゃんから聞いた…」

あう、遮られた…

というか、お姉ちゃん…？ あ、ブランさんの事かな。

「ねえねえ。その、きおくそーしつってどんな感じなの？」

「気になる…」

「え、ええと…気になるって言われても…名前以外の事が何にも思
い出せないってだけで…あなた達で例えたら、お姉さんの事とか
色々な事を忘れちゃうって感じだよ」

「お姉ちゃんの事を忘れちゃうの…？」

「そんなの、嫌…」

「うん。わたしも大切な事を忘れてるかもしれないって思うと、す
っごく悲しい気持ちになるんだ…」

自分の生まれた場所も、親の顔も思い出せないからね…

「…それって、戻ったりしないの？」

「わからない。でも、戻るって信じてないと戻らないと思うから、
気長に戻るのを待ってるよ」

「早く戻ると、いいね…」

ロムちゃんがわたしにそう言ってくれる。

「…ありがと、ロムちゃん」

「そうだ！ あんたこれから私達と一緒に遊ばない？」

「遊ぶ…って、何をして？」

「うーん…色々！ 外で遊んだり、クエスト受けたり！」

「クエスト…？」

「街の人の頼みごとを聞いて、モンスターを倒したり、アイテムを届けてあげたりするの…」

「へえ…でも、ブランさんにはまだ安静にって言われてるし…」

心配かけるのは良くないからね。

「私達が一緒に行くって言えば大丈夫よ！ クエストも弱いモンスターのを受ければいいんだし」

モンスター退治に行くのは確定なんだね…

「でも、武器とかどうするのさ？」

「私の杖の予備を使えば良いんじゃない？」

良いんじゃない？ って…

「さ、早く行こ！ …えっと」

「あ、わたしフウ」

「フウちゃんね！ 早く行こ！」

「行こ…」

「うーん…まあ、いっか」

結局、わたしは二人と一緒に外へ行くことになってしまった。

途中ブランさんとミナさん（ルウィーの教祖さん）に出かけると断りをいれて（何故か普通にOKしてくれた）、ラムちゃんのペン型杖の予備を渡してもらって街へと出た。

というか、さっきは話の流れで了承しちゃったけど、わたしも戦わなきゃダメなの？

「そういえば、女神候補生っていつてたけど、それってなんなの？」

「そんなのも知らないの……って、あ、そっか。えっとね、女神っていうのは……」

それから、歩きながらロムちゃんとラムちゃんに色々と教えてもらった。

女神っていうのは守護^{ハート}女神という国を守護する女神の事で、人々の信仰^{シエテ}心を力の源で、その為に各国の象徴とされ、人々の信仰心の多さが女神の力に直結しているという。

そして女神候補生というのは、そのまんま次の守護女神の候補者、ということらしい。

……後で、この説明はネプペディアというネットサイトの説明とまんま同じだって知ったけど、ロムちゃんには言わないでおくことにした。

その他はルウィーで流行ってるゲームの話だとか、そんな感じの雑談をしながらギルドという所でクエストを受け、街の外へと出た。

「……っていうか、本当に戦うの？ えっ？ わたし戦闘経験なんて無いよ？」

いや、記憶喪失なんだから当たり前前なんだけどさ。

「大丈夫よ。弱いモンスターのクエストだし、それにもしもの時は私達を守るから」

「（こくこく）」

なんだろう、もうその台詞がフラグにしか聞こえないよ。

「あ、アイツじゃない？」

なんて言ってるうちに、クエストの目標であるモンスター、ウサベードーが現われた。

「よーしっ、ロムちゃん、フウちゃん、いっくよー！」

「頑張る…」

ロムちゃんラムちゃんの二人はもう戦闘準備に入っている。

「うー……、もぉー！　なるようになれーっ！」

わたしも半ば涙目になりつつ、杖を構えて戦闘準備。

さて、ここからは少し真面目な思考に切り替えよう。

簡単なクエストとはいえ、わたしには戦いの記憶がない。

だから必然的にアタック縛りになるわけで……って何言ってるんだろ、わたし。

と、とにかく、自分のレベルとかがわからないから油断は禁物のこと。

と、ともかく、相手は三体、だから一対一で戦うようにすれば、多分わたしでも勝てる……と思う。

まず、適当に雪玉を作って投げつけ、一体の注意をわたしに向け、他の

ウサベーターから引き離す。

二人もわたしの考えがわかったのか、残りの二体がこっちに来ないように戦ってくれている。

「……ようしっ……！」

わたしはもう一度杖を握り直し、ウサベーターと対峙する。

先に動いたのは……ウサベーター。

ふよふよと近づいてきて、頭の耳でわたしに斬りかかった(?)きた。

「ひゃ……っ」

まあ、黙って斬られるほどわたしはマゾじゃないので、身を引いて避ける。

その後も続けて斬りつけてくるのをかわし続け、攻撃が一度止んだ隙に――

「えいっ！」

手に持った杖で思いつきり叩く。

「えいっ！　ていっ！　てえいっ！」

そして間髪入れずにぽかぽかと連続でウサベーターを叩きまくった。

「…はあ…ふう……た、倒せた……」

打撃だけでも案外勝てるものなんだね……

「フウちゃん、なかなかやるじゃない！」

「あ、ラムちゃんロムちゃん。そっちも終わったんだね」

後ろから声をかけられたので振り向くと、そこには既に二匹のウサバードを倒したラムちゃんとロムちゃんがいた。

「ふふん、私とロムちゃんにかかればあんなやつらなんて余裕よ！」

「余裕…」

えへん、と胸を張る二人。

「ふわぁ…、やっぱり二人とも強いんだね——！？」

そんな風に、三人で楽しく話している時だった。

どこからともなく、巨大な青い狼が二人の背後に現れた。

「ふ、二人とも危ないっ！」

そう叫んだが既に遅く、狼はその鋭い爪でロムちゃんを真横に吹き飛ばした。

「え…？ きゃうっ…！」

「ろ、ロムちゃん！？」

わたしは咄嗟に杖を構えるが、直感で悟った。

——こいつは、危険だ。

「な、なんでこんなところにアイスフェンリルがいるのよ！ いつもはもつと奥に行かないとでてこないのに！」

ラムちゃんも突然の出来事でかなり動揺している。

「こ、このままじゃロムちゃんが…！」

依然としてアイスフェンリルはロムちゃんに狙いを定めている。

このままだとロムちゃんが……

——また、わたしは守れないの？——

——友達（大切な人）を、また失うの？——

——そんなの…そんなこと——

「——もう誰かを失うのは、絶対に嫌っ！！」

そう叫ぶと同時に、わたしの身体は光に包まれた。

——三人称SIDE——

光が止むとそこには、黄緑色の長い髪、女神の証である——プロセッサユニットを纏った少女、フウが立っていた。

「え……？ ふ、フウちゃん……？」

近くにいたラムは、フウの変身にかなり驚いていた。

それも当然だろう、女神化は守護女神と女神候補生にしかできないことなのだから。

「……じ、自分でも何が起きたのかわからないけど、それよりも！ラムちゃん！わたしがアイツを引き付けておくから、その間にロムちゃんを！」

「わ、わかったわ！」

フウはラムにそう伝えると、アイスフェンリルの注意を引き始める。

「そらっ！　アンタの相手はわたしよ！」

フウは氷の刃をアイスフェンリル目掛けて発射する。

「……ガルッ……？」

攻撃を受けたアイスフェンリルは、ロムをターゲットから外し、フウの方へと向く。

「今よ！」

フウの掛け声と同時にラムはロムの元へと駆け寄り、ロムにヒールをかけた。

「で、ええっと…とにかく足止めさえすれば…」

ぶつぶつと呟きながら、水色の魔方陣を展開していくフウ。

「なんとなくでうまくいくかわからないけど、これでっ！」

フウが手に持った杖を頭上に掲げると、空中に数個の氷の刃が現れる。

「アイシクルレイン！」

そして術名を叫ぶと、アイスフェンリルに向けて浮遊していた刃が一斉に飛んでいく。

氷の刃はアイスフェンリルの動きを制限するように地面に突き刺さり、アイスフェンリルは思うように動けなくなった。

「よし！ 二人とも、今のうちに逃げよう！」

「う、うん！」

アイスフェンリルの動きを封じた隙に、フウ達はその場から逃げ出していた。

――フウSIDE――

はい、フウです。

さっきはあんな事言っちゃったけど、わたし自身、何が起きたのかさっぱりです。

ロムちゃんを助けたいと思ったらなんか姿が変わって、で頭の中に力の使い方が流れ込んでくるような感じがしたからその通りにしたらアイスフェンリルが消し飛んで……なんだこれ。

「って、そうだ。ロムちゃんは大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫……」

自分が変身したのは驚いたけど、ともかくロムちゃんが無事でよかった。

「フウちゃんも女神だったんだ…」

「へ？　女神？　あ、もしかしてこれが女神化なの？」

でも、だとしたらなんでわたしが女神化なんてできるんだろう…？

「んー…まあひとまずクエストも終わったんだし、一度戻った方がいいかな。ところで二人とも」

「何？」

「これってどうやってもとに戻るの？」

「全身から力を抜くような感じ…」

うーんと…：…こう、かな…？

ロムちゃんに言われたようにやってみると、わたしの身体がまた光り、もとの姿に戻ることができた。

「本当だ、もとに戻った」

「うーん、色々気になるけど、一度お姉ちゃんに話しに戻ったほうがいいわね。クエストも報告しなきゃだし」

「そう、だね」

でも、本当にどうしてわたしなんかがこんな力を持っているんだろう。

記憶も……あれができるってわかっただけで何も思い出せないし……

帰りの道中、わたしはそんなことばかり考えていた。

第一話 双子とクエストと女神（後書き）

ラムちゃんとロムちゃんの口調がうまくつかめない……

とりあえず技紹介。

○えいつ！

初期限定通常打撃。

とりあえず杖を上から振り下ろすように叩く。

○えいえいつ！

ラッシュ。

杖を二度振り下ろす。

○このっ、このっ！ このっ！

とにかく叩く、叩く、叩く。

ラピッドラッシュではなく、とにかく対象を叩きまくる。

あなたがッ！ 倒れるまでッ！ 叩くのをッ！ やめないッ！

○アイシクルレイン

低級の氷魔法、女神化により思い出した技。

鋭い氷の槍を対象に雨のように降り注がせる。

威力は低めだが、まれに対象のAGIとMOVを下げる効果がある。

第二話 女神の力とわたしの今後（前書き）

予想以上に遅くなった…

第二話 女神の力とわたしの今後

「…そんなことがあったの」

あれからわたし達はギルドでクエストの報告をし、そのまま協会へと帰ってきていた。

ちなみにロムちゃんとラムちゃんの二人は自室に戻っていった。

わたしはあっちで起きた出来事を報告しに、ブランさんの所に来ている。

「まあその、女神化？　というのがなぜかできるんですけど、あの後もう一度試してみたらシステムエラーだとかでプロセッサユニットが起動しなくなってたんです」

「…エラー…？」

ブランさんはわたしの話を聞いて、驚いた表情になる。

女神として経験の浅いラムちゃん達よりも守護女神のブランさんの方が何か知ってると思ったんだけど、エラーなんてのは今まで起きたことがなかったらしい。

ブランさんも知らないとなると、どうするか…

「…あなたがなぜ女神化できるのか、プロセスサユニットの異常と
か気になることはあるけれど、先にこれだけは言わせて。二人を助
けてくれてありがとう」

そういつてブランさんがお礼を言うてくる。

「い、いえ、そんな感謝されるほどでも…」

あの時はほぼ反射的に動いてたし。

「…「…無いです」

そうだ、思い出せた事なんて女神化ができるくらいで、自分の住ん
でいた場所なんかもわからないんだった。

だとしたらここにいさせてもらって少しずつ思い出していったほう
がいいかもしれない。

「…じゃあ…いいですか…?」

「ええ」

そんなこんなで、わたしはこの教会で暮らすことになった。

「え、えっと…どう、かな…？」

「わぁ！ フウちゃん可愛い！」

「お揃い…♪」

所変わって、わたしはブランさんに貰った服に着替えていた。

服のデザインはロムちゃんとラムちゃんの二人と同じで、色が黄緑、ストッキング無しといった感じ。

帽子もあるけれど、今は室内なので被ってはいない。

「サイズもぴったりでよく似合ってますね。それにしても…」

「本当に似ている…」

わたし達から少し離れて見ていたブランさんとミナさんがそんなことを言っていた。

確かに外見は似てるとは思ってたけど、サイズとかも一緒だとは思ってなかったからわたしも少し驚いた。

っと、それはともかく。

「え、えーと、これからよろしく、ね」

そんな挨拶と共に、わたしのルウィーでの生活が幕を開けたのだった。

第三話 白い魔導書、そして物語の始動（前書き）

今回は新キャラが登場します。

うん、単なる作者の趣味です。

というか軽いノリでって言うておいて若干シリアス入ってるし…

まあ、最初とか外伝になったら仕方ないよね…多分。

第三話 白い魔導書、そして物語の始動

「うーん…」

ルウィーの図書館。

そこで先日から教会で暮らすこととなった少女、フウが巨大な本棚の前で唸っていた。

「これはこの前読んだし…こっちは読んだことないけど上巻がないし…んゝ…」

どうやら読む本をどれにするかで迷っているようだ。

ちなみにこの少女、この数日の間にルウィー関連の歴史書の大半を読破しており、ルウィーについてなら殆ど知っているほどの知識を身に付けていた。

物覚えがいい、というのもあるのだが、何よりも読むペースが凄まじいのだ。

ブランもこれを見て、しっかり内容は頭に入っているのかと一度フウが読んだ本から問題を出したりしたが、全て正解するという記憶力を見せつけた。

彼女がルウィーの図書館を制覇する日もそう遠くないかもしれない、

なんてことをブランは思っていたりもしたとか。

「……？」

そんな先程まで唸っていたフウが、あるものを見つけ動きを止めた。

「こんな本…前からあったかなあ？」

フウが見つめているものは、白い本。

ただ汚れもなく、純白の白なので、他の本よりも少し目立っている。

こんな本があったら前から気づくよね？ と考えながら、フウは白い本を手取る。

本の表紙は、金色で模様が描かれている。

「なんか…何かのゲームで見た魔道書みたい」

とか言いながら、少しわくわくしながら本を開く。

すると突然、本が光を放った。

「ひゃああっ！ な、何！？」

暫くして光が収まってくる。

なんなのよ、と内思いながらフウが目を開くと、そこはさっきまでいた図書館ではなく、魔方陣や松明の置かれた怪しげな部屋だった。

「えっ？ なに？ 隠し部屋？ 裏ボス？ え、まだこの小説三話だよ？ というか原作すら始まってないよね？ え？ え？」

突然の出来事にかなり取り乱すフウ、というかメタ発言すな。

『んうゝ…うるさいなあ……だあれ…？』

「ひうつ！？（びくうつ）」

そんな状態で何者かに声をかけられた為か、フウは思わずびくりと体を強張らせる。

「だ、だだだ誰！？ どこにいるのっ！？」

『そんなに怖がらなくても…それに私はあなたの目の前にいるよ？』

謎の声に言われて辺りを見回すが、見当たるものは宙に浮いた不思議な白い本だけだった。

「め、目の前って…浮いてる変な本があるだけだけど…」

『変って失礼だねえ。じゃあこっちの姿のほうがいいかな?』

フウの言葉に少しムスツとする謎の声。

そしてそんなことを言った途端、フウの目の前にあった本が光を放つ。

「っ…! な、なに!？」

眩い光に思わず目を覆うフウ。

そして光が収まった後、そこにいたのは、

金色の髪を短いポニーテールにし可愛い服を着た、一人の少女だった。

「え…? お、女の子…?」

「んうーっ! この姿になるのも久しぶりだなあ。眠りについたの

いつだったっけ…」

少女はぐっと伸びをして、何やらぶつぶつと呟く。

そして急に顔を上げ、フウに自己紹介をしてきた。

「私、ステラ。確か白の魔導書って呼ばれてるよっ！ お姉さんの名前は？」

「お姉さんって程の歳じゃないと思うけど…背もあなたの方が高いし…で、えと、わたしの名前はフウだよ」

突っ込む所が違う気がするが、ともかくフウも自分の自己紹介をする。

「それもそっか。それじゃえーと、フウちゃんだねっ！ それじゃこれからよろしくねっ☆」

「というか魔導書って…え？ よ、よろしくって…？」

「え？ だってフウちゃんが私を起こしたんだから私の所有者はフウちゃんって事で、それでこれからもよろしくって」

「…へっ？ 所有者？ えええええっ!？」

突然そんなことを言われ、思わず叫んでしまうフウ。

「き、急にそんなこと言われても…魔法だってまだちょっとしか知らないし、それに魔導書なんてそんなものをわたしが扱えるわけないよ…」

「んー、そんなことはない筈だよ。扱うことのできる人がこの本を開かなきゃ私が目覚めることはないし」

「そう、なんだ…（そういえば初めて女神化した時も一番最初に出てきた技が魔法だったっけ、それじゃあ元々そういう力を秘めてたりしたのかな…）」

ステラの言葉に思案顔になるフウ。

「あのー、フウちゃん？ 考え事もいいけど私の事も忘れないでねー？」

「あ、ごめんね。それでわたしはステラ…さんを起こしちゃったわけだけど、やっぱり何かしなきゃいけないかったりするの？」

ステラの呼びかけで我に返ったフウは、そう訊ねる。

フウもまだ短期間とはいえロムやラム達に勧められて色々なゲームをやっているので封印などに変なイメージを抱いているようだ。

「んえ？ 別にそんなの無いよー」

「あ、そうなの？」

「確かに最初は所々頁が抜け落ちちゃってて、前に私を所有してた人にそれを集めるのを手伝ってもらったりしたけど、その人が殆ど集めてくれたからね、見つけたら回収するって程度でいいよ」

「へえー、前に持ってた人がいたんだね」

「うん。でもその人はある日死んじゃってね、ご主人が居なくなったら私はそのままこの図書館に…って感じ」

「そうなんだ…」

昔の話をしている時のステラの、少し寂しそうな表情がフウには印象的だった。

「…ちょっと変な空気になっちゃったね。さて、それじゃあフウちゃん、改めてよろしくねっ！」

「あ、う、うん。よろしく」

こうして、フウは興味本位で開いた白の魔導書、ステラと出会ったのだった。

「そういえば白の魔導書って言うけど、やっぱり黒の魔導書とかそんな感じの本もあったりするの？」

「え？ 別にそんなのないよ。単に白い本だからそう呼ばれてるだけー」

「ええー…」

それなら普通に魔導書とかグリモワールって名前でも良かったんじゃない、と、どうでも良いことを考えるフウだった。

しかしそれがきっかけだったのかと言わんばかりに翌日、そいつらは現れた。

犯罪組織マジエコンヌ。

そう名乗る組織が突如出現し、ゲームギョウ界はマジエコンヌの脅威に晒された。

マジエコンと呼ばれるコピーツールを手に入れる為に、人々は犯罪神を信仰していき、各国のシェアが奪われ、さらにこのマジエコンによって物の価値が暴落、ショップは枯れ、クリエイターは飢え、もはやゲームギョウ界はそこらの民度の低い無法世界と同じになりつつあった。

「……………」

そしてルウィーの守護女神であるブランもこの状況を打開すべく、犯罪組織の本拠地である『ギョウカイ墓場』へと向かおうとしていた。

妹達に気づかれれば自分もついていくと聞かないと思ったブランは、妹達の寝静まった深夜に教会を出る。

「…行くんだね」

そんなブランを、白いマントを纏った人物が待ち構えていた。

「っ！ フウ…」

そう、フウである。

「大方、わたし達に心配をかけない様にしようとしてたんだろうけど、バレバレだよ」

「…言っておくけど、連れて行く気は…」

「行かないよ」

ブランはてっきり自分もつれてっいつて欲しいと言われると思っていたため、フウの言葉に驚く。

守護女神とはいえシェアが激減した今、多くの人々に信仰されている犯罪組織相手に無事でいられるかもわからない。

それなのについて行こうともせず、止めようもしないフウの返答に驚いたのだ。

「だって…悔しいけど、今のわたしやロムちゃん、ラムちゃんがブランさんについていても足手まといにしかないから」

そう言うフウの表情は、暗いせいでよくわからない。

「…そう」

「でも、一つだけ約束してください」

先ほどまでと違い、急に敬語になるフウ。

「絶対に…絶対に帰ってきてください」

「…ええ、必ず帰ってくる」

大事な妹達や、大事な人を置いてなんて逝けないしね、と付け加えるように言って、ブランはルウイーの闇の中へと消えていった。

「…約束、だよ…」

そして教会の前には、暗い闇の中でも映える白いマントを纏った、悲しげな表情の少女だけが残っていた。

——三年経った今も少女は信じ続ける——

——大切な友達と共に、
帰りを信じて——

次回、紫色の女神

第三話 白い魔導書、そして物語の始動（後書き）

ひとまず序章はこれで終わりです。

フランとの主な絡みは救出後予定です。

一章主要人物紹介

○フウ

― 装備 ―

・ 武器

「ピュアホワイト」

ラムに貰った白いペン型の杖。

・ 防具

「メモリーブレスレット」

フウ専用。灰色のブレスレット。何かに使えるようだが…

・ 装飾品

「振動石の御守り」

フウ専用。たまにブルブルと小さく振動する石の御守り。

・ コスチューム

「ホワイトマント＋ライムコート」

雪原に倒れていた時から着ている全身を覆うくらいの真っ白なフード付きローブとブランに貰ったロム、ラムと同じデザインの制服。

・ アクセサリー

「ホワイトミニリボン＋ライムマフィン」

頭につける小さなリボンと緑色の大きな帽子のセット。

・ プロセッサ装備

「ディーエ・スライト」

ロム、ラム、フウ専用。エラーで装備できなくなったプロセッサユニットの変わりに装備している。

能力はロム、ラムの物と同じ。

雪原に倒れていた記憶喪失の少女。

ルウィーの守護女神ブランに助けられ、その後教会で暮らすことに。

必死に修行を続け、今では三年前よりも大分実力をつけている。
ロムとラムの二人と共にルウィーのシェア回復に努めている。
ちなみに街の人にはかなり信頼されている。
大人しそうに見えて結構無茶をする。
内に狂気を秘めているらしく、窮地に陥ると覚醒する。

○ロム&ラム

ルウィーの女神、ブランの妹の女神候補生。ロムはおとなしい方、
ラムは活発な方の性格を引き継いでいる。
現在はルウィーのシェア回復の為に頑張っている。
ラムは最近フウに構ってもらえてないので少し不機嫌。

○ステラ

白の魔導書。
主にフウのサポートをしている。
主要なイベントでいっつも寝てるため、あんまり台詞が無い。

○ネプギア

ゲームキャラを探しにルウィーへとやってきた、プラネテューヌの
女神候補生。
フウとロムとはなんとか和解できた。

○コンパ

ネプギアと共にルウィーへとやってきた、プラネテューヌの新人ナース。

フウと初めて会った時に、何故（胸を）睨まれていたのかと不思議に思っている。

○アイエフ

同じくネプギアと共にルウィーへとやってきた、プラネテューヌの諜報部員。

フウと最初出会った時に自分と同じくらい苦労してそうね、とか思ってたとか。

○日本一

ゲームギョウ界の平和を守るために戦い続けるぺたんこヒーロー。今のところパーティキャラで一番影が薄い。ヒーローなのに。

○?????

女神様と呼ばれる、謎の人物。
その正体は…

第四話 ネプギア達との出会い（前書き）

今回、フウが某ゆるい百合アニメの主人公みたいなことになってますが、次回からは大丈夫だと思います！ ……多分。

フウ「多分ってなにかな！？ ……そこは絶対って言ってよ！？」

で、では第四話、どうぞっ！

第四話 ネプギア達との出会い

血のように赤く染まった空、荒廃した大地。

そんな場所に、わたしは立っていた。

目の前には…顔は霞がかかったようになっていてよくわからないけど、紫色の髪的女性だというのはわかる。

その女性の手には、禍々しい色をした剣が握られていて、

わたしは…この人にやられたのか、一步も動くことができない。

そして、女性はその剣でわたしを――

「うあああっ!!」

そこでわたしは目を覚まし、ベッドから勢いよく飛び起きる。

「はぁ…はぁ…また…この夢…」

そう、あの犯罪組織マジエコンヌがゲームギョウ界に現れ、ブランさん…四つの都市の守護女神が姿を消した日から、この夢を見るようになった。

この夢がわたしの過去に関係しているのか、これから起こる予知夢

なのかはわからない、けど、これだけはわかる。

あの剣は、嫌な感じがする。

―第一章 紫色の女神―

「ふああゝ……」

ルウイーの都市の街角、わたしはここで人を待っていた。

…あ、言っておくけどマジエコンを売るような人とかじゃないからね？
わたしが待ってるのはロムちゃんとラムちゃんの二人だからね？

今日は二人とゲームショップに行こうって事になってたんだけど、二人が途中でアクセサリーショップに寄り道しだして…それでわたしはそのお店の近くで待たされてる、というわけだ。

にしても、暇だ…わたしもなんか見てようかな…

なんて思っていると、近くでなにやら揉め事が起こっていることに

気がつく。

なんだろう、この辺じゃ見かけない人達だけど…他の都市から来たのかな。

「クソッ、流石に分が悪いか…おっ、おい、そこのガキ！」

「ふえっ？」

なんてぼーっとしながら見ていたら、争っている人達の一人の…ねずみ？　みたいなフードの服を着た、緑色の髪の人がわたしの事を捕まえてきた。って、え？

「動くんじゃネエ！　テメエは人質だ！　へへっ、手エ出せるなら出してみな。そんな時はこのガキの首、コキッとイっちまうぞ！」

そう叫びながら、わたしの首元に武器を当ててくる。

というか、え？　人質？　ひとじち…えっ？

「相変わらず汚い真似を…」

「やめてください！　その子は関係ないです！」

茶髪で青いコートを着た人と薄い紫色の人が止めようとするけど、そんなんじや解放してもらえるはずもなく。

「うるせェ！ 犯罪組織が汚えのは当然だろうが！ んじや、アバヨ！」

そう言って緑髪の人わたしを抱えて走りだす。

「ちょ…え？ ええええええっ！？」

突然すぎて何が起こったのかもわからず、わたしは知らない人に誘拐されてしまった。

「フウちゃん？ フウちゃん？ もう、どこに行ったのよー。ここで待っててって言ったのに…」

「近くの人に聞いてみよ…？」

「うん、そうね」

騒動が収まって静かになった街角で、遅れてやってきたロムとラム。

この時の二人は、まさかフウが攫われていたとは思ってもみなかったのだった。

「はあ、はあ：ここまで来りや大丈夫か：」

ルウィー国際展示場。

前は色々な人がここにあった展示物を見に來たりして賑わっていたんだけど、マジエコヌが現れた辺りから來場者が激減、展示物も撤去されてモンスターの住処になってしまった場所だ。

そこの西館に、わたしとわたしを人質にした誘拐犯さんは來ていた。

「（どうしてこうなった：どうしてこうなった：）」

ただ買い物に來てただけなのに：本当にどうしてこうなった。

抵抗しようにも生憎杖は教会に置いてきちゃったし。ステラも出かけて居ないので返り討ちにあうのが目に見えている。

「さて、こんなガキ、さっさと適当に処分して…」

ああ、わたし、処分されちゃうんだ…

ロムちゃん、ラムちゃん、ミナさん、先立つ不幸をお許しください……死ぬ気はないけど。

「待てーっ！」

と、そこにどこかで聞いたような声が聞こえてくる。

「ゲッ！ 追ってきやがった！？」

追ってきたのは、先ほどの誘拐犯さんと争っていた人達だった。

「その子を放しなさい。そうすれば、今回は見逃してあげるわ」

「ば、バカ言うな！ 大事な人質を手放せるかよ！」

…うん？　ちょっと待って、人質？

「…あのー、つかぬ事をお伺いしますが」

「「「「？」」」」」

「人質のわたしがいるのに、正面から戦おうとなんて、してませんよね？」

「あ…そ、それは…」

…あ、あれ？　なんとなく言ってみただけだけど、まさか凶星だったりしないよね…？

「えと、どうするつもりだったの？」

「何も考えず追いかけてきちゃったですね…」

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。

「…………えっ？ 本当に無計画？」

わたしがそう言うのと、四人は何とも言えない様な表情になる。

「へ、へへ、へへへへっ！ バーカ！ テメエ等真性のバカだな！
本当に何も考えなしかよお！」

…少しでも期待したわたしもバカだったんだね。

「たしか一匹くらい持ってきてたはず…よし。おら、出て来い！」

そう言って誘拐犯さんはディスクのような物を取り出し、それから
モンスターを召喚した。

わー、これが違法ディスクかー、へー、こんなやつなんだー（自棄
になっている）

自棄になってる場合じゃないよね…、このままだと（正直どうでも
いいけど）あの人達もやられちゃうし、わたしもどうなるかわから
ない。

もし助かったとしてもこの誘拐犯さんマジエコノミの人っぽいから
入信させられちゃうかもしれないし…本当にどうしよう。

「フウちゃんを、返せえーっ！」

そんな時、空から聞きなれた声が聞こえてきた。

「あ？ 空から、声——ぎゃあああああっ！！！」

突然の上空からの攻撃により、誘拐犯さんが吹っ飛ばされてわたしは解放された。

「フウちゃん、大丈夫だった？」

「怪我、ない…？」

助けに来てくれたのは先ほどわたしが待っていた二人、女神化したロムちゃんとラムちゃんだ。

「うん。怪我もしてないし、大丈夫だよ」

「な、女神、だとお！？ しかも二人イ！？ ちょ、意味分かんネエんですけど！」

誘拐犯さんも流石に女神が二人も来たので驚いている。

まあ普通は一つの都市に一人しか女神はいないからね、驚くのも無理はないかも。

「フウちゃんをユーカイするなんて、絶対許せない！ フウちゃん、変身して、こいつをコテンパンにしちゃおう！」

「ラムちゃん、わたし武器持っていないよ」

「…あ、そっか…じゃあわたしとラムちゃん、フウちゃんを守るから」

「そうね！ それにこんな奴だったらわたしとロムちゃんだけでも余裕よ！」

そう言ってわたしを守るように立つ二人。

「く、クソッ！ もう女神だろうがなんだろうがどうでもいい！
ぶっ飛ばして——」

「エクスプロージョン！」

「…デトネーション」

「ぎゃああああっ！ 覚えてろおおお…」

誘拐犯さんの台詞が終わる前にスキルで攻撃する二人、容赦ないね。

誘拐犯さんはベタな捨て台詞を残して、お空の星になりましたとき。

「大勝利ー！ わたし達ってばさいきょー！」

「さいきょー…」

喜びながらハイタッチをするロムちゃんとラムちゃん。

誘拐犯さんの出したモンスターの相手をしていたわたしを助けに来た人達もどうやら終わったようだ。

「ん？ 誰、この人達？」

「あ、えっと、わたしを助けようとしてくれた人達だよ」

「ふーん。でも助けてくれなかったんでしょ。じゃあタダの役立たずね」

「…今回ばかりは、何も言い返せないわね」

うわあ、ずばっと言うねラムちゃん。事実だけど。

「あのっ、あなた達がルウィーの女神候補生なの？」

薄紫の髪の子が、突然そう訊いてきた。

：うーん？　なんとなく雰囲気ていうのか、は似てるけど、夢で見た人とは別人っぽいかな。

「うん。ルウィーが誇る双子の女神。ラムちゃんとロムちゃんと、ルウィーの小さな歩く図書館の女神ことフウちゃんとはわたし達のことよ！」

「（こくこく）」

え、なにその通り名みたいなの、わたしそんな風に呼ばれてるの？

確かに物知りとは言われるけど…

「あなたも女神だったの？」

「え？　ま、まあ、一応…？」

そう聞かれて、思わず曖昧に答えてしまう。

正直自分がルウィーの女神としてカウントされてるのか、よくわかってないんだよね。

でも二人がそう言うくらいなんだからそう思われてるんだろうなあ…

「よかった、いきなり会えるなんて…あのね、私も女神候補生なんだよ。お姉ちゃん…じゃなくて、ネプテューヌの妹で…」

「ねぷてゅーぬ？ ってことは、えーと…」

「プラネテューヌだよ、ラムちゃん」

プラネテューヌ。女神パールハートが守護する都市で、中心に建っているプラネタワーが特徴の文明の進んだ都市、だったかな？

で、姉がパールハートことネプテューヌ、妹がパールシスターことネプギアっていう名前だっけ。

とするとこの人がネプギアさんかな。

「そう、それぞれ。あなた、プラネテューヌの女神なんだ」

でも、こんな時に他の国の女神が直々にこんな所まで来るなんて、何が目的なのか…

「うん、それでね。お姉ちゃん達を助けるために私と…」

「…てことは、わたし達の敵ねっ！」

「…敵^{びしっ}」

「…え？ えええ？！」

どうしてその答えに行き着いたの、二人とも。

「ち、違うよ！ なんで敵になっちゃうの！？」

ごもつともです。

「だって、他の国の女神でしょ。きっとルウイーのシェアを横取りしに来たんだわ！」

「そういう女神がいたって…本に書いてあった」

いやまあそんな事を書いた本はあったけどさあ、昔の話だし。

「そんなことしないよ。とにかく話を聞いて…」

「もんどーむよー！ かくごー！」

「ちょ、ちょっと待ってってばー！」

そんな感じで騒ぎながら戦闘を始めるラムちゃんロムちゃんとネプギアさん達。

え？ 止めないのかって？ 無駄だよ。あの二人はああなると人の話を聞かないからね。

さて、わたしは武器持ってきてないし、近くで傍観しようかな。
…決して拗ねてる訳じゃないよ？

…今度武器をしまえるような魔法符でも作っておこうっと。

——フウ「観戦なう」

今日の前で女神様同士の戦いを観戦してるよ

そういうわたしも一応女神なんだけど、武器を持ってないからね…

——

「きゃあ！ いたたた…」

「いたい…うう…」

「あ！ ロムちゃん泣かした！ やっぱ悪いやつだったのね！」

あ、終わった。

というかそれはちょっと理不尽だと思うよ、ラムちゃん。

「そんな…だって今のはいきなり攻撃されたから…」

「あっかんべーっだ！ 今度会ったら絶対やつつけてやるんだからね！」

「…べーっ！」

そういう残して、飛び去っていくラムちゃんとロムちゃん。

……………

「あ…行っちゃった…」

「いや、まだ一人残ってるわよ」

「…いいもん。イジェクトボタン持ってるの思い出したし、それで帰るからいいもん」

それだけ言い残して、わたしもイジェクトボタンを使ってその場を後にした。

…泣いてなんかないもんね。…ぐすん。

その後、取り残されたネプギア達は。

「…なんだったんでしょうね？」

「さあ…？」

「…あの子も苦勞してそうね」

とかなんとか思ってたとか。

——フウ「移動なう…ぐすん」

女神様の戦いの観戦が終わって、街に帰る途中

…泣いてないよ、決して忘れ去られて泣いてたりしないよ…ぐすん…——

イジェクトボタンを使って国際展示場から街に戻ってきたわたしは、ひとまずラムちゃん達を探すことに。

国の中心の都市だから時間がかかるだろうと思っていたけど、案外すぐに見つかった。

「ラムちゃん、わたし何か忘れてる気がするんだけど…」

「…わたしも」

「……それはわたしの事かな？」

「わああっ！ ふ、フウちゃん！」

なんとなく背後から声をかけてみたら、想像したとおりに驚くラムちゃん。

「そ、そうだった、フウちゃん大丈夫だった？」

「あは、やっぱりわたしの事、忘れてたんだね…」

「わ、忘れてなんかないよ！？ ただあいつ等に負けてボロボロだったから引くことしか考えてなくて…」

「いいよ、無理しなくて。どうせわたしは空気だから…」

「…フウちゃん…その、ごめんね…？」

「ふふ…わたしは空気…空気………」

「ふ、フウちゃんがおかしくなった…これも皆あいつ等のせいよ!」

それから10分くらい、ラムちゃんとロムちゃんはわたしに謝り続けていた。

「…そろそろ、おやつ…」

「あー、もうそんな時間なんだ」

気がつくといつの間にやら時刻は3時になろうとしていた。

短時間で色々あったから短く感じたなあ。

「あ、ゲームは買わなくていいの?」

元々の目的ってそれだったし。

「なんか疲れたから今度にする…。今はおなかがすいたからおやつ食べに帰るー」

「（こくこく）」

「そっか。じゃあ一度教会に戻ろう」

二人はもうおやつモードに入っていたので、とりあえず教会に戻ることに。

…なんとなくまた面倒な目にあう予感がするんだけど。

「ミナちゃん、おなかすいたー！」

「おやつ…」

「帰ってきて一言目がそれなんだ…」

ラムちゃんとロムちゃんは教会に着くと、ルウィーの教祖であるミナさんにおやつの催促をする。

というか、なんか見覚えのある人達がいるんですが。

「こら、はしたないですよ。お客さんが来ているんですから、少しガマンしてなさい」

「お客さん…？ あーっ！ さっきの悪い女神！ 悪い女神が攻めて来たー！」

「(びくびく)」

「はぁ…予感的中…」

帰ってきた教会で待っていたのは先程二人が戦ったプラネテューヌの女神、ネプギア一行だった。

はぁ…面倒な事にならないといいけど。

第四話 ネプギア達との出会い（後書き）

ロムちゃんとネプギアの和解フラグをへし折った気がするけど、まあなんとかなるさっ！

ちなみに移動中とかの「――○○――」の間の文章はみんなつぶ風にしたりします。

第五話 配管工のお悩み（前書き）

うーむ、戦闘描写がイマイチな気がする…

第五話 配管工のお悩み

どもー、ルウィーの小さな歩く図書館こと、フウです。

…この通り名(?)、どうせラムちゃんが適当に考えたんだろって思ってたんだけど、…本当に街の人にもそう呼ばれてたなんて思ってたよ…

こ、こほん。まあそれは置いといて、今わたし達の教会に先程なぜか戦うことになった人達(わたしは戦ってないけど)がやって来ていた。

「悪い女神って…何を失礼なことを言ってるんですか!」

「えと、こ、これにはちよつとした訳があつて…」

「あの、実はさっき…」

ああ、わたしの代わりにネプギアさん(と思われる人)が説明をしてくれた。

説明下手だから助かるよ…

「まあ、この子達がそんなことを…大変申し訳ありません」

話を聞いたミナさんは、ネプギアさん達に思いつきり頭を下げた。

「わわ、いいですよ。そんな思いつきり頭を下げなくても」

「いえ、この子達の保護者として、教育者として！ しつかりと謝らせて頂きます！ ほら、あなた達もごめんなさいは！？」

「えーなんでー！？ 悪い女神に謝るなんてやだー」

「わたしも、いや…」

ミナさんが二人に謝るように言うが、それを嫌がるラムちゃんとロムちゃん。

というか、

「わたしも謝るの？」

「当たり前です」

ええ…わたしただの被害者なのに…

「言うことを聞きなさい。ほら、早くごめんなさいって！」

「ふーんだ。わたし達、悪い女神におそわれたただけだもーん」

「戦って、負けた…痛かった…」

この二人って、以外と頑固なんだね…初めて知ったよ。

そんなとき、とうとう痺れを切らしたみなさんがわたし達に一言。

「……………。ご・め・ん・な・さ・い・は？」

「ごめんなさい」

「「なさい（びしっ）」」

黒いオーラを放つみなさんに気圧されて、わたし達は反射的にネプギアさん達に謝っていた。

というより、なんでわたしまで謝ってるんだろう…

その後、みなさんに言われてネプギアさん達と改めて自己紹介をした（ラムちゃんとロムちゃんは渋々といった様子だったけれど）

淡い紫色の髪に十字ボタンのような髪飾りをつけた人がわたしの思っていた通り、ネプギアさん。

桃色の髪にCの形をした飾りのついたカチューシャをつけた、…胸が大きい人が、コンパさん。

茶髪で双葉のようなリボンをつけて、青色で小さいカラフルなポケットがたくさんついたコートを着た、四人の中では一番まともそうな人が、アイエフさん。

最後に青い髪で、赤いマフラーをなびかせ（前に思ったけど、風が無くてもなびくのはなんでだろう）、青いペンギンのリュックを背負った、ぺたんく「ぺたんこってゆーなっ！」：な、ヒーローみたいな格好の人が、日本一さん。

それぞれ自己紹介を終えると、ネプギアさんがこんな事を言ってきた。

「それでその、できたらなんですけど、この子達にも協力してほしいんですけど…」

「…保護者としては、素直にうなずけません。何分、まだ幼い子達ですから、国の外に出すのは早いかと…もつとも、この子達自身が、女神としてそう望むのなら、話は別ですが…」

「…わたしは、二人の判断にまかせるよ」

まあ、もう答えは出ているようなものだけど。

「やだ！ 敵と一緒になんて！」

「ラムちゃんが嫌なら、わたしもいや…」

ですよー。

「…ということなのでわたしも…すみませんね」

二人が嫌がっているのにわたしだけ行くって言うのもあれだしね。

「はぁ…望み薄ね…。まあ、こっちの要件は伝えたんだし、そろそろお暇しましょうか」

要件っていうのは、多分わたし達が来る前に話していたんだろう、それが済んだのでもう帰るみたいだ。

「すみません、何もお力になれず…あ、最後に一つだけ。最近、この国は非常に治安が悪くなってるんです。近々大事件が起こる、なんて噂まで流れているほどで…ただの噂だとは思いますが、くれぐれもお気をつけてください」

そう、わたしが最近気になっているのはこれ。

所詮噂は噂だろうと思っていたんだけど、でも、何か嫌な予感もある。

ステラがないのはこれについての情報を探しに行かせているから

だ、そろそろ帰ってきてもいいと思うけど。

そしてネプギアさん達と別れた後、ひとまずステラが帰ってくるまで自分の部屋で、多少の荷物が入れられるような符術の符を作るところにした。

そういえば、プラネテューヌにはNギアとかいう、アイテムの保管や管理ができる携帯ゲーム機型万能デバイスがあるって聞いたけど、そういうのが欲しいなあ。

——フウ「Nギア、かあ……」
一度実物を見てみたいなあ——

「ふう、これでいいかな」

「ただいまー」

おお、狙ったかのように帰ってきたよ。

「帰ってきたね、どうだった？」

「えっとね。なんか最近ゲームキャラっていうのを探しているヤツが居るらしくて、そいつらを見かけるようになったくらいから、治安が悪化し始めたみたい」

「とすると、やっぱりゲームキャラを探してるのはマジエコンヌかな…」

ゲームキャラっていうのは、えっと、確か…

…古の女神様達が生み出した、世界の秩序と循環を司る存在。

彼女達は各国の土地に宿り、その土地に繁栄をもたらし続ける。

そして有事の時に、その時代の女神を助け、悪を滅ぼすだけの力を秘めている…だったかな。

それに、ルウイーのゲームキャラは重要な役目があるとか…

……確かに、それが奪われでもしたら大事件が起こりそうだね。

「ありがとステラ。それじゃあひとまずゲームキャラを探してる人を見つけないとね」

「それはいいけどさフウちゃん。誰だかわかんないよ?」

「一応、心当たりなら一人いるから…」

さっき吹っ飛ばされてたけど、多分ああいうタイプの人はやられてもめげないだろうから戻ってきてるだろう。

街の外にでる可能性も予想して、いつものペン型杖とマントを着てわたしは教会を出た。

「とはいったものの…どこを探したらいいかな…」

探すと言ってもルウィーは国の中心都市、中々に広いので人一人探すのは結構大変だ。

んー、やっぱり路地裏とかそういう場所にいたりするのかな？

と、考え事をしながら歩いていると、前方に見知った人を見かけた。

なんだか困ってるようにみえるけど…

「マーリヨさん、何してるんですか？」

「ん？ ああ、フウちゃんか。いやー、ちょっと困ったことになってね」

この赤い帽子に青いツナギ：ではなく灰色の作業着を着たおじさんはマリーヨさん、この国で配管工のお仕事をしている人だ。

というか本当に困ってたんだ：

「困ったこと：ですか？」

「ああ、今朝ちょっとニテールと喧嘩をしてしまったってね。その時仕事に使う土管を何個か爆破しちゃったんだ」

「ば、爆破：それは大変ですね：

土管が爆発するような喧嘩って、喧嘩って呼べるレベルなのかな：

あ、ちなみにニテールというのはこの人の弟さんだ。

「直す為の土管の欠片を取りに行こうにも今日は前から欲しかったゲームの発売日で、でも土管が直せないと明日の仕事に支障がでる：それで悩んでたんだ」

「ゲームですか：今はマジエコンヌがいるせいか、販売数も少ないですからね」

仕事とゲームを比べるのはどうかと思うけど：

でも、マジエコンに頼らずちゃんと買おうとしてるのはいいことだ

よね。

「それでしたら、わたしが取りに言ってきましようか？」

「え、確かにフウちゃんは結構腕がたつから、お願いできるのならしたいけど」

「構いませんよ。特に用事ありませんですから」

本当は人探しの途中だけど、困ってる人は見過ごせないしね。

「そうかい？　ならお願いしようかな」

「はい！　任せてください！」

ということで人探しは一時中断して、マリーヨさんのお願いで土管の欠片を集めに行くことになった。

「はー、本当にフウちゃんはお人好しだねー」

「何言ってるの、困ってる人を放っておくわけにもいかないでしょ？」

「それをお人好しって言うんだけどね」

ステラ（本）と雑談をしながら、わたし達は世界中の迷宮へとやってきていた。

土管の欠片はここに現れるドカーンというモンスターが落としたはずだ。

「じゃ、いこっか」

そういつてわたしはさっき作った術式符から杖を取り出し、奥へと進んでいく。

「ふ、ふふふふ…さあ、狩りの時間よ!」

「な、なんかフウちゃんのテンションが変身したときみたいに…ステラがいない間に何かあったのかな…」

立ち塞がる雑魚をばっさばっさと斬り倒すわたしの後ろ姿を見て、ステラはそんなことをおもっていたとか。

「んー、結構奥の方まで来たけど、いないなあ」

「今まで倒してきたやつの中に紛れてたんじゃない？」

「ううん、あいつは硬いからいたらわかるだろうし」

「あの状態のフウちゃんなら土管も叩き斬れそうな勢いだったけどね」

とうかわたしで敵を叩くのやめてくれないかなあ、痛いし。とかなんとか聞こえてきたけどスルーしておく。

ドカーンは名前の通り緑色の土管なので、いたらすぐにわかるだろう。

そうそう、丁度前にいるような…ってあれじゃん。

「まあいいや。ステラ、適当な魔法でいっきに仕留めるよ」

「はぁーい」

やる気があるのかよくわからない返事と共に、ステラが詠唱を始める。

それを確認してから、わたしも杖を構えてドカーンへと突撃する。

ドカーンは後ろを向いている（模様が描いてあった方が前だったから、多分）から、所謂奇襲攻撃というやつになる…だろう。

「ということで隙ありっ！」

まずはどのくらい物理攻撃が効かないかを試すために、杖で思いっきり叩きつける。が、

ガァンッ！

「か、硬っ！」

殆ど攻撃が通ってない感触。

実際に戦うのはこれが初めてなので、ここまで攻撃が通らないとは思っていなかった。

「っ、くうっ…！」

背後からの攻撃に怒ったドカーンが反撃を開始してくる。

その身体全体を使つての一撃は重く、防ぐだけでも腕がビリビリと痺れる。

「つつう…まだまだあ！」

まだ少し痺れが残っているけど気にしないで、わたしは杖を半回転させて持つ。

そして持ち手の先端に魔力を集め、剣の形にして纏わせる。

ちなみにこれ、覚えるのに1年くらい掛かった技術だ。

最初は質量が無かったり、形状が安定しなかったりで全然うまくいかなかったからなあ…

…ってそんな感傷に浸ってる場合じゃない、あいつを倒さないと。

「はああっ！」

再びドカーンへ接近し、魔力の刃で叩き斬る。

ズバンツと今度は確かな手応えがあったから、きつとこいつは物理に強くて魔法に弱いとかそんなんだろう。

「うりやうりやりゃーっ！」

振り下ろした状態から斬り上げ、横薙ぎ、袈裟斬りと連続で斬撃を叩き込んでいく。

「フウちゃん、準備できたから離れてー！」

「わかったー！」

どうやらステラの詠唱が終わったようなので、一度ドカーンから距離を取る。

「えいつ、凍っちゃえ！」

そんな掛け声と共にドカーンの足元が光り、次の瞬間にはドカーンは氷漬けになっていた。

「これで…終わりっ！」

そしてわたしは杖をまた持ち直し、今度は杖の頭に魔力を収束させ、思いつき氷を叩きつけた。

氷はドカーンもろとも崩れ、その場にはドロップアイテムだけが残った。

「よし、余裕だったね！」

「そうだねー（本当はちよつとダルかったから手を抜いて詠唱を遅らせてただけど、言わなくても良いよね…）」

今何か聞き捨てならないことが聞こえた気がするけど、ま、いつか。その後はドカーンの落としたアイテムを回収して、特に何も起こらず街へと戻った。

——フウ「はあ、スッキリした♪」

なんというか、最近色々ドタバタしてたせいか、モンスターを狩ったら色々スッキリしたよ♪

うん、ストレスの発散は大事だよね♪——

「ありがとう！ 本当に助かったよ！」

「いえ、力になれたのならよかったです」

街に戻ったわたし達は、マリーヨさんの家に集めた土管の欠片を届けに向かった。

マリーヨさんも無事にゲームを買えたみたいだし、うん、よかった。

「それじゃ、これ。少ないけどお礼だよ」

そう言ってマリーヨさんはクレジットの入った袋を手渡してきた。

「わ、い、いりませんよ。わたしが好きでやった事なんですから」

お金を貰う為にやった訳じゃないので、返そうとするけど、

「いや、フウちゃん来るまではギルドでお願いしようかと思ってたから、今回のもちちゃんとしたクエストだよ。だから受け取ってくれ」

「で、ですけど…」

「いいからいいから」

結局押し負けて受け取っちゃうんだよね…

うーん…その内ちゃんとはっきりと断れるようにしないとなあ…

「とうかさ、フウちゃん。ゲームキャラを狙ってる人はいいの？」

「……あ。」

気づいたときには既に空は赤くなっていた。

仕方が無いので、あの誘拐犯さんを探すのは明日にする事に…というかすっかり忘れてたよ…

第五話 配管工のお悩み（後書き）

ちなみに下っ端と呼ばれてる事を知るまで、フウはリンダの事を誘拐犯さんと呼び続けます。

○アタックチェンジ

杖を逆さに持ち替え、杖の先から魔力の刃出した物理斬撃特化モードに切り替える。

○フローズンブレイカー

杖の頭に魔力を収束させ、氷漬けになった対象を氷ごと砕く。

第六話 ルウィー女神候補生の日常（前書き）

今回の話を読んで変な考えたら、きっとあなたはロリコンです。

そしてこんな話を書いた私もロリコンでしょう。

…というかラムちゃんのモノローグの口調、これでいいのかな…

第六話 ルウィー女神候補生の日常

ふふん、フウちゃんだと思った？ わたしよ、ルウィーの女神候補生、ラムよ！

今回の主役はフウちゃんじゃなくてわたしなんだからね！

えっと、それで。今はロムちゃんフウちゃんと一緒にお部屋でゲームをしているのよ。

「えいっ、えいっ！ ここで横スマ！」

「あっ！ フウちゃんやるわね！」

「ふふん、わたしだって練習してるんだから！ …ああっ！」

「…隙あり」

やってるゲームはス〇ブラXで、フウちゃんがわたしを落としてその隙にロムちゃんがフウちゃんを落とした所。

ちなみにステラちゃんは結構前に残機が無くなってたわ。

「はあー、三人とも上手だねー。私はこういうゲームは殆ど苦手だからなあ…」

「そう？ でもステラは頭を使うゲームが一番でしょ？」

「まあ、そういうゲームはね」

フウちゃんの言った通り、この前わたし達があるゲームの謎解きがわからなくて詰みかけてた時、ステラちゃんは何度もヒントと outcomes してくれて助けてくれたの。

で、その後にクイズのゲームをやってもらったらすごい点数を取ったのよね、まさかミナちゃんの記録も抜くなんて思ってた…

「三人ともー、お風呂が沸きましたよー」

四人でそんな話をして盛り上がっていると、ミナちゃんの声が聞こえてきた。

「「はーい」」

わたしとロムちゃんとフウちゃんは返事をして、ゲームを片付ける。

「そういえば、ステラちゃんってお風呂入らないよね。なんでー？」

そこでわたしは前から気になっていたことを聞いてみる。

「いや、私はさ、ほら…」

「…ステラちゃん、お風呂嫌いなの…？」

「でもそれだここに来てからずっと入ってないよ？」

あれ、そうだったんだ。嫌がってるけど知らない間にミナちゃん辺りに入れられてると思ってたんだけど。

「…あのねえ。今は人の姿をしてるけどさ、私元々は本なんだからね？ だから水とかお風呂はダメなの」

「「「ああ」」」

ステラちゃんの答えに、わたし達は納得したような声を出す。

「いや…普通に考えたらわかるでしょ…」

だって、ステラちゃんいつも人の姿をしてるから本だって事忘れちゃうんだもん。

（ちなみにミナさんはその事をわかってて、わたしとラムちゃん口ムちゃんしか呼ばなかったそうです by フウ）

「フウちゃん、髪洗ってあげるー!」

「…わたしも」

所変わってお風呂場。

わたしとロムちゃんはフウちゃんの髪を洗ってあげようとしていた。

「え? い、いいよ。ほら、わたし髪長いから洗うの大変だし…」

「いーのいーの! ほら、座って座って」

そう言って少し無理矢理座らせる。

だって一度だけでもフウちゃんの長い髪の毛を洗ってみたいと思っ
てたんだもん。わたしより長いし。

「ほんとに、フウちゃんの髪って長いよねー」

「…でも、いつもさらさらしてる」

フウちゃんの髪をごしごしと洗いながら、思ったことを口にする。

こんな長い髪を毎日洗ってるなんて、フウちゃん大変じゃないのかな？

「ま、まあ、髪はきれいにしていたからね…って泡！ 泡が顔につ！ 痛い痛いいたいっ！ 目、目に入ったっ！」

「わ…だ、大丈夫…？」

「大丈夫よ。仮にも女神なんだし、泡が目に入っただけで死んだりしないでしょ」

「泡なんかで死んでたまるか…っ！ というか本当に痛い。何も見えないよー…うう…」

あ、ちよつと涙声になってる。

「じゃ、流すよー」

「うー、目が、目がー…」

泡を流してる間、フウちゃんはどっかの大佐みたいな台詞を呟いていた。

「うゆ…ぐす…まだ少し痛い…」

「じゃあ、次は身体…」

「あ、後は自分で洗うっ！」

と言ってフウちゃんはそっぽを向いちゃった。

…怒らせちゃったかな？

お風呂から上がってパジャマに着替えて、歯磨きも終わって後は寝るだけ。

「…で、どうして二人ともわたしの部屋のベッドにいるのかな？」

だからわたしとロムちゃんは、フウちゃんの部屋に来ていた。

理由？ そんなの…

「…今日はフウちゃんと一緒に寝たかったから…」

「いいでしょー？ 別に減るような事じゃないんだからー」

「いや、減らないけどさ…」

それだけの理由よ。文句あるの？

「…嫌、だった…？」

「い、嫌、じゃ…ないけど…」

「…じゃあ、いい…？」

「うう…もう好きにして…」

最初は困ったような顔をするけれど、最終的には折れちゃうフウちゃん。

…むう…でもなんか、ロムちゃんにだけ優しくしない？

「…ぎゅーっ！」

「ひゃっ、な、何？ どうしたのラムちゃん？」

「…フウちゃんロムちゃんにばかり優しくするんだもん」

「そ、そう、だった？」

「そうだったの！ だから今日はこうやって寝るの！」

そう言ってちよつと強めにぎゅつとする。

：なんだろう、フウちゃんにこうすると不思議と落ち着く。

なんていうか、お姉ちゃんみたいなの…

：わたしと同じくらいの子なのに、変なの。同じ女神だからかな？

でも、あったかいからいいか…

なんて考えながらぎゅつとしていたら、いつの間にかわたしは眠っていた。

第六話 ルウィー女神候補生の日常（後書き）

ラムちゃんとロムちゃんの頭文字ってRとL、どっちなんでしょうね？

一応作者の判断でゲーム中のイベントからロムちゃんはR、なのでラムちゃんはLにしていますが。

もし間違ってたら報告してくださると助かります。

第七話 和解（前書き）

今回はロムちゃん視点です。

第七話 和解

「うう…どこに落としちゃったんだろう…」

朝。

朝ご飯を食べ終わって自分の部屋に戻ろうとしてる途中で、慌てた様子のフウちゃんを見かけた。

「…フウちゃん…？ どうしたの…？」

何かを探してるみたいだったから、わたしにも手伝えたらと思って声を掛けてみる。

「あっ、ロムちゃん…その…ね、ロムちゃんとラムちゃんとお揃いで買ったペンをどこかに落としちゃったの…」

話を聞いてみると、フウちゃんはわたしとラムちゃんのお揃いで買ったペンをどこかに落としちゃったみたい。

ペン…小さいから一人だと探すの大変だね…

「…わたしも、手伝う」

「え？ いいの？」

「（こくこく）」

無言で頷いて答える。

お友達が困ってるのに、放ってなんて置けないから…

「ありがとう、ロムちゃん」

「…お部屋はもう探した…？」

「うん。けど見つからなかった。多分、昨日のあの時に落としたんだと思う」

フウちゃんの言うあの時っていうのは、きっとフウちゃんがゆーかいされた時のことだよね…

ということとは、フウちゃんがゆーかいされた場所か、フウちゃんを助けた場所までの間に落ちてるはず。

「…それじゃあ、一緒に探そう…？」

「う、うん！」

ということで、わたしとフウちゃんは街へ出た。

「うう…どこにいっちゃったんだろ…」

「見つからないね…」

あれから暫く街を探し続けたけど、ペンは見つからなかった。

…ということは、街の外に落としたのかな…

「ねえ。えっと…ロムちゃんとフウちゃん、だっけ？」

フウちゃんと二人で落ち込んでいると、急に声をかけられる。

声のした方を見ると、昨日の悪い女神がそこにいた。

「あなたは…」

「あ！ 悪い、女神…（びくびく）」

この女神には昨日痛い目に遭わされた…思い出したらすこし涙がでてきた。

「違うって、悪い女神じゃないよ。だから、そんな怖がらないで、ね？」

そう言ってくるけど、また痛い目に遭わされたら…と、思うと、やっぱり怖い…

「ロムちゃん、大丈夫だよ。きっとこの人は悪い女神じゃないよ」

「え…？ で、でも…またいじめられるかも…」

「いじめないよ、きっと。昨日は急すぎてわからなかったけど、今みたら心の優しい人だってわかるもん」

……ふ、フウちゃんがそういうなら…

「……うん。フウちゃんを、信じるよ…」

「うん。ありがとう……（今日はラムちゃんと一緒にじゃなくてよかったかも…）」

…？ 今、フウちゃんが何か言ってたような…

「それで、えっと、何のようですか？」

「えっと、フウちゃん達も迷子なの？ 私も皆とはぐれちゃって…」

「…迷子、ちがう。ペン、探してた…」

「ペン？」

「ラムちゃんとロムちゃんの二人と一緒に買ったペンです。おそろいでとっても大切なんですけど…どこかに落としちゃったんです」

大切…フウちゃんも、大切にしてくれてたんだ…

「そうなんだ…どこで落としたか、わかる？」

「多分、昨日捕まった時です。でも、街にはありませんでした…」

「そっか…じゃあ、あの時の道を辿れば見つかるかもしれないね。私も一緒に探してあげるから、元気出して」

「…一緒に探して、くれるの？」

「うん。暗くなっちゃったら見つけにくいから、早く行こう。さあ」

「あ、ありがとうございます」

「…うん」

どうしてか、わからないけど、昨日の女神と一緒に探してくれることになった。

でも…どうして、一緒に探してくれるんだろう…？

昨日のダンジョンに向かう途中で、わたしは女神に話しかけていた。

「…お姉ちゃん」

「……え？　もしかして、私の事？」

お姉ちゃんと呼んで、最初はぼかんとした表情だったけれど、少しするとそう聞いてくる。

わたしはそれに、こくりと頷いて答える。

「や、やだ。嬉しいけど、なんか恥ずかしいな…お姉ちゃん、か…
…だ、ダメダメ、やっぱり！　えっと、名前で呼んでくれないかな
？　ネプギアって」

「…ネプギア、ちゃん」

「うん。なあに？　ロムちゃん」

「お姉ちゃんの事、知ってる？」

三年前くらいから、突然いなくなったお姉ちゃん。

ミナちゃんに聞いてもずっとはぐらかされてたので、この女神…ネプギアちゃんならなにか知ってるかと思って聞いてみることにした。

「お姉ちゃんって、ブランさんの事？　知ってるよ。あんまり話した事ないけど、素敵な人だね。知的で、神秘的っていうか」

…普段のお姉ちゃんは、その通りかもだけど、怒ると性格が変わっちゃうんだけどね…

…じゃなくて。

「…お姉ちゃん、帰ってこないの。今、どこにいるの？」

わたしが、一番聞きたかった事をネプギアちゃんに聞く。

「あ：ブランさんは、ギョウカイ墓場って所で捕まっちゃってるの。
お姉ちゃん達と一緒に：」

ネプギアちゃんの言葉を聞いた時、一瞬だけフウちゃんも反応した
ような気がした。

「：ぐすつ。お姉ちゃん、会いたい：」

お姉ちゃんは、今、わたしの知らない所に捕まっているらしい。

：捕まってるって事は、もう会えないのかな：

そう考えると、涙が出てきてしまった。

「あああ、な、泣かないで。大丈夫だよ、私が絶対に助けてみせる
から。：あの時は何もできなかったけど、今度こそ：だから、ほら、
泣き止んで？　ね？」

そう言ってネプギアちゃんが慰めてくれる。

「ぐすつ：（こくり）」

「ほっ、よかった：ほら、先に進もう？」

ネプギアちゃんがわたしの手を引いてくる。

ネプギアちゃんと手を繋いで進む途中で、フウちゃんがとても悲しそうな顔をしてたけど、どうしてか声をかけられなかった。

「捕まった後、ここに連れてこられたんだよね。街になかったのなら、きっとここに落ちてるよ」

「……………」

「…フウちゃん？」

「…え？ あ、はい。そう、ですね」

昨日の場所に辿りついたわたし達は、そこで再びペンを探し始めた。

…でも、さっきからフウちゃんの様子がおかしい。

上の空っていうのかな…なんかさっきわたしがネプギアちゃんに話を聞いてからずっとそんな感じ。

フウちゃんに話しかけようと思ったけど、話しかけ辛くて、ネプギアちゃんと話すことにした。

「ネプギアちゃんは…なんでルウィーに来たの？」

「ゲームキャラに会いに来たの」

「…っ！ ゲーム、キャラ…」

ネプギアちゃんの発した単語に反応するフウちゃん。

?? ゲームキャラ？ なんだろう？

「フウちゃん、知ってるの!？」

「あ、いえ、知ってるだけで場所は知りません。…ただ…」

「…？ ただ？」

「…い、いえ。これは他の人に話すようなことじゃないでした。ごめんなさい、なんでもありません」

そう言って、ペンを探す作業に戻っていくフウちゃん。

…フウちゃんは、ゲームキャラについて何か知ってるのかな…？

「…あ、ごめんね。えっと…私一人の力じゃ頼りないから、ゲームキャラに力を貸してもらおうと思って来たんだよ」

「…でも、ここ、プラネテューヌからすごく遠い…」

プラネテューヌからここにはずっと北側の都市だから、来るのに何日も掛かるはず…

なのに、どうして…？

「大したことないよ。お姉ちゃん達を助けて、世界を救うためだもん」

大したことない…

すごい…お姉ちゃん達を助けるためにそんなに頑張れるなんて…

「そうそう、ラストイションにも行ってきたんだよ。そこにはユニちゃんって子がいてね。…本当はユニちゃんや、ロムちゃんとフウちゃん、ラムちゃんにも一緒に来てほしいんだけど…」

「…一緒に？」

「うん…でも大丈夫だよ。アイエフさんにコンパさん、日本一さんもいるし。私達だけでも、ちゃんとお姉ちゃん達を助けてみせるから」

「……………」

…どうして、そんなに頑張れるんだろう…

「ここにはないみたいだね。フウちゃん！ もうちょっと奥まで行ってみよー？」

「……あ、はい！」

ネプギアちゃんはフウちゃんを呼び戻して、更に奥へと進んでいった。

わたし達も、それに続く。

「うーん、ないなあ…。絶対ここだと思うんだけど…」

「…どうして、そこまでして頑張ってくれるんです…？」

今までずっと黙っていたフウちゃんが、急にネプギアちゃんにそう聞いてきた。

「だってフウちゃん困ってたし、放っておけないよ」

「ですけど、ネプギアさんはお姉さん達を助けるために旅をしてるんじゃないんですか？」

「あはは、そうだね。あんまり寄り道してちゃダメだよ。でも、目の前の困ってる人を無視して助けても、お姉ちゃんは喜んでくれないと思うんだ」

「……………」

あ…いつもフウちゃんが同じ事言ってた。

目の前に困っている人がいたら、見捨てちゃダメだからねって…

「きっと逆の立場なら、お姉ちゃんもフウちゃんの事助けたと思うし、だから私も…」

「そう、ですか…」

そう言ったフウちゃんは、無表情だったけれどどこか嬉しそうな顔をしていた。

「…あ、あったよ！ ペンってこれの事？」

「あ…！ は、はい！ わたしのペンです！」

そんな時、ネプギアちゃんがフウちゃんのペンを見つけた。

「よかったー、やっと見つかったー。結構時間経っちゃったけど大丈夫？」

「…あゝも、もうこんな時間!？」

「ラムちゃん、怒ってるかも…」

今日はお昼に三人で一緒に街のスイーツを食べに行く約束をしてたから、きつと遅れて怒ってるかもしれない。

「そっか、きつと心配してるよね。早く帰ってあげたほうがいいよ」

「は、はい」

「(こくこく)」

頷いて、わたしは帰ろうとしたけど、フウちゃんに止められる。

…あ、お礼…

「あ、あの…」

「ん? どうしたの?」

「あ…ありがとうございます！」

一緒に探すのを手伝ってくれたお礼を、ネプギアちゃんにする。

でも、すごく恥ずかしかったから、すぐに走り出す。

「ありがとうございます！　ってロムちゃん！？　置いてかないでーっ！」

慌ててわたしの後ろからフウちゃんも追いかけてきた。

こうして無事にフウちゃんのペンは見つかって、わたし達はルウイの教会に帰った。

ネプギアちゃんと少し仲良くなれたし、ちょっとよかった…♪

―帰宅後―

ラム「あーっ、やっと帰ってきた！　どこに行ってたの！？」

フウ「ごめんね、二人でペン探してたの。昨日落としちゃったから」

ラム「ペン？　そうだったんだ…もう、言ってくれば一緒に探したのに。何も二人だけで行かなくなっちゃったって…」

ロム「二人だけじゃなかった。ネプギアちゃんも、一緒…」

ラム「ネプギア、ちゃん？」

フウ「ああ…ええと…」

ロム「困ってたなら、助けてくれた。すごく、優しかった…」

ラム「な、何言ってるの！？　あいつは敵よ！　悪い女神なのよ！」

フウ「あ、あの、二人とも…？」

ロム「…そんなこと、ないと思う」

ラム「え…？　どうしちゃったの？　あ、わかった！　あいつにヘンな事吹き込まれたのね！」

ロム「…ちがう」

フウ「あの一…」

ラム「じゃあどうして！？」

ロム「…いじわるな事言うラムちゃん、やだ」

フウ「あ、ろ、ロムちゃん!？」

ラム「ま、待ってよロムちゃん! うう、ロムちゃんがあんなこと言うなんて…全部あいつが! あの悪い女神が悪いのよー!」

フウ「あぁっ! ラムちゃんまで! …はぁ…なんとなくこうなるような気がしてたよ…」

ステラ「…フウちゃんも大変だね」

フウ「いたなら止めてよ…」

その後、すぐに仲直りした二人と一緒にルウイーのスイーツ店に行きました。

第八話 キラーマシン（前書き）

今回ちょっと残酷な表現ありかも？

…うーん、あのゲームやってたせいかな…？

第八話 キラーマシン

「ゲームキャラが壊されて、キラーマシンが復活した…?!」

二人とスイーツのお店に行って教会に帰ってくると、ネプギアさん達とミナさんがそんな話をしていて、思わずそう口にする。

そういえばキラーマシンっていう凶悪な兵器がどこかに封じられているって何かの本で読んだっけ。

ルウィーのゲームキャラが担っている重要な事ってこれの封印だったんだ。

でも…キラーマシンってどこかで聞き覚えがあるんだよね…本で読んだとかじゃなくて、もっと前に…

「そうですか、キラーマシンが…」

「それで、勝てないから逃げてきたの？ なっさけないわね！」

「ラムちゃん、キラーマシンって生半可な攻撃じゃ歯が立たないやつなんだから、こればかりは仕方ないよ」

実際の防御力は見たことないから知らないけど、ラムちゃん達を退けたネプギアさん達で敵わなかったくらいだし…

「…ケガ、してない？」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「むっ、ロムちゃんこんなやつのこと心配なくていいの！」

相変わらずラムちゃんはネプギアさんの事が嫌いなのね。

いつかラムちゃんにもネプギアさんと仲良くなって欲しいけど…

「それで、あのキラーマシンってのは何なの？ こっちの攻撃がまるで効かなかったけど」

「遙か昔、犯罪神が造り出したとされる殺戮兵器です。その戦闘力は…今更説明するまでもないでしょう」

まあ、ネプギアさん達は実際にその殺戮兵器と戦ってきたんだしね。

「ルウィーには数十体…あるいは数百体のキラーマシンが封じられていると云われています」

「す、数百体…？」

「あんなのが数百体…冗談にしても笑えないわね」

数十体くらいならまだ頑張ればなんとかなるかもしれないけど、数百体はキツイね…

「ふん、何百体でもだいじょーぶよ。わたしとロムちゃんとフウちゃんだけでーんぶやっつけちゃうから！」

「…がんばる」

「頑張ってどうにかなる相手ならいいんだけどね…」

「現実的ではないでしょうね。ですからわたし達もゲームキャラの力を借りて封印を施していたのですが…」

「バラバラにされちゃいました…ゲームキャラのディスク」

そう言ったネプギアさんの手には、見るも無残に破壊されたディスク。

うーん…これ、直せばいいんだけど…

「ともかく、なんらかの方策を講じましょう。幸い犯罪組織もすぐに仕掛けてこようとはしていないようですし」

「それだけ入念に準備してるってことでもあるわよ？」

「…それでも、猶予があることに変わりはありません」

ん、あれ…待って、直す…？

「あっ！ そうだ！」

「（びくっ）」

「ふ、フウちゃん！ びっくりさせないでよ！」

急に大声を出したせいで、二人が驚いちゃったみたいだ。

「ご、ごめんね。でも、多分それ直せるよ」

『え！？』

わたしがそう言うと、その場にいた全員が驚きの声を上げる。

というか、一斉にこっち見られるとちよつと怖い。

「そ、それ本当なの、フウちゃん？」

「う、うん。多分、あの子なら…確か最近またこの街に来てたから、探せばいるとおもうし…連れてこよっか？」

「今は少しの可能性でも良いです。お願いできますか？」

「わかった。じゃあ連れてくるよ」

さて、と。じゃああそこに行ってみようかな。

んー…あ、いたいた。

商売する所を変えてなくてよかった。

「おい、がすとちゃん！」

「誰ですの？ がすとは今とってもいそがしいの…って、ふうちゃんでしたの」

この語尾が特徴的な、がすとくんというキャラクターの帽子を被った子はがすとちゃん。

前にダンジョンでモンスターの成群に襲われている所を助けてから知り合った子だ。

「よかったー。まだ街を出てなくて」

「? 何かご用ですの?」

「えっとね、ちょっとお願いがあつて…」

——説明中——

「ゲームキャラのディスクが壊れたから、直して欲しいんですの?」

「うん…直せるかな?」

「直せるですの」

「直せるんだ…流石錬金術士…」

ちなみにがすとちゃんは遠い国から来た錬金術士なの。

錬金術っていうのは、元素を組み合わせで新しい物質を生み出す術…って本に書いてあった。

詳しいことは見たことないからよくわかんないんだよね。

「ゲームキャラのディスクは何度か直したことがあるのです。でも実物を見てみないことには必要な材料がわからないのです」

「あ、じゃあついてきてくれるかな？ 壊れたディスクは教会にあるから」

「わかったですよ」

ということなので、がすとちゃんを連れて一度教会に戻ることに。

「ふうむ…これは…」

「…誰？ この子」

「旅の錬金術士のがすとちゃんです」

がすとちゃんを連れて教会に戻ると、アイエフさんにそう聞かれたのでディスクを調べているがすとちゃんの代わりにわたしが紹介する。

「錬金術って、あの錬金術ですか？」

「コンパさんの言ってる錬金術がどの錬金術かはわかりませんが、多分ご想像と合っていると思います」

「わかりましたの。このタイプを直すには、レアメタルとデータニウムという素材が必要ですの」

「分かりました。それはどこにあるんですか？」

レアメタルにデータニウム：それなら：

「それなら、確かルウィー国際展示場の：わたしが連れ去られた辺りと、世界中の迷宮のモンスターが持ってたと思います」

「とすると、手分けした方が効率的ね」

「でしたら、ネプギアさん達は展示場をお願いしますか？ あっちならわついが捕まってた場所の奥に進めばいると思いますので」

場所を知らないネプギアさん達を迷宮に行かせるより、一度行った事がある展示場の奥に向かわせた方が早いだろうし。

迷宮の方はわたしが知ってるしね。

「わかったよ。あ、所でどんなモンスターが落とすのかはわかる？」

「ああ、はい。ええつと…メタルシエルって名前のまんまのモンスターが落とすと思います」

「了解よ。それじゃあさっさと手に入れてきちゃいましょう」

場所とモンスターの外見を教えると、ネプギアさん達は教会から出て行った。

「じゃあ、わたし達も行こうか」

「大丈夫なんですか？　今世界中の迷宮にはキラーマシンがいるはずですが…」

「奥の方に行かなければ大丈夫だよ。心配しないで」

「ですが…一教育者としてはあなた達を危険な場所に行かせるわけには…」

もう、ミナさんは心配性だなあ。

「ミナちゃん。心配、しないで…？」

「そうよ！　わたし達は誰にも負けないもんね！」

「それに、この国が大変な事になるかもしれないのに、じっとなんてしてられないよ」

例え相手が犯罪神の造った兵器でも、負ける気なんてないもんね。

「…そうですか、ならもう何も言いません。ですが、無茶だけはしないこと。いいですね？」

「「「はい」」」

ミナさんの注意に三人で返事をして、わたしは収納符（色々しまえるからこんな名前でもいいよね）からいつもの白いローブを取りだし、着用する。

街では着てないけど、ダンジョンや遠出をする時はいつも着る愛用のローブだ。

「ところで、がすとちゃんはどうするの？」

「がすとはまだちょっとだけお仕事が残ってますの。だからふうちやん達が帰ってくるまでに終わらせておくですの」

「わかったよ。それじゃあ行ってくるね」

「いってきまーす！」

「…行ってきます」

「行ってらっしゃい。くれぐれも注意してくださいね…」

「行ってらっしゃーい、ですよ！」

そして、わたし達はみなさんがすとちゃんに見送られて、世界中の迷宮へと向かった。

——フウ「かっこいい！」

このゲームの技、かっこいいなー

…後でやってみようかな——

「ねえフウちゃん。別にアイツらなんかに頼らなくてもわたし達だけでも両方集められたんじゃないの？」

移動中、ラムちゃんがそんな事を言ってきた。

本当にネプギアさん達が嫌いなね…

「ラムちゃん。いくらわたし達が強いといっても、流石にダンジョ

ン二つを往復するのは時間がかかるでしょ？　それに、本当に何百体も復活しちゃったらブランさんを助けるどころじゃなくなるし。だから有効利用できるものは使った方がいいんだよ」

ん、自分で言うておいてちよつとひどい言い回しな気がする。

「うーん…フウちゃんがそう言うなら…。でも、アイツらについていくのはぜったいやだからね！」

「あはは…わかってるよ」

そんな話をしている間に目的地に到着。

ええと…あ、あれあれ。

「あのポリゴンのモンスターが素材を持ってるやつだよ」

「なーんだ、弱そうじゃない。あれなら楽勝ね」

「（こくこく）」

「そうだね。じゃあ早いところーっ！」

モンスターの討伐を始めようとした時、ダンジョン入り口から何かが出ていくのが見えた。

数は一体だったけど、あんなものが街に行ったら大変な事になる。

「二人共！ そいつ任せたよっ！」

「え？　ちょ、ちょっとフウちゃん！？」

モンスターを二人に任せて、わたしはダンジョンから出て行った機械モンスターを追いかける。

「ステラ！　ステラっ！　いつまで寝てるの！　起きてよ！」

走ってる途中で、眠っているステラ（本）を起こす。

ちなみにこの子、今まで何も言わなかったのはずっと眠っていたからだ。

「…ん…う…？　もう、何…？　人が気持ちよく寝てるのに…」

「そんなこと言ってる場合じゃないの！　いいから魔力を集めておいて！」

寝起きで不機嫌な様子だったけどそんなことは気にしない。

わたしの言葉を聞いても惚けていたステラも、少ししたらちゃんと魔力収集をしてくれる。

そして、前にキラーマシンの姿が見えてくる。

「連射っ！」

掛け声と共にわたしの周囲に氷の弾丸が現れ、マシンガンの如くキラーマシンに放たれる。

それによりわたしの存在に気付いたキラーマシンが、手に持った斧で横に斬りつけてこようとする。

「っ、危なっ！」

それを身を屈ませ、そのままキラーマシンの下を抜けるようにスライディングしてかわす。

そして振り返り、魔力を込めた一撃で殴りかかる。…が、

「くうっ！ か、硬い…」

前に戦ったドカーン程度なら余裕で碎ける一撃だったのに、キラーマシンの装甲に弾かれてしまった。

その隙を突かれ、キラーマシンのモーニングスターによる攻撃を直撃してしまう。

「うああっ！」

まともに食らってしまったため、近くの木まで吹き飛ばされて叩きつけられる。

「あ…ぐ…ッ…くう…」

木に叩きつけられた衝撃で、少しの間息ができなくなる。

「ふ、フウちゃん！ 大丈夫！？」

手に持ったステラから心配した様子の声が聞こえてくる。

「っ…ゲホッ！ けほっ！ …だ、大丈夫、だよ」

とは言ったものの、実際は結構ヤバいかもしれない。

アイツの武器がただのハンマーとかだったらまだ動けたかもしれないな

いけど、アイツが使っているのはモーニングスターという、メイスに棘がついたような武器。

その棘が腹部・左足に刺さったらしく、うまく立つ事ができない。

「フウちゃん！ は、早く、早く逃げないと！」

「だ、ダメ…だよ…。ここで逃したら…街に行っちゃう…」

「でも！ それだとフウちゃんが…！」

「大丈夫…わたしに考えがあるから…」

キラーマシンが音声認識をできるかは知らないけど、聞かれて対処されても困る。

なので、作戦をステラにこっそりと伝える。

「…っ！ でも、それだと…！」

「大丈夫だって…なんとか耐えるから…だから、お願い…」

「……………わかったよ」

「えへ…ありがと…。それじゃ、お願いっ！」

作戦を伝えた後、キラーマシンの背後に向けてステラを投げ飛ばす。

さて、泣きそうなくらい痛いけど…少しだけの辛抱だ。

「さあ…か、かかって、きなさい…っ！」

杖を突いてなんとか立ち上がり、キラーマシンを見据える。

「こ…のおっ！」

そして、杖から氷の槍を放つ。

でたらめに撃ったそれが手に当たったのか、キラーマシンは手に持っていた斧を落とす。

しかし、それで怒ったのか―機械が怒るのか知らないけど―空いた手でわたしを掴んで握りつぶそうとしてきた。

「ぐ…う…ああ…ッ！」

「っ…、早く…早く…！」

徐々に込められる力が強くなっていき、凄まじい痛みがわたしを襲う。

痛みに耐えながらも、わたしは右手に持つ杖に魔力を集めていく。

「う…あ…ああああッ!!」

「…よし！ フウちゃん今助けるよ！ …落ちろッ！ インディグ
ネーション！」

薄れ掛けた意識の中、ステラのそんな声が聞こえたかと思うと、突如青い雷がキラーマシンに落ち、拘束が解かれる。

そのまま地面に落ちて、その衝撃で全身に激痛が走るけど、そんな事は気にしてられない。

…腕は、まだ動く…！

「こ、れでえ…トドメ…ッ！ 輝く…ドリーム・ソード夢の剣っ！」

残った力を振り絞って杖を両手で持ち、杖から出した緑色の魔力の剣でキラーマシンを一閃する。

連続で高威力の攻撃を叩き込まれたキラーマシンは、嫌な機械音を発しながら消滅していった。

「はぁ…はぁ…。か、勝った…」

「フウちゃん！ 今治すから…！」

空中に浮いていたステラがわたしの傍に降りてきて、回復魔法をかけてくれる。

「え、へへ…ステラ、ありがと…」

「もう…！ 言っとくけど、二度とこんな無茶な事に協力なんてしないからね！」

「ええ…？ ステラだから、頼めたんだよ…」

「…もうもうもうっ！ フウちゃんのバカあっ！」

むう、バカって言われた。

でも、今回はそう言われても仕方ない、かもね…

あーあ、ミナさんに無茶するなって言われたのに、約束破っちゃった…

…ダメだなあ…わたし、まだまだ弱いや…

この三年間で強くなったと思ってたけど、全然だね…

もっと…もっと強く…ならなきゃ…

わたしは…二人を守るために…もっと…強…く…

ステラの回復魔法で徐々に痛みが無くなっていく中、わたしは意識を手放した。

…死んでないからね？　わたしが死んじやったらこの小説終わりだもん。

あ、その後無事にモンスターを倒したラムちゃんとロムちゃんに涙目で叩き起こされました。

第八話 キラーマシン（後書き）

お友達がブラックロックシューターのゲームやってたから横から見
てたら。

あれに出てるBRSもステラって言うんですね…

…何かそれっぽい技でも使わせてみようかな…

今回使用した技など

○インディグネーション

原作Ⅱテイルズオブシリーズ

テイルズオブシリーズでおなじみの雷属性の秘奥義…だったり上級
呪文だったりする技。

舞い上がる光が敵上空に収束し、その後大規模な落雷を浴びせる。

ちなみにステラの発動したものは少し威力をセーブしている。（フ
ウを巻き込んでしまうため）

○ドリームソード

原作ⅡロックマンEXEシリーズ（2以降）

ロックマンEXEの代名詞とも呼べるプログラムアドバンスの一つ、
通称夢剣。

緑色の広範囲のソードで敵を叩き斬る。

フウの放ったものも変わらず広範囲で、倒れた状態からも容易に届
くくらいの範囲。

ドリームソード
夢の剣という表記は通称の夢剣から。

ちなみにみんつぶでフウが呟いていたかっこいい技がこれである。

…女神化すりゃよかったんじゃない？
…
… ってツツコミは無しの方向で

第九話 窮地（前書き）

うーむ…ちょっと急展開すぎな気がしてきた…

第九話 窮地

「ふんふんふーん…ぐるこーん、ぐるこーん…」

色々あったけど、無事…に教会に戻ることができた。（もちろんミナさんには怒られた）

わたし達が戻ってきて少し後にネプギアさん達も帰ってきて、タイミング的にはよかったみたい。

で、今はわたし達とネプギアさん達が持ってきた材料を使ってがすとちゃんが錬金術でディスクを直しているところ。

「すごいすごい！ 本物の錬金術だわ！ この間、本で読んだんだよね、ロムちゃん、フウちゃん！」

「（こくこく…わくわく）」

「実際に見るのはこれが初めてだから、うん、楽しみだよ」

三人でわくわくしながらがすとちゃんの錬金術を見る。

ちなみにステラは相変わらず睡眠中、このぐうたら魔導書め…

…まあ、ステラがいなかったら今頃は…なんてね。

「さいごに、このディスクのかけらをいれれば…かんせいですよ！」

がすとちゃんが錬金釜にディスクのカケラを入れると、一瞬光った
と思ったら、ゲームキャラのディスクが元通りになっていた。

「う…ここは…？ 私…？」

「わ…すごい！ 本当に復活したよ！」

「ああ、本当にこんなことが…私がわかりますか？」

「ルウィーの教祖…これは、どういうことですか？ 私はあの時、
確かに消滅したはず…」

「がすとさんが錬金術で直してくれたんです」

「このくらい、おやすいごようですよ」

「本当に、直った…」

「すごい！」

「へえ…」

わたし達三人は、その様子を少し離れたところから見ていた。

え？　なんで離れてるのかって？　えっと、ラムちゃんがネプギアさんに近付きたがらないからね…

「ねえねえフウちゃん！　あれ、わたしにもできるかな？」

「うーん…練習すればできるようになると思うけど、爆発↓ミナさんに怒られるのコンボが発動すると思うよ」

「それは…嫌…」

うん…爆発なんて起こしたらかなり怒られるだろうからね…

三人で盛り上がっていると、ネプギアさん達でこの後の話を進めていた。

ゲームキャラを元の場所に戻して、キラーマシンを封印するらしい。がすちゃんも、調合した錬金術士としてきちんと見届ける義務があると言って、ネプギアさん達について行くみたい。

「(うずうず)」

「む…」

ん、もしかしてロムちゃんもついていきたいのかな。

「あ、もしよかったらロムちゃんとフウちゃん、ラムちゃんも来てくれないかな。私達だけじゃ、ちょっと心細いし」

「…うん！ わたしも…」

「だ、ダメ！ わたし達は行かないわよ！」

「…え？」

ロムちゃんがネプギアさんについていこうとした時、ラムちゃんがそれを止めた。

「あ、う、えーっと…わたし達はルウイーの女神候補生なんだから、だから、街を守るためにここにいないといけないの！ ね？」

「んー、まあ…」

「…でも」

…もしかしてラムちゃん、嫉妬してる…？

「そっか…それなら仕方ないよね」

「そういうことだから！ ほら、向こうで三人で遊んでよっ！」

「あ…待って…」

「ちょっ、だから置いてかないでってば！」

部屋に戻っていくラムちゃんとロムちゃんを追いかけて、わたしもその場を後にする。

…というより、何かと放置されそうになるのはなんでなんだろう…

「ロムちゃん、一緒にお絵かきしようよ。わたし、また上手になったんだよ！」

「……………」

ラム・ロム部屋にて。

わたしは現在進行形でどうするかを考えていた。

多分、今世界中の迷宮には結構な量のキラーマシンがいるはず。

それに大体こういうのは一番奥にボスっぽいのが待ち構えているだろうから、そんな数のキラーマシンを相手になんてしてられないだろう。

とすると、わたし達でなんとか手助けしたほうがいいんだろうけど…

「お絵かき、いや？　じゃあじゃあ、ゲームしよっか！　この間買っ
てもらった、新しいやつ！　ほら、フウちゃんも！」

「…ラムちゃん、わたし…ネプギアちゃんのところに行きたい」

「ダメ！　それは絶対にダメーっ！」

問題は、ラムちゃん。

ラムちゃんをどうにかしないことには、わたし達は動けない。

とにかく、ラムちゃんを説得しないと…

「……………（ぐすっ）」

「わあ！　なんで泣きそうになるの？　泣かないでー！」

「ネプギアさんは、ルウィーの為に頑張ってくれてるのに、わたし
達だけ遊んでるのはダメだと思うな。わたしは」

「フウちゃんまで…そんなのあいつが勝手にやってるだけじゃない
！」

「…それに、お姉ちゃんのこと、助けようとしてくれてる」

「う…な、なによ！ 二人はわたしよりあいつの方が好きなの？」

それは、もちろん。

「ラムちゃんの方が好きだよ？ でもね、だからこそラムちゃんと一緒に行きたいの。ね、ロムちゃん」

「…うん」

「うっ…」

「お願い、ラムちゃん…（うるうる）」

「お願いだよ、ラムちゃん」

「う、ううう…あー、もう！ そんな目で見ないでよー！ わかったわよ、行けばいいんでしょ！」

ロムちゃんの涙目がトドメになったみたいで、なんとか折れてくれた。

「ふふ、そうこなくっちゃ」

「…ラムちゃん、大好き♪」

「ほら！　そうと決まったからには早く行くわよっ！」

色々あったけれど、なんとかネプギアさんを助けにいけそうだ。

前にペンを探してもらった恩があるし、なんとか助けになりたいからね。

さて、行きましようかつ！

——ステラ「なんだかんだで」

あの三人は仲良しなのね。

一人でも欠けちゃダメな、まさに三位一体。

うん、ほほえましいね。——

世界中の迷宮の少し奥にたどり着くと、多数のキラーマシンに囲まれたネプギアさん達を発見する。

「うわあ、まずい状況に陥ってるね」

「…ネプギアちゃん、怪我、してないかな…？」

「あんなのわたし達にかかればよーよ！　行くわよ！」

「「うん！」」

今回は最初から本気で行く。

何度もあんな風にやられたんじゃ、身がもたないもんね。

「「プロセッサユニット、セット！」」

三人同時に発したその掛け声と共にわたし達の身体が光に包まれ、プロセッサユニットを纏った姿に変身する。

「私も、準備オーケーだよー」

ステラ（人間）も何やら大きな大砲の様な銃を担いで、準備万端みたいだ。

全員の準備が整ったところで、各々技を繰り出しながらネプギアさん達の所へ向かう。

「ネプギアさん！　皆さん！　無事ですか！」

「ロムちゃん！ フウちゃん！ ラムちゃんも…来てくれたの？」

「一人見慣れないのがいるけど、まあ、この際いいわ」

「…援護する。早く封印を」

「で、でも…」

「ルウィーの女神候補生をなめないでよね。この程度の連中、束になっても敵じゃないんだから！」

「ここは、任せて」

「ネプギアさん達は、とにかく封印を急いでください！」

「なるべくはやくしてもらった方が、こっちとしても楽だしねー」

そう言いながら、わたしとステラは奥に進むのに邪魔になっているキラーマシンに向けてレーザー状の砲撃を放ち、道を作る。

「…わかった、お願い。すぐに封印して戻ってくるから！」

ネプギアさんはそう言い残して、わたし達が開けた道を通って奥へと進んでいった。

キラーマシンがネプギアさん達を追いかけようとするけど、わたし達が道を塞いで止める。

「さて、でもコイツら一匹でフウちゃんに痛手を負わせるくらい強いからなあ…勝てるかな」

「う…あの時は少し油断してたんだよ！　今回は大丈夫だよ！」

「そうよ、フウちゃんがそう簡単にやられるわけじゃないじゃない！　それに今回はわたし達もいるんだからよーゆーよ！」

「…フウちゃんは、わたし達が守る」

そうだよ、今回は二人もいるんだ。

だから、絶対に負けない。

なんて立ち話をしていると、キラーマシンが一体こちらに向かってきた。

「ふん、要するに近付かなければいいんでしょう？　なら…」

キラーマシンが斧を振り下ろしてくる。

それを跳躍して避け、杖を構える。

「シューティング…ブラスター！」

そして光の魔法弾を複数叩き込む。

「いよいよおおっ!!」

そして爆煙の中に突っ込み、魔力の剣で叩き斬る。

「…手ごたえはあったけど、腕だったみたい…」

飛び退いて煙が晴れるのを待つと、攻撃が当たったのは右手だったようで、左手だけのキラーマシンがそこに佇んでいた。

「うわ、フウちゃんの攻撃を食らってまだ立ってる…」

「相変わらず、無駄に硬いね」

言いながらも、ラムちゃんとステラもそれぞれ他のキラーマシンの相手をしている。

…あれ？ ロムちゃんは――

「や…っ」

「っ！」

悲鳴のした方を向くと、崖の淵で尻餅をついたロムちゃんがキラ―マシンに追い詰められ、今にも落とされそうになっていた。

「ろ、ロムちゃん！」

「…ちっ…」

ラムちゃんとステラもそれに気付いたみたいだけど、目の前のキラ―マシンの相手をするので手一杯で助けに行けないみたいだ。

く…ついさっき無茶をするなって言われたばかりだけど…でも…

…ロムちゃんを見捨てるなんて、絶対にできない…っ！

「ロムちゃん、ごめんっ！」

「え…？ きゃっ！」

わたしはバックユニットの出力を最大にし、ロムちゃんに体当たりをして比較的安全な場所に吹き飛ばす。

「ふ、フウちゃん！？」

「な、何してるのッ！」

ステラ達の声が聞こえたけど、もう避けられない。

わたしはキラーマシンのモーニングスターで吹き飛ばされ、崖下へと落ちていった。

「…う…く……」

…はは…まだ、生きてたんだ、わたし。

まあ、女神化してたからそれで助かったんだろうね…

でも、今は女神化も解けてるし、身体も動かないや…

「ギューイイインッ！」

「ギョオオンッ！」

あ…こんな所にもいるんだ…こいつら…

…流石に、今回は無理、かな…

…ごめんね…ラムちゃん…ロムちゃん…ステラ…

『あーあ、もう、ほんつとうにダメダメねえ…』

っ!?

な、何…? 頭に直接声が聞こえてくる…?

『まったく、力の使い方が全然なってないじゃない。…仕方ないわね』

な…何を、する気…?

『何って…ちょっと、力の使い方を教えてあげるだけよ…クスクスクス…』

な…に…意、識…が…?

『あは、あはは…アハハハハハハハハハッ…!』

世界中の迷宮の、奥地よりも更に奥。

「ギギ、ギギユウウンッ!」

犯罪神により造られた兵器、キラーマシンの群れと、

「……あはっ、…さあ、アソビマシヨウ…?」

紅き瞳の、狂気的笑みを浮かべた少女が対峙していた――

第九話 窮地（後書き）

作中でステラが使用している武器は、同名の黒いあの子と同じものです。

登場スキル

○シューティングブラスター

中威力の追尾弾を連続で放つ光魔法。
中威力とはいえ、数が多いので合計威力はそこそこ。

第十話 内なる狂気（前書き）

今回チート注意です。

…ぶっちゃけ、一度キラーマシンを全部復活させてこの子にやらせれば撲滅できそうな気がしてきた…

第十話 内なる狂気

世界中の迷宮の、冒険者すらも訪れない程の奥深く、

そこに、一人の少女が大量の兵器に囲まれていた。

「さーてと、まずは準備しないとね。…ダーインスレイヴ」

紅い瞳の少女——フウはそう言うとき小さくその名を喚ぶ。

すると彼女の足元に、いつもの彼女のイメージの青とは真逆の、紅い魔方阵があらわれてそこから一振りの両手剣——魔剣
ダーインスレイヴが現れた。

「ん、よし。これで準備はオッケーっ」と

フウはダーインスレイヴを手にして軽く素振りをする。

「くすっ、じゃあ…始めよっか…♪」

フウは狂ったような笑みを浮かべると、一瞬でキラーマシンの背後に回り、叩き斬った。

斬られたキラーマシンは、爆発を起こして消え去る。

「うーん…油断してたとはいえ、結構強いと思ってたんだけどなあ…拍子抜けだよ…」

一撃で消滅したキラーマシンを見て、フウはつまらなさそうに言う。

「はあ、もういいや——壊れちゃえ」

落胆した様子のフウ。

と、そこへキラーマシンが三体同時に攻撃をしかける。

「…弱いくせに、鬱陶しいなあ…」

が、それすらも一撃でねじ伏せるフウ。

「弱すぎ、楽しくないつまらない面白くない退屈…：つまらなさすぎて死んでしまいそうなくらい。もっと楽しいおもちゃはないの？
ねえ？ あはははははは！」

狂った笑い声を上げながらフウは寄ってくるキラーマシンを斬り、

潰し、時には素手で貫いていく。

「…上、上に誰がいる。雑魚？ 中ボス？ ラスボス？ なんでもいいや、そう簡単に壊れたりしなければなんでもいいよ。あは、あははははははははは！」

キラーマシンを破壊し続けていたフウは突然そんなことを言うと、出口へと向かっていった。

——SIDE fu——

あれから大分進んだはずだけど、一向にさっき感じた気配の持ち主が見えてこない。

出くわすのは雑魚モンスターばかり、飽きてきた。

「…あ、みーつけた♪」

なんて思っていたら感じた気配と同じ気配を持った人を見つけた。

…あれ、片方はどこかで見たような？

誰だっけ…んーと……

「そうだ、ネプギアさんだ！」

「えっ？ ふ、フウちゃ…きゃあああっ!？」

なんだい、人の姿を見るなり悲鳴なんて上げて、失礼だねー。

「ふ、フウちゃん！ その血はどうしたのですか?!」

そうわたしに訊いてくるのは、確か…こんぱさん、だっけ？

あ、そういえば服が血塗れだったっけ、怪我は治したんだけど。

「それよりも、どうしたのー？ 随分とボロボロだけど」

わたしの事を心配してきたネプギアさん達だけど、そう言う本人達も大分負傷していた。

まあ、大体理由はわかってるけど。

「…何者だ？ 邪魔をするのなら容赦せんぞ」

明らかにコイツのせいだよねえ…

「何者って言われてもねー。でさ、ネプギアさん達と対立してるってことは、コイツは犯罪組織？ 敵？ 敵さんなのかな？」

「え、う、うん。そうだけど…」

「そっか、あはっ、じゃあ手加減しなくてもいいよねっ！」

さっきから雑魚ばっかで退屈してたんだよね。

でもネプギアさん達がてこずるならちよっとは楽しめそう。

「ねえネプギア…あの子、なんか様子がヘンじゃない？」

「そ、そうだね、なんかいつもと雰囲気が違うような…」

「あは、あははははははははははhげほっ！ けほっ！」

うえ、むせた。

「…気のせいかしらね」

「あれじゃない？ 戦いになると性格が変わるってやつ」

「じゃあ根はいつものふうちゃんですか？」

「そうなんじゃないですか？」

あれ、なんかバカにされてるような気がするんだけど。

「…まあいいや。本当なら手加減して遊びたい所なんだけど、状況が状況な上にネプギアさん達を傷つけたんだからね。本気で行っちゃうよ」

「…ふん。貴様の本気がどれほどかは知らぬが、舐められたものだ。貴様ごときに遅れなどとらぬ」

いやあ、だってねえ？

何を言ったのかは知らないけど、死亡フラグが立ちまくってるんだもん、コイツ。

「じゃ、行くよ？」

「それなら、これならどうかなあっ!？」

連続攻撃でダメならば、一撃必殺で決めればいいだけ。

「潰れろッ！」

魔力を剣に収束させ、思い切り叩き斬る。

「ぐ、おおおおおっ！」

「人を見かけで判断した結果がこれ。お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？　なんてねー」

言って、ダーインスレイヴを消す。

「ふう……。さて、ネプギアさん、後はよろしくねー」

「え？　ええっ!？　どこに行くの!？」

「ラムちゃん達をほったらかしなので、会って安心させないといけないからー!」

それだけ言い残して、わたしは出口の方へ駆けていった。

「…なんだったのかしら、あの子」

「たしかに、いつものふうちゃんとちょっと様子がへんでしたの…」

「何かあったのかな…？」

「あぐっ…！」

「ロムちゃん！ 大丈夫！？」

「く…平気」

「まったく、妙に硬い上に数ばかり揃えて、面倒だなあ…」

ありゃあ、結構苦戦してるねー。

「きゃっ！ し、しまった！」

「っ、まずい…！」

あ、ラムちゃんの杖が弾かれた。

そして狙ったかのようにこっちに飛んできたし。

余裕とか言ってたくせに…ふう、仕方ないなあ。

「ら、ラムちゃん…っ！」

「く…こんなところで…！」

「ほっ、よいしょっ！」

杖をキャッチした後、ラムちゃんに斧を振り下ろそうとしているキラーマシンの背中に飛び乗って、腕で貫く。

「え…？」

「き、キラーマシンを腕で貫いた…！？」

とりあえず、なんかコアっぽいものを引きずり出し、飛び降りる。

すると、そのキラーマシンは動かなくなった。

っていつても、もうすぐ全部動かなくなるんだろうけどね。

「って、あ、あれ？ フウ、ちゃん…？」

「そだよー、さっきそこから落っこちたフウちゃんですよー」

「そ、その血…大丈夫なの！？」

「うん、傷はもう。マントに血がついちゃったけどね」

説明しながらラムちゃんに杖を返す。

「ね、ねえ、フウちゃん…なんか、雰囲気変わった…？」

「そう？ 別にいつもどおりだよー」

「……………」

ん、さっきからステラが黙りっぱなしだなあ。どうしたのかな？

「……………ねえフウちゃん。…その目、どうしたの…？」

「うん？ 目？」

「ああ！ なんかヘンだと思ってたけど、目が赤いのよ！」

「え、そうなの？」

「気付いてなかったの…？」

だって、鏡とか持っていないし。

「それに、さっきすっごく自然にやってたけど、あれだけ硬いキラ
ーマシンを素手で貫いたり…色々大変だよ？」

「あー、いや。わたしでもよくわからないんだけど、落ちて気がつ
いたらこうなってた」

しかも、戦ってる時ヘンなテンションになるし。

「ふーん…でもでも、フウちゃんすっごく強くなったよね！」

「…凄かった」

「んー、わたしを褒めるのもいいけど、どうやらネプギアさん達、
上手くいったみたいだよ」

そう言ってキラーマシン達を指差す。

「ギ…ギギギ…」

「行動、不能…行動、不能…」

「機能、緊急停止…活動継続、不可…」

と、そんな事をいいながら次々と消えていくキラーマシン達。

「消えていく…やったんだ、ネプギアちゃん…」

「できればもうちょっと早くして欲しかったけどねー」

「そうよ、たかが封印するくらいで時間かかり過ぎなのよ！」

「ま、今更あんな雑魚達に興味なんてないから、どうでもいいんだけど……っ」

なんて立ち話をしていたら、急に身体が重くなる。

「え…？ ふ、フウちゃん!？」

「ど、どうしたの…!？」

「う、ん…ちょっと疲れちゃっただけ…ごめん、少し休ませて…」

「ちょ、ちよっと！ フウちゃん！」

三人が何かを言ってるみたいだったけどひどい眠気に襲われ、その

ままわたしは眠りについた。

……あー、前々回と終わり方被っちゃったよ…

第十話 内なる狂気（後書き）

あれ、なんかフウがハードブレイカー倒してる…

ちなみにこの狂気、まだ半分の力です。

全力になったらまずフウが暴走しますし。

登場武器

○ダーインスレイヴ

一度鞘から抜いてしまうと、生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらないといわれた魔剣、フウ（狂）の愛剣。
フウの場合鞘から抜いてるわけでも、斬った後鞘に収めるわけでもないで別に生き血を吸わなくても大丈夫だったりする。

登場技

○サードブレイクラッシュ

フウが三人に分身し魔剣で敵を斬り刻んだ後、トドメに強烈な一撃で叩き潰す（狂）状態専用技。

ちなみに別の武器でも使えたりする。

第十一話 もう一人のわたし（前書き）

今回は短めです。

第十一話 もう一人のわたし

—SIDE sutela—

さて、フウちゃんが眠ってるからここは私のターンよ。

ふふふ…ようやく私視点の話がやって来たね…

…つと、そんなこと言っていないで話を進めないと。

フウちゃんが突然眠ってしまった後、私達は戻ってきたネプギアちゃん達と合流して街へと戻った。

何故かゲームキャラも一緒だったのだが、錬金術の影響で二人に分身したとの事なので慌てる必要は無いみたいだ。

「ところで…フウちゃん、どうしたの？」

と、突然ネプギアちゃんにそんな事を聞かれたりしたけど、

「あー、気にしないで。疲れて寝ちゃってるだけだから」

それだけ言って、さっさと街へ向かった。

今は、できるだけ早く戻って、一人で考えたい事があるからね…

教会へ戻った後、ネプギアちゃん達は次のゲームキャラを探しに旅立っていった。

ロムちゃんがネプギアちゃんにすごい笑顔を見せてラムちゃんが嫉妬してたり、がすとちゃんがネプギアちゃんについていたりもしたけど、ともかくこれでこの一件は解決となった。

今はフウちゃんの部屋でフウちゃんの様子を見ている。

「すう……すう……んんう……」

フウちゃんは規則正しい寝息を立てて眠っている。

「……………」

でも、あの時のフウちゃん…あの人にそっくりだった。

なんというか、全体的な雰囲気が…

でも、あの人は…もう…

「それに…」

フウちゃんが私を起こした時も、あの人と同じ気配を感じた。

あの時はそれほど気にしてなかったけど、今回の一件から少し考えるようになった。

どうして、フウちゃんから…？

「…考えても仕方ない、か」

もしかしたら、あの人とフウちゃんの持つ波長が同じだけかもしれないし。

とりあえず、今日はもう寝よう。

普段よりも沢山魔力を使ったから、私も結構疲れている。

まだ少し気になるけど、また今度考えればいいよね。

「…おやすみ、フウちゃん…」

フウちゃんを起こさないように小さく呟いて、私は本になって眠りについた。

――SIDE fu――

「…で、あなたは誰なの？　そんでもってここはどこ？」

「あらあら、一度に何個も質問するものじゃないわよ？　まあいいけど、ここはあなたの精神世界。それで私はあなた」

「何を言ってるの？」

わたしは黄緑色の空、深紅の大地だけの不思議な世界で、わたしにそっくりな子と話していた。

まだここが精神世界だっていうのは認めるとする、だけど後者は…

「信じられないって？　そんなこと言われてもねえ、ホントの事だ

し」

「っ!？」

「あははは！ おもしろい反応ね、流石は私の半身といった所かしら。言ったでしょう？ あなたは私だって。だからあなたの考えることもお見通し」

そう言ってニヤァっと笑うもう一人のわたし。

本当に、なんなのこれ…

「…わたしがあなただとしたら、あなたはわたしの失くした記憶について何か知ってたりするの？」

「んー、知ってるっていえば知ってるけれど…教えてあげない」

「どうして!？」

「だってつまらないでしょう？ 簡単に物語が進んでしまったら。それに、記憶なんてあなたが成長していく過程で勝手に思い出すわ。それとも…」

そこまで言って、もう一人のわたしがどこからか出した両手剣を構える。

「…力づくで聞く？」

「…いや、いいよ。結果は目に見えてるし」

「なんだ、ノリが悪いのね。つまらない…」

あの時、わたしが使った力。

その力の元がこの子だとしたら、わたしに勝ち目なんて皆無だ。

「ま、今度またフウじゃ敵わないようなやつが来たら呼びなさい、また力を引き出してあげるから。うふふふ…あはははははっ！」

「……………」

わたしの前で狂ったように笑う、わたしにそっくりな女の子。

この子は、いったいわたしの何を知っているんだろう。

そんな事を考えていると急に意識が遠退き、わたしの目の前は真っ暗になった。

S e c r e t m e m o r y 1 (前書き)

今回はフウちゃんの出番無しです。

11／7

口調の変更をしました。

Secret memory

——SIDE ???——

「あー、暇ー。暇ヒマひまあー」

もう、毎日毎日雑務ばかりで、おかしくなってしまうよ。

「女神様、少しは落ち着いてくださいよ」

「そうは言うけれど、私の専売特許…みたいなものは戦う事よ。というか、貴女がやればいいじゃない」

そう言ってきたこの国の教祖のテンちゃんに私はそう言い返す。

「何言ってるんですか、最近はまだでさえ犯罪組織の被害報告が増えてるというのに、この国の女神様である貴女がやらなくてどうするんですか」

「むう…いいじゃない。私はモンスター退治をしたいだけよ」

「駄々をこねても駄目なものは駄目です。だいたい、もし女神様に何かあったらどうするんですか」

「そんなに弱くないわよ？　ねえ、いいでしょ？　今やってるゲームも全部終わっちゃったし」

「だから駄目だと……あれ全部終わったんですか!？」

「うん。全部100%クリアよ」

ゲームを完全クリアしたことに驚くテンちゃん。

あんなの楽勝だったものね、ふふん。

「ねえ、だからいいでしょう？　おねがい」

「そ、それでも駄目なものは……」

「きよ、教祖様!」

そんな感じでテンちゃんにおねだりを続けていると、突然教会の扉が勢い良く開き、誰かが入ってきた。

あの人は…防衛隊の隊長さんだったかしら？

「何事ですか？　随分と急いでたようですが…何かあったのですか？」

「は、はい！ 西のダンジョンから、犯罪神が造ったとされるモンスターが大量に街へ攻め込んできました！」

「な、なんですって!？」

ふうん…穏やかじゃないわね。

「…そのモンスターの強さはどうなの？」

「それが、こちらの攻撃がまったく効いていないようなのです」

「ふむ…」

普通の人間の攻撃が効かない、ね…

ふふ、面白いじゃない。

「…！ め、女神様!？ どこに行くのですか!？」

「決まってるでしょう？ そのモンスターの発生源に行くのよ」

「な…！ 危険です！ 女神様にもしものことがあったら…」

「人間の武器が効かないのなら人間じゃない私、女神の攻撃なら効くかもしれないでしょう？ それに、ただ待ってるだけではないはず

らに命を散らすだけよ」

「で、ですが…」

はあ…本当に頭の固い教祖さんだこと。

「とにかく。隊長さん。貴方達防衛隊は街の人の避難を最優先にして。テンちゃんは…そうね、もしもの為にゲームキャラに協力をお願いしに行ってくれるかしら？」

ゲームキャラの居る場所はダンジョンの中だけど、教祖をする前冒険者をやったテンちゃんなら大丈夫。

「「わ、わかりました！」」

「ん、よろしい。では解散」

二人に命令を伝えて自分の獲物を持ち、私はそのモンスターがやってきているというダンジョンへ女神化して飛んで向かった。

まったく、犯罪神というのが出てきてから街の被害が酷くなっていくわね…

…ちなみに最後のあれは言いたかっただけよ。

「さて、と。一気に飛んできましたよっ」と

自分でも誰に言ってるのかわからないけど、そう言ってダンジョン前に着地する。

飛んできたってのはそのままの意味だよ？ 普通にバックユニットにエネルギーを集中させて。

…SP？ なにそれ、食べれるのかしら？

「よし、さっさと奥に…は簡単に行かせてくれるわけないわよね」

さっさと原因を調べてしまおうとダンジョンに入ると、中には結構の数の機械型モンスターがいた。

ふむ…来る途中に見た数はまだ2、3体だったけれど、これだけの数に出てこられたらまずいかもしれないね。

うふふ…面白い、面白いわ。

「さて、精々私を楽しませて頂戴ね…ッ!!」

ニヤアッと笑みを浮かべながら両手剣を構えて、私は機械型モンスターの群れへと突っ込んでいく。

「っ、中々に丈夫みたいね。それならこれでどうかしらッ!？」

流石に防衛隊の人達が敵わなかっただけはあるわね、そこそこに高い防御力だ。

ま、鉄の塊を叩いて楽しいなんて思わないし、少し本気を出すことにする。

私は両手剣に光を纏わせ、それでモンスターを叩き斬る。

それでも数回は持ちこたえられたけど、連続で斬ると動かなくなっ

た。
「んー、さしずめキラーマシンといったところかしら？ こいつらは」

どちらかというと言壊されてるし、ブレイクマシンとかでもよさそ

うけどなんか嫌なのでこれにした。

「うふふふ…あはははははははっ！ さあ、奥に進むまでの遊び相手、して頂戴ね？」

そう言って、私はキラーマシンの大群へと突っ込んでいった。

「はあ、まったく、何体いるのかしら。流石の私も飽きてきたわ…」

ダンジョンの奥、私は沢山のキラーマシンの残骸の中で愚痴っていた。

「んー、そろそろ来てもいい頃なんだけれど…」

なんて思ったとき、持っていた携帯電話が鳴り始めた。

「きたわね。もしもし？」

『あ、女神様？ テンです』

「どう？ ゲームキャラの方は」

『はい。協力してくれると言ってます』

「そう。それじゃ、ゲームキャラを連れてこっちまでこれるかしら？ それまでこいつらは私が壊して足止めしておくから」

『え…？ あ、はい、わかりました。そちらに向かいますね』

「うん、よろしくね」

テンちゃんにそれだけ伝えて、電話を切る。

さて、それじゃ後もう少しだけ楽しむとしましょうか。

「ほらほら、まとめてかかってきたら？ じゃないと私は倒せないわよ？」

言いながら、剣で斬りつけ、殴り飛ばす。

「自分達の武器で…潰れてしまえッ！」

次に地面を思いっきり叩き残骸の武器を浮かせ、それを上から蹴ってキラーマシンに当てていく。

それでもヤツ等は次々と沸いて出てくる。

「はあ、何体造ったのよ、犯罪神も。テンちゃんまだかしらー」

よいしょ、とキラーマシンを投げ飛ばしながら、次々と破壊していく。

「め、女神、様！ お待たせ、しました…！」

「あ、遅いわよテンちゃん。もう少し遅かったら発生源のこのダンジョンごと叩き潰すところだったわよ」

「ここでしか取れないものもあるんですからそう言うことはやろうとしないでください！」

「わー、テンちゃんが怒ったー」

『…本当に、この子が守護女神なの…？』

そんな時、テンちゃんの後ろから聞いた事の無い声が聞こえてきた。

「あ、あなたがゲームキャラかしら？ 早速で悪いんだけど、あなたにお願いしたい事があるの」

『貴女が私を呼んだ理由は理解しています。このモンスター達を封

印するのでしょうか？」

「話が早くて助かるわ。お願いできるかしら？」

「あ、あの…話が見えてこないんですが…」

私とゲームキャラが話してる横から、何をしようとしてるのかとテンちゃんが聞いてきた。

「この機械のモンスター達、このダンジョンから湧いてきてるでしょう？　なら元凶はここにあるかと思って壊しながら進んでみたのよ。そしたらこいつらはここで造られていたみたいで、相当な数のアレが下にあったの。今まで結構倒したけどそれでも百以上は」

「そ、そんなに…」

『それを予想した貴女は、事前に教祖を使って私の力で封印しようとした。ですね？』

「すごいわねえ、心でも読めるのかしら？」

『いえ、これが現状で可能な最善策だと思いましたので。むしろ貴女程の歳でここまで思いついた事が驚きですよ』

「私これでも18なんだけど」

まったく、意思を持ったヤツは皆私を見た目で判断するんだよねえ…

他国の女神との模擬戦だってそれで手加減されたし…ほんと、嫌になっちゃうわ。

「それじゃ、お願いするわよ」

『わかりました…』

そう言うと、ゲームキャラに光が集まり、一瞬辺りが光に包まれ何も見えなくなる。

少しして光が収まると、辺りに散乱したキラーマシンの残骸と残ったキラーマシン達が動かなくなり、消滅していった。

「す、すごい…」

「成功、ね」

『はい。あのモンスター達の封印は成功しました』

今頃、街の方に行ったキラーマシンも消えてることだろう。

ま、私も久々に暴れられたし、いいか。

「さて、帰りましょうテンちゃん」

「え…？ ゲームキャラはどうするんですか？」

『私はここを離れるわけにはいきません。私がいなくなれば、またあのモンスター達が復活してしまいますので』

「…ということよ。ごめんなさいね？ こんな所に置いてく形になってしまった」

『構いませんよ。居場所が変わっただけで前と大して変わりませんから』

その答えに「そう」とだけ返して、わたしは女神化を解除してテンちゃんと街へ歩き出す。

「はあ、久しぶりに暴れたから疲れたわ。帰ったらゲームでもしようかしら」

「女神様！？ 駄目です！ ちゃんと仕事をしてください！」

「ええー、いいじゃない。今回私大活躍したのだし」

「駄目です！」

「うわっ、テンちゃんが本気で怒ったわ！」

いつもみたいな感じでテンちゃんと話しながら、私達は街へと帰っ

た。

第十二話 新しい力（前書き）

今回ちょっと出来が悪いかもしれない…

第十二話 新しい力

「ん……………」

目を覚ますと、いつもと同じ感触のベッド。

ええと、わたしは確か…

…なんだっけ、変なヤツに力を引き出されて、それでキラーマシントかを倒しまくってたんだっけ。

それよりも、変な夢を見たなあ。

一つはわたしの力を引き出した、もう一人のわたしと名乗る子の夢。

そしてもう一つは、ある女神様の夢。

あの夢は、一体なんなんだろう？ ルウィーみたいな場所だったけど、なんか違うし…

「あ！ フウちゃん。やっと目が覚めたんだね」

「ステラ…」

上体を起こしたままぼーっとしていると、ステラが部屋に入ってきた。

「待ってて、今二人を呼んでくるから」

でも、それだけ言ってまた部屋を出ていく。

それから少しすると、どたどたと誰かが走る音が聞こえてきて、ドアがバンツと開かれたかと思うとラムちゃんとロムちゃんが飛び付いてきた。

「ぐえ」

二人分の衝撃が一度に襲ってきたため、女の子らしくない変な声が出てしまった。

「フウちゃん！ 心配したんだからねーっ！」

「もう…大丈夫なの…？」

「む、むしろ今のが結構なダメージになったよ…」

涙目（心配）で聞いてくる二人に、涙目（痛み）でそう返す。

「うう…ところで、わたしってどのくらい寝てたの？」

「大体1日くらいだね。ずっと寝たきりだったよ」

1日も寝てたんだ…

まあ、あの日は1日に色々無茶しすぎたせいかなあ。

「そういえば、ネプギアさん達は？　もう行ったの？」

「うん…教会に帰ってきた後、すぐに行っちゃった…」

「むーっ！　フウちゃんまで！　あんな奴の事なんかどうだっていいのよ！」

はは…ラムちゃんは相変わらずだね…

「…あ、そうだ！　フウちゃん、わたし達これからリーンボックスに行くんだけどフウちゃんも一緒に行かない？」

「リーンボックス？　またどうしてそんな遠くに？」

「シエアを回復するため、だったよね？　あそこは今女神がいないから、集めやすいだろうって」

なるほどねえ、確かに信仰するべき女神が不在なリーンボックスな

ら、多少は集まりやすいだろう。

「…フウちゃんの調子が戻ってからでもいいから…」

「ああ、大丈夫だよ。多分倒れたのは疲れのせいだろうし、行くのならすぐいけるよ」

「ほんとに大丈夫なの？ 無理とかしてない？」

「大丈夫だって。じゃあ支度するから、みなさんここで待ってて」

そう言って、一度二人を部屋から出す。

それからポーチの中に収納符を貼り、適当に使えそうな符や杖、アイテムをしまっていく。

「…ねえ、本当に大丈夫？」

支度をしていると、ステラもそう聞いてきた。

「ステラまで…だいじょーぶだって、別にどこかが痛んだり、苦しかったりしてないから」

「…なら、良いんだけど…」

「…?」

なんか、ステラの様子がおかしいような…?

「よし、準備オッケーっと。ステラも何か必要なものとかある?」

「ううん、無いよ」

「そっか、じゃ、行こっか」

「うん」

…気のせい、かな?

準備も終えたことなので、二人と合流してミナさんの所へ向かった。

「大丈夫ですか? 忘れ物はありませんね?」

「もう、大丈夫だってばー。ミナちゃんは心配性なのよ」

「……………（こくこく）」

「大丈夫、ちゃんと確認したよ」

「そうですか…それとフウ、貴女はとにかく無茶をしないこと！
いいですか?」

「は、はい…」

うう、釘を刺された…

でも、二人やステラが危ない目に遭いそうになったら結局無茶しちゃうんだろうなあ…わたし。

「それじゃあミナちゃん、行ってくるねー」

「…行ってきます」

「行ってきます」

「風邪に気をつけてくださいねー！ あ、あと無駄遣いもしないように！ それから…」

「「もうわかったってば！」」「」

ミナさんがあまりにも心配性すぎて、思わず三人でハモりながら言う言う。

ということで、わたし達はリーンボックスへ向けて出発した。

「さて、まずリーンボックスに行くには海を渡らないとダメだね。だからまずはラストেশョンか」

「えー、海なんて女神化して飛んでっちゃえばいいじゃない」

「まあまあ、それも良いけど折角だから船に乗ってみたいでしょ？」

わたしがそう言うのと、ラムちゃんは納得してくれたみたいで、それもそうね、と言った。

「ということで、ラストেশヨン目指してごー！」

「…ごー♪」

とまあ、そんな感じのノリでラストেশヨンへと向かった。

「ということで着きましたラストেশヨン。手抜きじゃないよ？」

「フウちゃん、誰と話してるの？」

ラムちゃんがつつこんで来たけど気にしない。

仕方ないじゃない、道中は最近のゲームの話とかばっかだったんだもん。

んー、やっぱりなんていうか、メカメカしてるねー。でもそれが良い！

「じゃあとりあえず、宿を探そっか。街の探索はその後で」

「はい！」

「……………（こくっ）」

わたしの言葉に返事を返して走っていく二人。

というか、あんまり離れられると迷子になりそうなんだけど、わたしが。

「…って、だから置いてくнаぁーっ！」

そう叫びながら二人を追いかける。

あ、あの顔…まさかあの子達ワザとか！？

とまあ、わたしの方を向いてニヤけてる二人だけど、もちろんそんな状態で走っていたら、

ドスッ！

「きゃっ…！」

まあ、前から来たひとにぶつかりますよね。

というか、今身長的にロムちゃんの頭が相手の鳩尾にクリーンヒットしてたような…

「ああもう、前を見てないからだよ…。すみませんでした…だ、大丈夫ですか？」

「こ、この程度…大丈夫だ…問題、ない…」

「全然大丈夫に見えないんだけど…」

うん、それはわたしも思ったけど加害者なんだからそんなこと言っちゃダメだよ、ラムちゃん。

「おっとお、イーノ君、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ、問題ない」

「そうか。まったく私の言う通りにおけばよかったものを…ああ君達、この男はこの程度じゃやられたりはしない。だから気にし

ないでくれ」

「は、はぁ…」

「さ、行こうか。イーノ君」

それだけ言って黒い人とまだお腹を押さえてる白い人は去っていった。

…変わった人だなあ。

「ロムちゃん、大丈夫？」

「うう…大丈夫…」

ロムちゃんも顔を打ったらしく、涙目だった。

…可愛い。

その後アイスを買って食べながら宿屋に向かい、部屋を取った。

「さて、これでひとまずは大丈夫だね。これからどうする？ わたしは今後の資金的な意味でギルドでクエスト受けてくるけど」

「えー！ フウちゃん行っちゃうの？」

「フウちゃんと一緒に街を見たい…」

わたしがギルドに行くと言うと、二人が反対する。

「んーと…観光は明日でもできるし。今お金稼いでおけばリーンボックスでミナさんにお土産とか買えるかもだから…ダメ？」

クレジットは船の往復代とご飯代くらいしか貰ってないからね（お金管理はミナさんに頼まれてわたしがやってるよ）

きつとわたし達…主にラムちゃんとロムちゃんが無駄遣いしないようにこのくらいの金額なんだろうね。

「うーん…明日絶対に一緒に居てくれる？」

「うん、明日は絶対に一緒にいるよ」

「それなら…今日は我慢、する…」

まあ、他の都市に来る事なんてあんまりないから、見て回りたい気持ちもわからないでもないけどね。

「ありがと、二人とも」

「あ、フウちゃん。今回はわたしラムちゃん達と一緒にいるよ。わたしも他の街に来たの初めてだからさ」

いつ起きてきたのか、ステラがそう言う。

まあ、別にそこまで苦戦するような依頼は受ける気無いし、いいか。

「ん、わかったよ。それじゃ、行ってくるね」

「「「いってらっしゃーい」」」

とまあ、そんな感じで三人に見送られて、わたしはギルドへと向かった。

ギルドに到着したわたしはとりあえず適当なクエストを受ける。

クエスト名は、神を喰らう者たち。

とりあえず、詳しい内容を聞くために依頼主のところへ向かう。

「あの、あなたが依頼主さんですか？」

依頼主の人は、コートを着ていてどこか面倒くさがりなイメージの男の人だった。

「ん？ お前が俺の依頼を受けたのか？」

「あ、はい。そうです」

「…子供には無理だと思っただが…」

「こ、子供扱いしないでくださいっ！」

「悪い悪い。わざわざCランクの一覧から選んだ位だから、そこそこ腕は立つんだろうな。それじゃ、依頼内容だが…面倒くさい説明は省略する」

ええ…省略しちゃうんだ…

「内容は簡単だ、セプトトリゾートに出没するドルフィンってモンスターをぶっ殺せ。かといって、俺の依頼で死なれちゃ目覚めが悪い。要求は三つ、敵を殺せ。でも死ぬな。場合によっちゃ逃げろ。隙があったらぶっ殺せ」

「…それ、四つじゃないですか？」

「おお、そう言われたらそうだな。ともかく、それさえ守ってくれりゃあ後はどうとでもしてくれ」

「わかりました。では行って来ます」

とりあえず依頼内容を確認したわたしは、セプテントリゾートへ向かった。

『で、ここにそのモンスターがでるのね』

「…なんであなたが自然にでてきてるの…」

セプテントリゾートに到着して、わたしの横に浮いてる、夢で会ったわたしにそっくりな子にそうつつこむ。

なぜかは知らないけど、街を出た辺りから急にでてきた。

『だってフウ、一人だったから別にでてきても大丈夫だと思って』

「確かにステラはラムちゃん達と一緒に観光してていないけどさあ

…」

『いいじゃない。私だっていつも見てるだけで暇なんだから』

「はあ…」

そんな調子の彼女に、わたしはため息を一つ吐く。

『ああ、そういえば私も同じフウだったわね、ややこしいから私を呼ぶときはフウカと呼んでくれればいいわ』

「もう勝手にして…」

なんて会話をしている内に、ドルフィンを発見する。

「見つけた。さて、さっさと仕留めようか」

『あ、一つ教えてあげるけど、今のフウでもダーインスレイヴとか喚べるわよ?』

「なによそれ…ああ、あの時のでっかい剣のこと? 別に使う気ないんだけど…」

『いいから。ほら、直感で「来いっつ」って』

案外適当な召喚方法なんだね…

まあ仕方ない、やってあげるとしよう。

ということで、言われたとおりにやってみる。

すると、あの時とは違って青色の魔方陣が現れ、そこから一振りの刀が現れた。

…刀？

「ちょっと、なんか違うのが来たんだけど」

『あれ？　なんで天叢雲ノ剣が…？』

思っていたものと違う武器が出てきたので聞いてみたら、フウカもよくわからないみたいだった。

『…まあ、それでも行けるでしょう。あんな雑魚一匹』

「一応危険種なんだけど…」

はあ…この娘と話していると疲れるよ…

とにかく、さっさと終わらせるために刀を構えて突撃する。

「はっ！」

そして範囲内まで近付き、鞘から抜いて一閃する。

とりあえず、先制攻撃は成功つと。

いきなりの攻撃で怒ったのか、すぐさま体勢を立て直して尾びれで攻撃してくる。

「っ…」

刀を鞘に戻しながらスライディングでドルフィンの下を抜けて避け、斬り上げ抜刀斬りから斬り下ろす。

すぐさま刀をしまいながら飛び退いて距離を取る。

え？　なんでこんな戦い方なのかって？　…なんとなく、この戦い方がしっくりくるから。

…どうしてだろう、これも昔のわたしに関係あるのかな…？

『キュウウウウツッ！』

「っ！　しま…ぐうつ！」

少し考え事をしてたのがいけなかった。

その隙を突かれ、再び体勢を立て直したドルフィンの水のレーザーをもろに喰らってしまった。

「い…たたた…遠距離攻撃ができるなんて聞いてないよ…」

咄嗟に弱い防御壁を纏ったからそこまでダメージにはならないけど、痛いものは痛い。

遠距離攻撃してくるなら、もうさっさと終わらせちゃおう。面倒だから。

「……………」

深呼吸をし、居合いの構えを取って目を閉じる。

じいっと動きを止め、精神を集中させる。

「……………！ はああッ！」

そしてドルフィンの水レーザーが放たれる音が聞こえた瞬間、突撃して斬り抜ける。

そして、暫くの沈黙の後、ヒュッと血を払って刀を鞘にしまうと、ドルフィン血を噴き出して動かなくなった。

「斬り捨て、御免……って言えいいのかな？」

ふう、と息を吐いて、誰にというわけでもないけどそう呟く。

『ふうん。記憶無いくせにいい動きじゃない』

「別に、ただ直感に任せて戦っただけだよ」

戦闘が終わったのを確認したフウカがそう声を掛けてくる。

ちなみにフウカはわたし以外には見えないらしい。

「さて、標的も倒したことだし、帰ろうかな」

『まあ、この辺の雑魚じゃ今のフウには大した経験にならないわね』

ドルフィンからドロップしたアイテムを拾い、刀を消してそう言う。

というか喚ぶ時が「来い」だったから「戻れ」って感じでやれば消えるかなって思ってたらホントに消えたし……

ま、いいか。ラムちゃん達もそろそろ宿に戻ってる頃かなー。

そんなことを考えながら、わたしはラステーションへと戻っていった。

第十三話 リーンボックスと偽教祖（前書き）

11／21

ラストイシヨンの宿の部分を少し書き足しました。

第十三話 リーンボックスと偽教祖

あれからクエストの報告をして報酬を貰った後、宿屋に戻った。

クエストの依頼者の人は「まさか本当に倒すなんてな…」と驚いていた。

その後は特に変わった事も起こらず、三人でゲームをして遊んでから寝た。

やったゲームは三人ともDSで、わたしがロツ○マンEXEというシリーズのゲーム、二人が最近流行っているというポシエットモンスターとかいうゲームで遊んでいた。

それで、次の日の朝。

わたしはラムちゃんとロムちゃんの二人に両腕を掴まれていた。

「あのー、お二方？　なぜにわたしは捕まっているのでしょうか？」

「フウちゃんが逃げないように」

「なんかわたし信用無くない！？」

「フウちゃん…いつも気がつくといなくなってるから…」

「それはあんたらがわたしを置いて進んでいくからでしょうがぁぁっ！！」

もう、なんだってこんな朝から叫ばなくちゃいけないんだろ…

その後、宿で朝食を取ってから着替え（ルウィーじゃないからいつもより少し薄着の服装）てから、わたし・ラムちゃん・ロムちゃん・ステラの四人でラステイションの色々なお店を見て回った。

四人でルウィーとは違ったデザインの可愛い洋服のお店を見たり、かっこいい銃のお店でわたしがハイテンションになったり（他のみんなは少し引いてた。かっこいいのに）、ステラが本屋からでてこなくなったり、キミズカレーとかいう変わったカレーを食べたりと色々な事をした。

で、今現在はお昼も食べ終わった事なのでリーンボックス行きの定期便乗り場にやってきたんだけど…

「明日まで待たないといけないんですか？」

なにやら一騒動あったみたいで、次の便は明日になるらしい。

港職員さんに聞いたところ、

「ああ。一昨日リーンボックスでトラブルが起こって船が全部使え物にならなくなってね、昨日ある人達がこっちのターミナルにあった故障中の船を一艘直してくれたんだけど、当分はそれだけしか運行しないから船での行き来は不便になると思うよ」

との事。

ともかく一度港から出て、ラムちゃん達と相談することに。

「…だって、どうしょっか？」

「えー！ それだったら一々船なんか待たないで、飛んで行きましょーよ！」

「…わたしも、それがいいと思う…」

「うーん…まあ別に急いでる訳じゃないけど、二人がそう言うならそうしょっか」

ということ、流石に街中で女神化するわけにもいかないので街の外にでて女神化。それから三人でリーンボックス方面に向かって飛んでいった。

あ、ステラは一度本の状態になってもらってわたしが持って飛んだよ。

…そういえば、船代が浮いたね。

ということ、飛んできた為ルウィーからラストイションに行ったときよりも更に何も起こる事もなく、リーンボックスへと到着した。

「ひゃー、なんていうか、サイバーな感じの都市だねー」

「あの真ん中のでっかいやつ、一体何なのかしら？」

「…変なの」

「でも、やっぱり少し治安が悪いっぽいね」

それぞれ思ったことを口にしながら街を見回した後、早速シェア獲得のためにギルドに向かうことに。

その途中で…

「あれ？　そこにいるの…ロムちゃん、フウちゃん、ラムちゃんに、ステラちゃん？」

「あら、余所の国でも声をかけられるなんて、わたし達ってば有名な…げっ！　ネプギア！」

どこかで聞いた声の人に話しかけられたと思ったら、前にルウィーに来ていたネプギアさん達だった。

というか顔を見て早々げっ！　は酷いと思うんだ…

ちなみにステラはわたしが眠ってるときにネプギアさん達と少し話したから一応顔見知りではあるみたい。

「また、げって言われた…私、嫌われてるのかな…」

ああほら、なんかネプギアさん凹んでるし。

「嫌いじゃない…会えて、嬉しい…」

「そ、そうだよ、ほら、ちょっとびっくりしただけで」

「うう…ありがとう二人とも…」

とりあえずフォローを入れておく。

別にどうでもいいんだけど、ロムちゃんの悲しい顔は見たくないしね。

「そういえば、フウちゃんもう大丈夫なの？」

「へ？ あ、うん。疲れてただけだったからもう全然大丈夫だよ」

「そうなんだ、よかった」

確か最後にわたしがネプギアさん達に会ったのって、フウカに能力解放されてる時だったと思うんだけど…怪しむような感じが一切ないのはなんでだろう？

…それを言ったらラムちゃん達も同じなんだけどさ。

「それより、フウちゃん達もリーンボックスに来てたんだね」

「まださっき来たばかり…少しでもシェアを集めようと思って…」

「そっか、がんばってるんだね」

「ネプギアちゃんが、がんばってるから…わたしも、がんばる…」

うーむ、ロムちゃんあの時わたしのペン探しに一緒に行ってもらった時にネプギアさんと話してから、随分と仲良くなってるね。

おかげでラムちゃんがすごく膨れてるけど…

「むむむむっ…そーゆーことだからジャマしないでもらえる！ わ

たし達、忙しいんだから！」

「そう簡単じゃないみたいよ。この国でシェアを獲得するのは」

「…それってどういうこと？」

アイエフさんの言葉に、ステラが反応する。

それからわたし達はネプギアさん達と一緒にいたケイブさんという人に、リーンボックスの教祖によって犯罪神崇拜規制が解除されたことを教えてもらった。

教祖が…そんなことを…？ どうして…

「はんざいしんすーはいきせいかいじよ…ロムちゃん、分かる？」

「（ふるふる）」

「こどもにはむずかしかったみたいですの」

「ば、バカにしないでよ！ こんなフウちゃんなら絶対知ってるもんね！ ね、フウちゃん！」

「はえ？ ごめん、聞いてなかったよ」

「フウちゃん…ちゃんと話は聞いておこうね…」

なにおう、ちゃんと聞いてましたよ。犯罪神崇拜規制解除のほうだけ。

「えっと、よーするに普通犯罪神を崇拜するのはダメって教会とかが止めるはずなのに、教会がそれを許しちゃって誰でも好きに犯罪神を信仰できるようになってるってこと」

「なにそれ！？ そのチカって教祖バカじゃないの！？」

「いや、街のど真ん中でその国の教祖をバカって言っちゃダメだよラムちゃん…」

わたしの説明に信じられないといった表情になるラムちゃんに、つつこみを入れるステラ。

「ともかく、そのチカって人が悪い奴ってことでしょ！」

「そうであれば話は単純だけど…チカの言動がおかしくなったのは、本当にここ数日のこと。悪と断定するのは、まだ早いと思うわ」

「じゃ、じゃあ…分かった！ きっと、そのチカはニセモノなのよ！」

「偽者？」

偽者って…本の物語じゃあるまいし…

「そう、悪いやつがすり替わってるのよ。それならツジツマが合うわ！」

「…そういう絵本、読んだことある」

「…その可能性は低いんじゃない？ 偽者だったら、さすがにケイブが気付くでしょ」

「…いいえ。多分気付かないわ」

「「え？」」

「気付かないの！？」

「私は人の機敏には疎いから…外見が同じであれば、簡単に騙される自信があるわ」

「それ自信持つことじゃないからね？」

「でも、それじゃ…」

「しらべてみる価値は、ありそうですね」

その後ネプギアさん達が色々話し合って、ユニという人が様子がおかしくなる前に会ってるかもしれないようで、その人を探しに行く

ことにしてみたい。

「ロムちゃん達も一緒に来る？」

ネプギアさん達が探しに行く間に、わたし達にそう言ってきたけど、

「…うん、一緒に…」

「わたし達は忙しいの！ 教祖とかキョーミないし！ 行くなら自分達だけで行きなさいよね」

まあ、ラムちゃんがこんな感じだから無理だね。

「そっか…それじゃ、また後でね」

「あ…うん…」

そう言って、ネプギアさん達は行ってしまった。

「それじゃ、わたし達も行こっか」

「うん…」

「そうだねー」

「……………」

んー、なんかその教祖、気になるなあ…

…ちょっと見に行ってみようかな。

「フウちゃん？」

「ん、ごめんごめん。あのさ、ちょっとやりたいことがあるから、先に三人でギルドに行っててくれないかな？」

「え？ まあ、いいけど。早く来てよね？」

「わかったよー」

わたしはラムちゃん達にそう言って、気になった教祖を見に行くべく教会へと向かった。

「ここがリーンボックスの教会だね」

途中、迷子になりかけたけど近くにいた人に道を聞いて何とか教会へとやってきた。

教会の扉の隙間から中を覗いてみると、なにやら黄緑色の髪の女の人があるそうにしていた。

あれが教祖、かな…？

「あれ？ フウちゃん？」

「ひゃいっ!？」

そんなことをしている時に急に後ろから話しかけられたものだから、びっくりして変な声を上げてしまった。

「あ、皆さん…」

「こんなところで何をしてるのかしら？ あの人と一緒にしないの？」

「さっき話してた教祖が気になったから、三人とは別行動でここに

来たんだよ」

「ネプギア、誰？　この子」

ここに理由をアイエフさんに言っていると、ネプギアさんの後ろからツインテールの女の子がやってきた。

「あ、ユニちゃん。この子はルウィーの女神候補生のフウちゃんだよ」

「へえ、この子が…アタシはラストেশヨンの女神候補生のユニよ、よろしくね。フウ」

「え、あ、る、ルウィーの女神候補生のフウです。よろしく…」

あれ、なんで自己紹介してるんだろ、わたし…

「あの、それより教祖に会いに行かないの？」

「そうでした。教祖さんはいたんですか？」

「うん。教会の中にいるよ。でもなんかすごくだるそうにしてたけど」

「ますます怪しくなってきたわね…さっさと会いに行きましょう」

ネプギアさんのパーティーの半分が空気になってる気がするけど、気にせず教会の中へ。

「こんにちはー。チカさん、いらっしゃいますか?」

「うおわ!?! …とと、この声じゃネエ。あ、あー…はい、私はここにいますよ?」

ネプギアさんが教会に入って挨拶をすると、奥からさっきの黄緑色の髪の女の人、教祖チカ(?) さんが出てきた。

「よかった、やっと会えたわ。頼まれていたモンスター退治して以来、ずっと会えなかったから逃げられたのかと思った」

「ぎくっ。そそ、そんな。逃げるなんてやましい方のすることでしょう?」

「…………あれ? ネプギアさん達ワザと気付かないフリしてるの?」

「そういえば、ゲームキャラの情報をくれるって約束だったよね。すっかり忘れてたよー」

「あ、あーっと…その件は、現在こちらで調査中では…ん?」

「「……………」」

アイエフさん達と話していたチカさん（仮）がわたしとユニさんの存在に気付き、こっちを見てくる。

「あっ！ テメ…じゃない。あなた方はラステイションの女神候補生にルウィーの女神候補生…な、なんでここにいらっしゃるのかしら？」

「あれ？ わたし達のこと知ってるんですかあ？」

「初めてお会いするのに、光栄です」

そう返ただけで動揺するチカさん（偽）。

…もうこれ偽者だと思うんだけど。

「う、あ、それは…きよ、教祖として、女神候補生の顔くらいは存じてますのよ。ええ」

「…ボロ出すの、早すぎない？」

「…わたし、もう少し演技力のいい人だと思ってたよ…」

「…なんで私、気付けなかったのかしら…」

「それにこいつ、多分…」

「うん…わたしもこの人、知ってるよ…」

まず声でわかったもん。

「あ、ごめんなさい。よく考えたら、お会いするの初めてじゃなかったですね」

「ええっ？　そ、そうだったかしら？　最近どうも、物忘れがひどくて…」

「そうね。大分前のことだもんね。ラストイションでアタシにぶっ飛ばされたことなんて、都合よく忘れてるわよねー」

「それと、わたしを誘拐してラムちゃんとロムちゃんにボコボコにされたのも、都合よく忘れてるよねー」

「だ、誰が忘れるかよ！　テメエみたいな生意気なクソ小娘と、あのクソガキンチョなんぞにやられた屈辱…あ！」

…もうバカだよね、この人。ホントーにバカだよね、このチカさん（下っ端）。

「もしかして…下っ端さん、ですか？」

「すごい。ユニちゃんフウちゃんどうして分かったの？」

「どうして分かんなかったのか、逆に聞きたいわよ…」

「まずどう聞いても声があ那时的誘拐犯さんだもん。分かりやすく言うとな皆川○子さん」

「メタ発言はやめておきなさい」

「分からなかった…自分より年下っぽい子でも分かったのに…諜報部失格だわ…」

ああ、アイエフさんがすごく落ち込み始めた。

「く、クソッ！ この完璧な変装がバレるなんて…けっ！ 今まで簡単に騙されやがって。頭の中までめでてえ連中だぜ！」

うん、それに関しては流石に庇いきれないよ。

その後、えーと…下っ端さん？ が逃げ出して、それを追ってネプギアさん達も教会から出て行った。

…わたしとユニさんを置いて。

「あ！ 待ちなさいよ！ 人に仕事頼んでおいて、おいてけぼり！」

？ ちよつとー！？」

「ネプギアさん達って、いつも慌しいパーティーだね…」

「ホントにね…ま、まあ別に一緒に行きたかったわけじゃないからいいけど、ふん！」

「あ、わたし知ってる。それってツンデレっていうんでしょ？」

「誰がツンデレよ！」

まあそれからは特にやることもなくなったので、ユニさんと別れてラムちゃん達のいるギルドへと向かっていった。

第十三話 リーンボックスと偽教祖（後書き）

最近ふと思い出して人気投票の結果を見た後…

フウ「人気投票…ルウィーのメンバーは微妙だったね…」

ラム「わたしの四つ下があの変態っていうのが気に入らないけど、一番かわいそうなのはミナちゃんよね…」

ブラン「一応、ルウィーメンバーではトップだけど…本当にネタにもならない中途半端な順位…」

ロム「……………チッ」

フ・ラ・ブ「「!？」」」

ぶっちゃけロムちゃんってホントに黒そうな気がするっていう（笑）

第十四話 ドラゴン退治！(前書き)

ここから何話かはクエストとかの日常系になりそうです。

第十四話 ドラゴン退治！

あれからギルドで待っていたラムちゃん達と合流して、シェアを集めるために適当なクエストを受け、わたし達はクエストの目標モンスターにいるガペイン草原へとやってきていた。

クエストの内容はエレメントドラゴンの討伐。

危険種のクエストばかりじゃないかって？　そこは気にしたら負けだよ。

で、今現在の状況はというと…

「あーもう！　何なのよこのひまわりみたいなのと箱は！　うっと
うしいわね！」

「キリがない…」

「ホントにっ！　撃っても撃ってもっ！　キリがないよっ！」

ひまわり型のモンスターと王冠を被った箱みたいなモンスターの大群に囲まれています。

それぞれ杖での打撃・魔法、よくわからないバスター（魔法銃って言うらしい、どう見ても大砲にしか見えないけど）で魔法弾を撃ちまくったりして倒しているんだけど、全然数が減っていかない。

「このっ！ ああもう、こうなったら！ ラムちゃんロムちゃん、アレで纏めてやっつけちゃおう！」

「アレって…」

「！ アレね！ わかったわ！」

わたしの言葉を理解した二人は、モンスターを囲むような位置に移動する。

「え？ え？ なにするの？」

「ステラ！ そいつ等一箇所に集めて！」

「な、なんかよくわからないけど、わかったよ！」

ステラに頼んで、モンスター達を一箇所に集めさせる。

「よし、行くよ二人とも！」

「ええ（うん…）！」

二人に確認を取って魔力を集中させ、魔方阵を展開していく。

「いくよー！ ブランさん直伝！」

一つ目：

「あんたらなんか、周りの大気ごと…」

二つ目：

「凍らせる…」

そして三つ目。

最期にモンスター達の足元に大きな魔方陣を展開する。

「これで終わり！ エターナル！」

「フォース…」

「ブリザード！」

最後に三人で力を合わせて魔方陣を杖で砕く。

すると、モンスター達のいる魔方陣に冷気が集まり、大気もろとも氷漬けになった。

そしてその氷が音を立てて崩れると、そこにいたモンスター達は一匹残らず撃破されていた。

「ふふん、どーよっ！」

「はえー、三人ともやるねー」

ラムちゃんが胸を張って、ステラが称賛してくれる。

本当なら一人でも使える魔法なんだけど、今のわたし達じゃ三人で力を合わせないと使えない強力な魔法だ。

「でも、この量はおかしくない？ それに普通なら多少戦える人とかもいたりするのに、人の気配なんて全然しないし」

「（こくこく）」

そう、ルウィーやラステイションでも多くないにしろ、少しくらいは他にもモンスターを狩ってたりする人がいたのに、ここリーンボックスには一人もいない。

それだけマジエコンヌの支配力が強いってことなのかな…

「あ！ 依頼のモンスターってあれじゃない？」

なんて考えているとラムちゃんが目標モンスターを見つけたみたいで、指差しながらそう言う。

「えっと…うん、あれだね」

「…大きい…」

ラムちゃんが指差した先には、一匹のドラゴン。きっとあれがエレメンタルドラゴンだろう。

ドラゴンというだけあって、けっこう大きい。

「勝てるの…?」

「あんなの、わたし達ならくしょーよ、らくしょー!」

「まあ、ブレスに気をつければ大丈夫だと思うよ」

「そうだねー。できるだけ散らばって戦うことを頭に入れておいてね」

作戦会議も終わり（今のがそうだったみたい、短いね）、それぞれ武器を構えなおしてドラゴンへと突撃する。

ドラゴンは突撃してくるわたし達気付くなり、いきなりブレスを放ってきた。

「つていきなりブレスだよ！」

「危なっ！」

まだ散らばる前だったので、咄嗟にステラが前に出て防御壁を張った事によりわたし達は無傷で済んだ。

「た、助かった…」

「もう！ 最初からSPが溜まってるなんてずるいわよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないってば！ 来るよ！」

わたし達が呑気に会話をしている間もドラゴンは待ってくれるはずもなく、鋭い爪で切り裂こうとしてきた。

それをそれぞれ横っ飛び、バックステップ、飛翔で回避していく。

「きゃっ…！」

「いたっ！」

だけどドラゴンはブレスを防がれたからかステラをターゲットして
たみたいで、ドラゴンが自分の頭上を飛び越えて反対側に行ったス
テラの方に振り返った時、わたしとロムちゃんがドラゴンの振り向
いた時の尻尾による打撃を受けてしまい、尻餅をつく。

「ロムちゃん！ フウちゃん！ 大丈夫！？」

「いたた…だ、大丈夫だよー…」

とは言ってるけど、ちょっとだけ涙目になってたりする。

キラーマシンにやられたときよりは全然平気だけど、でもやっぱり
ホントは痛い。

大体、あの時は泣く暇も無いほど痛かったから涙も出なかったんだ
けどさ。

「うく…わたしも…大丈夫…」

そんなわたしを見たからかどうかはわからないけど、ロムちゃんも
泣きそうになるのを堪えてそう言った。

「あー！ ロムちゃんとフウちゃん泣かした！ もう絶対許さない
んだから！ ステラちゃん一緒にコイツをこてんぱんにするわよ！」

「わかってるよ！」

なんかよくわからないけどそんなわたし達を見てラムちゃんとステラが怒ったみたいで、二人に魔力が集まっていく。

「…今のうちに…ロムちゃん、こっち来て！」

「（こくっ）」

なんかよくわからないけど、二人がドラゴンを惹きつけている間にロムちゃんを呼んで大技の準備を始める。

「くらいさない！ エアブラスト！」

「ターゲット目標、ロック補足…ファイアっ！」

ラムちゃんが竜巻でドラゴンを巻き上げ（あんな重そうなやつでも吹き飛ばんだね）、巻き上がったドラゴンにステラが追撃する。

「まだよ！ アイスコフィン！」

そして落ちてきた所を狙って、ラムちゃんがドラゴンを氷漬けにす

る。

…やるなら、今だね。

「ステラ！ 全力で砲撃を撃ってね！」

「！ なるほどね、言われなくても！」

わたし達が魔力を溜めているわけにきずいたステラは、そう言っ
て魔砲に魔力を溜めていく。

わたしとロムちゃんの方も充填完了だ。

「エネルギーチャージ魔力充填完了！ 行くよっ！ ブラスト…ファイアーツ！」

ステラの掛け声と共に、魔砲から紫色の砲撃が氷漬けのドラゴンに
放たれる。

「ようし！ ロムちゃん、全力で行くよ！」

「うん…！ デイバイン…」

「バスターツ！」

それに続いて、わたしとロムちゃんがさっきから溜めていた魔力を一つの杖で一緒に放射し、ステラと真逆の位置から水色の砲撃を放つ。

砲撃の反動で腕が震えて気を抜いたら尻餅をついちゃいそうだけど、そんなことになったらロムちゃんが危ない。

わたしも危険だけど、ロムちゃんに怪我なんてさせられないからねっ！

「「「はああああああっ！！」」」

三人で全力で魔力をぶつけ合い、次の瞬間魔力同士がぶつかった影響で爆発が起きた。

そして、光が収まった時にはドラゴンは撃破された後だった。

「わー！ 三人ともすごーい！」

「…えへへ」

「いや、まさか魔力同士のぶつけ合いで攻撃するなんてね。その発想はなかったよ」

「ふふん！ すごいで、しょー…」

そう言うと同時に、わたしは全身から力が抜ける感覚に陥りその場にへたり込んでしまう。

ロムちゃんも同様で、わたしに寄りかかるようにへたり込んできた。

「え？　だ、大丈夫！？」

「あー…うん…大丈夫ー…」

「ちょっと…疲れただけ…だから」

「そりゃあ、あれだけの量の魔力を一気に使ったらそうなるよ。もう…」

そんなわたし達をラムちゃんが心配してくれて、ステラが腰に手を当てながらジト目でそう言う。

それから少しだけその場で休んだ後、わたし達はギルドに戻ってクエストの報告をした。

ちなみに取得シエアはなかなかでした。

第十四話 ドラゴン退治！（後書き）

ツバキ「あとがきコーナー！」

黒フウ「……担当は……いつだったか活動報告で出たわたし……あるルート後のフウと……」

ツバキ「作者のツバキでお送りしますー！　ちなみにフウちゃんはわかりづらいから黒フウって表記ですー」

黒フウ「……それにしても……更新遅かったね……」

ツバキ「……ぶ、文化祭の準備で忙しかったんだよ！　うん！」

黒フウ「……ホント……？」

ツバキ「ホントホント！　決してデッドドラオフレコにはまってたからとか、そういうんじゃないからね！」

黒フウ「………ダーインスレイヴ……繰り返す絶望の剣……！！」

ツバキ「ちょ、まててギアアアー！」

ツバキ「……き、気を取り直して……そういえば追加スキルは配信されたね」

黒フウ「……メーカーさんのスキルとか……これで日本一さんや5p d. さんにも出番が……」

ツバキ「でも、守護女神達にも追加されたよね」

黒フウ「……やっぱり……女神がジャマを……許せない……」

ツバキ「なんだかすごく理不尽な理由で恨　ま　れてます、守護女神様達」

黒フウ「……それじゃ……ここで前にあった女神の飛行について……」

黒フウ「……自己解釈なんだけど……女神のプロセッサユニットはそれぞれの部位に力……信仰だか神力だかの力を平均に纏っていて女神を強化しているの……」

ツバキ「で、それらの力はある程度なら操ることができるんだ。パ

ープルハート様とかブラックハート様みたいな力を剣の形にしたりするのは守護女神様クラスでないと難しいけどね」

黒フウ「……でも、纏っている力を集中させることは簡単だからできる……だからその力をバックユニットに集中させると……攻撃力・防御力を犠牲に機動力・飛行能力などが上昇するの……」

ツバキ「なんだっけ、スパロボのバックファイア？みたいな感じだと思えばわかりやすいかも？ まあスパロボあんまり知らないんだけど」

黒フウ「……ならなんでその例えにしたの……」

ツバキ「他にも何か質問がありましたら受け付けますので、あったら感想にお願いしますー」

黒フウ「……それじゃ……今回の登場技の説明……」

――登場技説明――

○真・Eフォースブリザード「Cスキル…フウ・ロム・ラム」

ルウィー女神候補生三人による、対象の周りの大気ごと凍らせる氷属性最上級魔法。

実際のEフォースブリザードは一人でも使える魔法だが、この三人はまだ未熟なので力をあわせないと使うことができない。

それでも元々の保有魔力がかなり高い三人なので、即死タイプの完全版となった。

○ディバインバスター「使用者…フウ・ロム・ラム」

とあるアニメで見た砲撃魔法。

魔力をチャージすることにより威力が増幅する、他の使用者と強力してチャージすれば効果も倍増。

○ブラストファイア「使用者…ステラ」

ステラの魔砲で放つ砲撃魔法。効果はディバインバスターと殆ど同じ。

フウ、ロム、ラムの三人と協力して放つことはできないが、ステラ自身の魔力が凄まじいので一人でも十分な威力となる。

○ツインズバスター「Cスキル…ステラ・フウ・ロム（ラム）」
ルウィー女神候補生二人と白の魔導書によるコンビネーションスキル。

ディバインバスター×2とブラストファイアーを挟み込む形で対象に放ち、二つの砲撃の威力と砲撃のぶつかり合いにより生じた爆発で対象を消し飛ばす。

ちなみにディバインバスターの方を×3にしてしまうと、ステラの方が押し負けてしまい大惨事になる。

流石の白の魔導書といえど、魔法の才能がある女神三人の魔力には負けるようだ。

第十五話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 前編（前書き）

今回短めです。

第十五話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 前編

「さて、と。何しようかな…」

ギルドへの報告を終えて宿に戻って少しの間四人で遊んでいたんだけど、途中でラムちゃんとロムちゃんの二人が寝ちゃったので二人はステラに任せて、わたしはリーンボックスの街を歩いて回っていた。

え？ 迷子にならないのかって？ そんなことあるうかとちゃん
と転移符を置いてきたから大丈夫！

『迷子になるの前提なのね。それに確かそれってあまり離れすぎると使えないんじゃないかなかったかしら？』

「う、うるさいっ！ 急に出てこないでよ！」

急に現れたフウカに怒鳴り、ハッとする。

フウカはわたしにしか見えてないというのを思い出したからだ。

案の定、周りの人達が何事かとわたしの事を見ている。

「う…う…う…」

『バカねえ…』

「誰のせいだと…っ！」

フウカにバカにされてまた怒鳴りそうになったけど、どうにか抑えて足早にその場から立ち去る。

…周りの人の目が痛いしね…

『…あら？』

「…どうしたのよ」

そのまま街をうろうろしていたら、急にフウカが声を上げたので少し不機嫌気味にどうしたのか聞いてみる。

『そんな怖い顔しないの。折角の可愛い顔が台無しよ？』

「か、かわっ…!? そ、そうじゃなくて! どうしたのかって聞いているの!」

『ふふっ、そういう反応が可愛いだよ、ってそうじゃなかったわね。この先で誰かが追われてるみたいよ。で、その子がこっちに逃げてきてる』

「え? …あ、ホントだ…」

フウカに言われて道のずっと向こう側をよく見てみると、誰かが追われてる姿が確認できた。

「…助けた方がいいかな」

『私に聞かれても。一応そこに追っ手を撒けそうな路地裏があるけれど』

「じゃあ助けようよ。困ってるみたいだし」

『相変わらずお人よしねえ』

なんて話している内に、追われてる人が近くまで来ていた。

「「「5 p d . ちゃん!」」」

「ひゃああああっ!　なんで追いかけてくるのーっ!？」

追いかけられている人は綺麗な青い髪の女の人で、涙目になりながら男の人達から逃げている。

それじゃ、助けようっか。

「お姉さん！ こっち！」

「へっ？ えっ？」

「いいから！ 早く！」

「あ、う、うん…！」

追われていた青髪のお姉さんを呼び止め、手を取って路地裏へと走って逃げる。

「路地裏行ったぞー！」

「それより誰だあの幼女は？」

「5 p d. ちゃんには劣るがあの子も可愛いぞ！」

「幼女来た！ これで勝つる！」

なんか、わたしにも身の危険が…これは本気で逃げないと危ないかもしれない…

『くく…この娘に関わったせいで貴女も危ない状況になったわね』

「ちょっと黙っててよ！」

『あら、いいの？ 折角逃げ道をナビゲートしてあげようと思ったのに』

「ぐ…は、早く案内してよ！」

『はいはい』

「…？」

そんなこんなで、わたしはフウカの指示にしたがって青髪のお姉さんと一緒に路地裏を逃げ回った。

「はぁ…なんとか、撒いたかな…？」

『そうね。もうアイツらの気配は感じられないわ』

あれから分かれ道を曲がりまくったりゴミを蹴っ飛ばして足止めしたりして、なんとか追っ手を撒くことに成功した。

はあ、しつこい人達だったよ…

「え、えっと、その…助けてくれて、ありがとう…ボクは5 p d.
って言うんだ、君はなんていうの…?」

壁を背に両手をついて寄りかかりながら呼吸を整えていると、助けたお姉さんがお礼と自己紹介をしてきた。

「あ、わたしはフウって言います。それで5 p d. さんはなんで追いかけてたの?」

「あ、あー…あの人はボクのファンの人達なんだよ。なんだっけ、過激派? っていう部類の人達みたいなんだけど…いつもならケイブさんが追い払ってくれるんだけど今日はいいから、それで…」

「ファン…? なにかやってるの?」

「あれ、知らなかったんだ。ボク、アイドルをやってるんだけど…」

「アイドル…5 p d.」

んー…、寸での所まで出掛かってるんだけど…なんだっけ………あ!

「…ああー! 思い出した! え、お姉さんってあの5 p d. さんなんですか!?!」

「う、うん」

『何？ 知ってるの？』

「うん！ 5 p.d.さんはリーンボックスで有名なアイドルなんだよ！ わぁ、本物に会えるなんて思ってなかったよー！」

思いがけない人と出会えて、思わずテンションが上がる。

「ああー、サイン欲しいけど書いてもらえそうな物を持ってない…！ …白紙の魔法符はあるけど爆発しそうだしなあ…」

前にロムちゃんとラムちゃんの二人が魔法符に落書きしたとき、書かれてしばらくしたら爆発したことがあったからね…あの時はミナさんに怒られて大変だったなあ。

「でも、過激派なんて大変だね。一回バシっと言っちゃった方がいいんじゃない？」

「うう…ボク、ライブの時は大丈夫なんだけど、普段は凄く人見知りしちゃうんだ…ケイスさんがいつも言ってるんだけど諦める様子がないみたいだし…」

『確かにさっきはわかりやすいほどに人見知りしてたものねえ』

「へえー、アイドルも大変なんですね」

と、アイツらから逃げ回るので大分時間経っちゃったから、そろそろ帰らないと心配されちゃう。

「えと、それじゃわたしはそろそろ帰るね」

「あ、うん。今日は助けてくれてありがとう。フウちゃん」

「いえいえ、それじゃ、今度ライブ見に行くからねー！」

そう言いながら5 p d. さんに手を振りながら別れを告げる。

…あ、街の探索……明日でいっか♪

明日のことを考えながら、わたしは三人の待つ宿に帰っていった。

第十五話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 前編（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏―

ツバキ「はいー、あとがきコーナーです！」

黒フウ「……何？ このタイトル……」

ツバキ「いやあ、某所では後書きにタイトルついてるのが多いからさ」

黒フウ「……それにしても、アイエフさん並のネーミングセンス……」

ツバキ「……気にしたら負けだよ！」

黒フウ「……はあ……今回は昔のわたしが使ってた魔法符についての説明……」

ツバキ「フウちゃんの使ってる魔法符は一見ただの紙切れに見えるんだけど、紙にルーン文字を書き込むと低級魔法が使えるんだ。小さい炎を出したり物をしまったりね」

黒フウ「……他にも……携帯電話みたいなものとか発信機みたいなもの……さらに二つの符を使えば都市の広さ程度の範囲なら一瞬で移動できる転移とか、小さい次元の穴を作ってそこに射撃、相手の不意をつく攻撃に使うとか……色々な事に使える万能アイテム……」

ツバキ「ただし、ちゃんとした文字を書き入れないと魔力が暴走して爆発を起こしたりするんだ。作中のフウちゃんが言ってた落書きとかね」

黒フウ「……無属性の魔力の暴発だから火事にはならないけど……それでも危険……」

ツバキ「あと、ただの紙にルーン文字を書いても意味がないんだよね。ちゃんと魔力を込めた紙じゃないと」

黒フウ「……これをステラに教えてもらったばかりの時はステラしか作れなかったけど……ブランさんがいなくなって三年後の時にはわたしでも作れるようになって……」

ツバキ「とまあ、便利な代物なんだけど、中級とか上級の魔法は使えないんだよね。紙が破けちゃって」

黒フウ「……この時点で十分使えるからそれでいいけど……」

ツバキ「こんな感じかな。それじゃ、次回もお楽しみに！」

第十六話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 後編（前書き）

BASARA宴とゆめにつきハザードにハマっていたせいで遅れてしまった…

今回オリキャラがです！ 元になったキャラ知ってる人いるかな…

第十六話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 後編

「んゝ…なんかも目が覚めちゃったなあ…」

5 p.d. さんと出会った次の日の朝、まだ太陽が昇り始めたばかりの朝焼けの時間。

わたしはなぜかいつもよりも早めの時間に目が覚めてしまい、暇を持て余していた。

「…あれ？ ステラ？」

暇だから外の空気でも吸おうかな、なんて思ってエントランスに降りてみたら、ステラがエントランスのソファで何か変わった色の飲み物を飲んでいた。

「あ、フウちゃんおはよ。今日は早起きだね？」

「うん。なんか目が覚めちゃって」

特にやることも無かったので、ステラの座ってる隣に座る。

「ね、何してたの？」

「私もフウちゃんと同じだよ。目が覚めちゃったからここにいただけ」

「ふーん…何飲んでるの？」

…これ、なんて飲み物なんだろう？　ぶどうジュースみたいな色してるけど。

「これ？　まあ、フウちゃんみたいな子供には早い飲み物だよ」

「む…ステラだって子供でしょ？」

「何言ってるのさ、私はずっと昔から生きてるんだよ？　見た目はこれだけど子供じゃないよ」

そう言って飲み物を飲むステラ。

…むー…

「…えいっ」

「あっ」

子供扱いされて少しムツと来たので、隙を突いてステラからグラス

を横取りする。

丁度喉も少し渴いてたし、えい、飲んじゃえ！

「あ！ の、飲んじゃダメっ！」

「んく、んく……ぷは！ ……なんかヘンな味だね、これ……」

ステラがダメって言ってるけど、何でだろ……？

……あれ……？ ……なんか、頭がぼーっとしてきた……

「ふ、フウちゃん……？ 大丈夫？」

「んゆう……？ らいじょうぶだよ、ぜんれんへいき……」

なんだろ、これ、ヘンな気分……

「うわ、もう顔真っ赤だし呂律まわってないし……でも一杯で酔うほど弱いんだね……」

「んふゆー、すてらあー♪ ぎゅーっ！」

「わっ、と。……はあ、だから飲んじゃダメって言ったのに……」

えへへへ、なんか良い気持ち……♪

ん……ふあう……なんか……眠くなつて……

「……くう……」

「……あれ？　寝てるし、つーか寝付くのはや……はあ、もう……」

「……んう……あれ……？」

気がつくと、わたしはベッドの上で横になっていた。

窓からは既に朝の日差しが差し込んでいる。

「さっきまで起きてた気が……イタっ!？」

ゆっくりと上体を起こして辺りを見回していると、不意に頭痛に襲

われた。

「うう…ガンガン…とまではいかないけど、頭痛い…」

もう、なんなのよ…

「あ、フウちゃん起きた？」

よくわからない頭痛に首をかしげていると、ステラが部屋に入ってきた。

「あ、ステラ。おはよう」

「え？ あ、うん、おはよう。ごめんね、私がちゃんとしてれば…」

「へっ？ なんのこと？」

わたしはステラの言ってる意味がわからず、再び首をかしげる。

「…記憶飛ぶレベルだったんだ…でも、さっきのフウちゃん、ちょっと可愛かったな…」

「え？ なにか言った？」

「い、いや！ ううん、なんでもないよ！ ほら、もう二人は朝ご飯食べに下に行ってるから、私達も行こう？」

「あ、う、うん…？」

な、なんかよくわからないけど、気にしないほうがいいかな？

とりあえず色々と気にはなったけど、四人で朝ご飯を食べてリーンボックスの公園へとやってきた。

「さて、どうしようか？ またギルド行ってクエストでシェア集める？」

「そうねー、手ごわそうなのは昨日やったアイツくらいだったし、それなら余裕よね」

「（こくこく）」

「そうだねー。それじゃ、ギルドを目指して——ん？」

今日の予定を四人で決めて、さっそくギルドへ向かおうとした所、気になる人が目に入った。

「…フウちゃん…？ どうしたの…？」

「…………あ、あれって…」

三人が不思議そうにわたしを見つめてきたけど、それどころじゃなかった。

わたしが見ていたのは、一人の男の人が、女の子を担いで走っていく姿。

そしてその女の子が——昨日の青髪の、5 p d. さんだった。

それに、5 p d. さんを連れて行こうとしてる人にも見覚えがあった。

「あれは…昨日の…!? それじゃ、これって、誘拐!？」

「え? ふ、フウちゃん? どうしたのよ？」

「って、フウちゃん!？」

そう気付いた時には、三人の声も気にせずわたしは既にあの男の後を追いかけていた。

追いかけて、追いかけて、人混みを縫うようにすり抜け、追いかける。

相手は男の人だからわたしよりも足が速いけれど、それでもなんとか見失わないよう、走り続けた。

追いかけている時に気付いた事は、5 p d. さんは眠らされているようだったことと、どんだん街の中心部から離れて街の外を目指していることの二つ。

前者は、まあ、そうじゃなかったら抵抗くらいするよね。

でも、後者がわからない、街の外はモンスターがいて危険なのに…しばらく追いかけて続けていると、町外れにぽつんと一つだけ建つマンションへと到着した。

さっき入っていくのが見えたから、5 p d. さんがここにいるのは間違いないかな。

『あら、変わった建物ね』

「わああっ！　び、びっくりした…」

全力で走って息を整えていたら、急にフウカがでてきてびっくりしてしまった。

「ば、バカあつ！　いきなり出てこないでよ！」

『あら、ご挨拶ね。街を出た辺りからいたというのに』

「だったらもうちょっと早く声掛けてよ！」

『いやいや、何やら緊迫した表情だったから声を掛け辛かったのよ』

ホントかな…

って、それよりも5 p d. さんだよ！

「い、いそがないと！」

『…ねえ、フウ』

「何?! 早く5 p d. さんを助けないと！」

『いや、これ…なにかしら?』

早速乗り込んで5 p d. さんを助け出そうと思っていたら、フウカがわたしを呼び止め地面を指していた。

何だろう? と思って見てみると、地面に人の形に白い線が書かれていた。

「これって…事件とかがあった時、死体の場所に書くやつじゃない?」

『ふうん…ということは、昔ここで誰かが死んだのかしら?』

「こ、怖いこといわないでよ！」

いや、そうなんだろうけどさ、廃墟になったマンションでこういうのってすつごく怖いんだけど…

『誰かこの建物から飛び降りでもしたのかしら？』

「だ、ただだからそういうこと言わないでってば！」

ワザと？ ワザとなの？ ねえ？

なんて怖がっていると、不意に上から何かの視線を感じた。

はっとして廃墟マンションを見上げると、マンション上の方のベランダに金髪で髪が左右に少し跳ねた感じの髪型の女の人が出て、こっちを見ていた。

「——ッ！ っっッッ！！」

『ちょっと、どうしたのよ急にそんな涙目になって。そんなに怖かったの？』

そ、そうじゃなくて！ あれ！ あれえっ！ 上っ！

『…？ 上？ …何もないわよ？』

「え…？」

そういわれてもう一度見上げると、女の子の姿は消えていた。

………

「…帰って、いいですか…？」

『何言ってるのよ、5 p d. って子を見殺しにする気？』

そ、そうだけど！ そうなんだけど！ でも怖い！

『…はあ…バカやってないで、早く行くわよ。こうしてる間にも彼女が危ない目に遭ってるかもしれないのだから』

「ちょっ！ フウカ！ 置いてかないでよお！」

今一人になるのだけは絶つつつ対に嫌だったので、先に行くフウカに続いて廃墟マンションへと突入した…

「……………」

『ふうん、流石に廃墟だけあって、人氣が全くないわね』

「……………（ぶるぶる）」

表情一つ変えずに先を進んでいくフウカの後ろを、びくびくしながらついていく。

…多分、フウカに実体があったらしがみついているだろう。

「…あ、あのさ、フウカは5 p.d. さん達のいるところの目星とかあって進んでるの…?」

『え? あてずっぽうだけれど?』

…まあそんな気はしてたよ。

『あら? この部屋、微かに人の氣配がするわ』

「ホントに？　嘘だったら怒るからね？」

『でも……何か……？』

フウカがまだ何かぶつぶつと言っていたけど、気にしないで扉を開けた。

流石にいきなり部屋、なんてことはなかったけど、奥に進むとこの寂れたマンションには似合わないくらいに綺麗な部屋があった。

「…なんで、この部屋だけこんなに…？」

そう、ここは廃墟となって所々がボロボロになったマンションのはず。

なのに、この部屋だけはまだ誰かが使っていたかのようなほど、綺麗だ。

部屋にはテレビにゲーム機、ベッド、パソコンなど、まだ誰かが使っているかのような家具が置いてあった。

『…？　おかしいわね…』

「今度は何？」

『いえ、さっきまで微かに人の気配がしていたのに、この部屋に来

た途端にそれがなくなったのよ』

「そうなの？　でも確かにこの部屋、なにかおかしいね…」

人の気配はしないのに、どうしてこの部屋だけ最近まで誰かが使ってたかのような感じがするんだろう…

『…引っ掛かる点は多々あるけれど、今はあの娘を助ける方が優先よ』

「う、うん。そうだね…」

とにかく早く5 p.d.さんを助け出さないといけないから、気にはなるけどこの部屋を後にした。

「……………」

扉を閉めるとき、チラつと女の人が見えたのは気のせいということにした。

…だって怖いんだもん。

あの部屋を出て鍵の開いていた部屋は一通り見てみたけれど、ほとんどの部屋が何もない古びた部屋だった。

「5 p d . さん、どこにいるんだろう…」

『開く扉は全て調べたし、残るはこの最上階だけれど…どうやら当たりのようね。微かに声が聞こえるわ』

横で目を瞑っていたかと思うと突然そんなことを言うフウカ。

目を瞑っていたのは耳を澄ませていたからみたい。

「じゃ、早く助けないと！」

『まあ、待ちなさい。こういうのはまず様子を伺う物よ』

…なんか、妙にノリノリじゃない？ この人。

とりあえず、そんなフウカの後に続いて進んでいく。

『…いたわ…』

「うん…」

進んでいくと一つだけ開け放たれた扉があり、壁に隠れながら中を覗いてみると男が三人と5 p d. さんが腕と口を塞がれた状態で座らされていた。

どうして、こんなことを…

「へっへっ、上手くいったっすねアニキ！」

しばらく様子を見てみると、中から話し声が聞こえてきた。

5 p d. さんは口を塞がれているから、拐った人達だろう。

「ああ、マジエコンヌ様の言った通り、無事コイツを拐うことができたからな。今回は前々から邪魔してきたあの赤いヤツが調度いなくて運が良かったぜ」

「あ、後はマジエコンヌ様の所へ連れていくだけなんだな」

…なんていうか、狙ったかのようにチビ・デブ・ノツポで分かれた人達だね…

じゃなくて、あの人達5 p.d.さんのファンなんかじゃなくて、最初から5 p.d.さんを攫う気だったんだ。

昨日は他にもいたけど、多分その人達は利用されただけだろう。

そういえば、5 p.d.さんの歌には不思議な力があるって聞いたことがある、それが目的？

「とは言うものの、どうしようか…」

『このまま突っ込んだら、いつかフウが攫われた時のようになる可能性が大だものね』

あれも見ってたんだ…

いやそれよりも、ホントにどうしよう…

「…さっきから、人の住居でうるさいんだけど」

「!?(びくっ)」

『な…何時の間に…?!』

どうやって助け出そうか考えていると、いつからいたのか一人の女の子がわたし達の後ろから部屋の中の人達にそう声を掛けていた。

リーダー並に鋭いフウカでも気付かなかったなんて…

「な、なんだあ？ お前…」

「アンタらなんかに教える名前なんてないわよ。それより、さっさと出て行ってくれないかしら？ アンタ達の声は耳障りだし、目障りなのよ」

「な、ん…だとお…?!」

うわわわ、すごい挑発してるよ！ これってマズいんじゃ…

「へっ！ さっきからごちゃごちゃと言ってくれてるが、コイツがどうなってもいいのかあ？」

「……………！」

太っちょとちびっ子は怒りをあらわにしていたけど、リーダー格の人だけは落ち着いた様子で5 p.d.さんの首元にナイフを突き立てて脅す。

あわわわわ、まずいよまずいよ…

「…その程度で、私が怯むとも思ってる？」

「「!?!」」

「な…っ!? 正気かテメエ!?」

でも女の人は何の同様も見せずにそう言う。

わたしと5 p d. さんも驚いたけど、一番驚いているのは脅している男だった。

「よ、よく見たらテメエ、丸腰じゃねえか! 慌てて損したぜ! おめえら、やっちゃまえ!」

「「おう! (なんだな!)」」

今更武器を何も持っていないことに気付いた男は、太っちょとちびっ子にそう命令して女の人を攻撃しようとした。

あ、危ない…! こっから魔法弾で狙撃できる…?」

『フウ、今の内にあの子を』

「(あ、う、うん!)」

フウカにそう言われ、あいつらが女の人に気を取られてる間に、魔法符で姿を消して5 p d. さんに近付く。

最初から使えばよかったんじゃないかって？ いや、あの三人の中心にいるんだから他に注意が行ってないと即行で捕まるでしょ？

「…ふん」

「「ぎゃあああっ!？」」

そんなわたしの心配は杞憂だったみたいで、女の人はどこから取り出したのかブウウウンと大きな音を立てながらチェンソーで二人を斬り伏せた。

：どうやったのかは知らないけど、倒された二人は気絶しているだけみたいだ。

「や、やりやがったな！　だがこっちはまだ人質が――」

「5 p d. さん、大丈夫？」

「う、うん、大丈夫…ありがとう…」

「なっ!？　い、いつの間に!？」

女の子が二人を倒している間に5 p d. さんを助け出し、無事を確認。

よかった、何もされてないみたいだ。

「さて、覚悟はいいかな、誘拐犯さん？」

「ぐ…ち、ちくしょおおおっ！！ ふべらっ!？」

叫ぶ男の頭に向かって力いっぱい杖を叩き付ける。

もちろん、男はその一撃で気絶した。

「ふう…よかった、大変なことになる前に助け出せて」

「う、うん。でも。どうして…？」

「街で5 p d. さんがこの人につれていかれるのを見たから、追いかけてきたんだよ」

「そうなんだ…ありがとう、フウちゃん」

「えへへ、どういたしまして、です♪」

身長差からか、5 p d. さんはお礼を言いながらわたしの頭を撫でてくれる。

なんか子供扱いされてるみたいでちょっとフクザツだけど、でもやっぱ嬉しい。

「あ、そうだ。お姉さん、ありがとう。お姉さんも5 p.d. さんを助けようとしてくれたんだよね？」

もう少し撫でられていたかったなんて思っちゃったりもしたけど我慢して、金髪の女の人にそうお礼を言う。

この人がこいつらの注意を引いてくれたお陰で助けられたようなものだしね。

「別に、私はただコイツらがうるさかったただけだし」

女の方はさっきと変わらず無表情でそう答えた。

「…ま、理由があつたとしたら、アンタが昔の私ににてたから、かもね…」

「え？」

今、ボソッと何か言ったような？

「なんでもないわ。ほら、早く帰った方が良いわよ？ そうしないとコイツら起きちゃうだろうし」

「あ、うん、そうだね。お姉さんはどうするの？」

「私はもうちょっとだけここにいるよ。人の住居に勝手に入ってきた挙句うるさくて目障りな事をしたんだから、お仕置きしないとね……」

「あはは……そ、そう……」

なんでだろう、すっごく笑顔なのに目が笑ってないよ……

というか笑顔でチェンソー持ってるとか狂気しか感じられないよ……

「それじゃ、わたし達は行くね。5 p.d. さんも誰か探してくれてるかもしれないしね」

「あ、そ、そうだ！ きっと教会の人に心配かけちゃってるよ！」

なんとなく空気になってた5 p.d. さんに話を振ると、思い出したようにそう言っただす。

そういえば、いつの間にか太陽が真上に昇ってるね。

「くすっ……ええ、それじゃ、気をつけてね」

「うん！ お姉さんもありがとー！」

「ツキよ、夢見ツキ。私の名前」

「ツキさん、だね！　またね、ツキさん！」

帰り際に何故か自己紹介されてちょっと不思議に思ったけど、まあいいかと気にしないでわたしと5 p d.さんは廃墟マンションから出て行った。

「アンタには興味が湧いたからね、近いうちに……会えるわよ……ふふっ」

「はあー、無事に5 p d.さんを助けられて、ホントによかったよー」

『ま、あの子がいなかったら結構危険だったけれどね』

「うぐっ…」

リーンボックスに戻ってきて5 p d. さんを見送った後、わたしはフウカと話しながら街を歩いていた。

…でも、何か忘れてる気がするんだよね。

「ん…っ！ はあー、なんか今日はもう疲れちゃったよー…」

『フウ、ほとんど何もしていないじゃ…あら？』

「ん？ どしたの、フウカ？」

フウカが言葉の途中で何かに気付いたような反応をしたので、気になって聞いてみる。

『…いえ、なんでもないわ。フウ、貴女きつと憑かれてるのよ』

「うんうん。なんか疲れちゃって…って、あれ？ なんか今発音がおかしくなかった？」

『そうかしら？ 気のせいよ』

「むー？ そうかなー…」

最初はそんなフウカを怪しんでいたけど、何度聞いても教えてくれないので諦めることにした。

その後は、三人と合流してお昼を食べ、シェア集めの為にギルドでクエストを受けて過ごした。

…ちなみにもちろん怒られたよ…

第十六話 青い人見知りアイドルと廃墟の少女 後編（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏―

ツバキ「あとがきコおーナあー、二回目ー」

黒フウ「……今回、無理矢理終わらせなかった…?」

ツバキ「あ、あははー、キノセイダヨー…」

黒フウ「……………」

ツバキ「わーわー！ ごめんなさい！ 謝るからその物騒な剣をしまつて！」

黒フウ「……まったく…今回は作中で使ってた魔法符の解説…それだけ…」

ツバキ「はいはいそれでは。今回作中でフウちゃんが5 p d. ちゃんを助ける時につかった魔法符、あれ実際は『姿を消している』じゃなくて『姿を見えなくしている』だけなんだよね」

黒フウ「……と、言う…?」

ツバキ「うん。単に使用者自身の姿を直接見えなくしてるんじゃない、弱めの光属性魔法で光を屈折させて見えなくしているんだよ」

黒フウ「……周りくどい気がする…」

ツバキ「姿を消す魔法自体の魔術レベルが高めだから、ちょっと工夫をした魔法符なんだよ」

黒フウ「……わかりやすく言う…:東方のサニーミルクの能力みたいな感じ…?」

ツバキ「そんな感じかなー。それじゃ、今回はここまで！」

黒フウ「……次回をお楽しみに…」

第十七話 ライブダンス（前書き）

前半オリキャラ参入、中盤原作、後半…？

な感じの十七話です！

第十七話 ライブダンス

「……………」

『……………』

わたしは今、フウカと一緒に（フウカは他の人には見えないけど）目の前で起こっていることを困惑しながら見ていた。

フウカは特に驚いてないっていうか、知ってたみたいなんだけどさあ。いやホントに、わけがわからないよ。

え？ 何が起きているのかって？

「他にもほら、こんなバネみたいにもなれるのよ」

「わぁー！ すごいすごい！」

「不思議…」

この前5 p.d. さんを助けた時に行った廃墟マンションで会ったツキさんが、なぜかここにいてロムちゃんラムちゃんと楽しそうに話しているんだよ…しかもなんか不思議な力使ってるし…

「…なんでツキさんがここにいるの…？」

『さあ、ね。ただ彼女は幽霊のような、よく分からない存在よ』

「ゆ、幽霊！？　じゃあ、前にフウカが言ってたのって…」

『貴女を驚かそうとして言ったのだけれど、余り驚かなかったから少し残念だったわよ』

：ああ、あの時はちよつと疲れてたせいであまり気にしてなかったんだよね…

うう…まあ、特に悪影響とかはないからいい、かな…？

「で、フウ。アンタはさっきから何ずっとみてるのかなー？」

「ひゃあっ！？」

そうフウカとツキさん（いつの間にか普通の姿に戻っていた）について話していたら、急にツキさんが背後に現れ抱きしめてきた。

うう、びっくりして変な声出しちゃった…恥ずかしいよお…

「あ、あの、ツキさん…？　離して、くれないかな…」

「やだなー、ツキさんだなんて。呼び捨てとか　ちゃん付け、敬語なしでいいわよー」

「い、いや、その、だから…は、離してっ！」

言っても離してくれないので、足をじたばたさせながら振りほどこうとする。

いや、抱きしめられるのが嫌なんじゃなくて、ただ、恥ずかしいっというか…

まあ、そんなのは無駄な抵抗だったわけなんだけど。

「こら、暴れないのー。…はむっ」

「ひゃうっ!？」

腕の中で暴れていたら、ツキさんは急にわたしの耳を甘噛みしてきた。

思わず変な声を出してしまうわたし。

「っは…、み、耳、はぁ…ダメ…だよお…。ホン、トにつ…弱いからあっ…ひうっ！」

途切れ途切れにそういつて抜け出そうとする、けど、甘噛みされてるせいで身体に力が入らない。

わたし、なぜだか知らないけど耳がすっごく弱いんだよね…耳元で囁かれるだけでもダメなの。

「ふうん、フウは耳がよわいのね。はむはむ」

「ふぁっ！　わ、わかった、なら…やめ、てえ…」

くすぐったくてゾクゾクってして、やぁ…ヘンになっちゃうよお…っ

「ふふっ、いーやっ♪」

「あうう…そんなぁ…」

必死にやめてといってもそんな気配は見せないツキさん。ううう…

「…はっ！　あ、アンタ！　フウちゃんに何してるのよっ！」

「いきなりの出来事で固まってたよ…」

と、そこでさっきまで何も言わなかったラムちゃん達がツキさんを止めようとしてくれ――

「フウちゃんはわたし達のなんだから、さっさと離しなさいよ!」

「(こくこく)」

…どうしてそうなったのさ。

「わ、私はフウちゃんと契約してるんだからね! だからフウちゃん
は私のだよ!」

「あら、だからって貴女のとて事じゃないでしょ? フウは私の嫁
よ」

え? え? なんでわたし争奪戦みたいになってるの?

っていうか、わたしノーマルだよ? 同性趣味とかないからね?
友達として好きならあるけどさ?

「アンタなんかフウちゃんと会ってまだ少しじゃない!」

「わたし達の方が…ずっと一緒にいる…」 「ふん、愛に時間なんて
関係無いのよ!」

「そんなことないね! 長く一緒にいたほうが断然好感度が高いよ
!」

ぎゃーぎゃー

「…ああもう！ いい加減にしろおおっ！！」

「…ということで改めて、私の名前は夢見ツキよ。よろしくね」

あれから少し四人にお説教をして、改めて自己紹介をすることになった。

「女神候補生の、ロムです…よろしくね…ツキちゃん」

「ツキね、わたしは女神候補生のロムよ！ まあ、一応よろしくしてあげるわ！」

「うわ、すごい上から目線…。私はステラ、フウちゃんの魔導書よ」

「わたしはロムちゃんとラムちゃんの二人と同じルウィー女神候補生のフウだよ」

「女神候補生三人に魔導書一冊？ のパーティーね…かなり変わったパーティーなこと」

あ、女神候補生とかの一般的な知識はわかるんだね。

「…フウ？ 今失礼な事考えなかった？」

「き、気のせいだよ」

なんでわかったのかは知らないけど、ジト目で見つめてくるツキちゃんから目を逸らしながらそう答える。

「まあ自己紹介もいいけどさ、今日からはどうするのさ？ もうシエアもだいぶ集まったと思うんだけど」

ステラが言うように、クエストを何度かやったおかげでリーンボックスでのルウィーのシエアは15%になった。

少なくともいかって？ そりゃ、いくら女神様がいないからって全部取っていく訳にもいかないでしょ？ だからわたしがこっそり微調整とかしたんだよ。

その結果シェアグラフはルウィーが20%、ラストイションが15%、プラネテューヌが10%、リーンボックスが30%、マジエコ

ンヌが25%という状況になっている。

：うん、プラネテューヌとラステイションは知らないけど、ルウィーがリーンボックスのシェアを越さないようにさせるのが地味に大変だったよ…それやりすぎたせいで、地味に30%なんていう数値になっちゃったんだけどさ。

「そろそろ…帰りたい…」

「そうね。もうこのくらいでいいんじゃない？」

あれ、もう帰る雰囲気？

「帰るの？　できれば帰るのは明日にして欲しいんだけど…」

「？　なにかあるの？」

「えっとね、これ…」

わたしはポーチから一枚のチラシを取り出して、みんなに見せる。

「なにこれ？　えっと…リーンぼつくすしゅさい、きよだいこんさーと…？」

「うん。昨日、5 p.d. さんにこれ貰って、ぜひ来てねって言われ

たから」

「フウちゃん、5 p d. ちゃんに会ったの…?」

「あ、うん。ちょっと色々あってね…」

追いかけられたり殴りこみしたりしたから、言ったらまた何かいわれそうなのではぐらかしておく。

「すごいじゃないフウちゃん！ あの5 p d. ちゃんの…なまらいぶ？ に招待されるなんて！」

「まあ、誰でも参加できるやつだし、5 p d. さん以外の人の演奏もあるけどね」

「じゃあ私達も行っているんだ？」

「へえ…あの子、音楽やってるんだ」

流石5 p d. さんだね、ラムちゃん達にも人気みたい。

「それじゃ、今日は今夜のライブ見に行くとして、帰りは明日でいいかな？」

「」「さんせーい！」「」

ということで、ルウィーに帰るのは明日になって、今日は夜に行われる5 p d. さんのライブを見ることになった。

そして、ライブの時間。

「飛ばすなって？　だってホントに何もなかったんだもん」

「フウちゃん、誰と話してるのさ…」

そりゃ、読者様にだよ。

「ライブ、初めて…楽しみだね、ラムちゃん」

「うん。帰ったらミナちゃんに自慢しちやおう！」

「外に出ることが殆どなかったから、ライブなんて初めてなのよね。期待期待」

みんなそれぞれライブが始まるのを楽しみにしてるみたい。

もちろん、わたしだって5 p d. さんのライブが生で見られるのは嬉しいし、早く始まらないかとワクワクしてたりする。

辺りを見回してみると、他のお客さんの中にユニさんやネプギアさん達の姿も見かけた。

ネプギアさん達も5 p d. さんに呼ばれたのかな。

っと、どうやらライブが始まるみたいだね。

大勢の人が集まる中、巨大なステージに現れたのは青い髪が特徴的な、5 p d. さん。

「みんなー！ 今日が集まってくれてありがとうとおー！ いっぱい盛り上げてねえーっ！！」

『『『うおおおおおおっ！！！！』』』

5 p d. さんの言葉に、湧き上がる会場。

その気迫にちょっと引いちゃったけど、実際のライブっていうのはこういう感じなんだろう。

それから、5 p d. さんの歌と演奏が始まった。

5 p d. さんの歌はやっぱりすごくて、思わず聞きほれてしまっていた。

「みんなー！ 盛り上がってるうー！？」

『うおおー！ 5 p d. ちゃん！』

『最高！ 君の歌は最高だよ！』

『アンコール！ アンコール！』

曲が終わって5 p d. さんがそう言うのと、会場の所々からそんな声がかかる。

やっぱりみんな、5 p d. さんの歌が好きなんだね。

「ありがとーっ！ でもね、一つだけ覚えていてほしいんだ。ボクがこうしてみんなの前で歌えるのは、女神様がこの世界を守ってくれてるからだってこと。ボクの歌を愛してくれるみんなは、犯罪神の誘惑なんかに負けないよねっ！？」

『『うおおおおっ！ 女神最高おおー！！』』

ああ、なるほど。このライブはリーンボックスの犯罪神崇拜組をなんとかする為に開かれたんだね。

「はあ、あの子、本当に凄かったのね」

「あなたどれだけ引きこもってたのさ。5 p d. さんを知らないなんて」

「遅れてる」

「れてる」

「くっ…言い返せない自分が情けないわ…」

横でそんなやりとりが聞こえたけど、わたしはライブに集中していた。

はあー、やっぱり5 p d. さんの歌って素敵だなあ…

それから何曲か続けて歌われて、最後の曲（多分）が終わった。

演奏された曲の中には新曲もあったなあ、今度買わないと。

「それじゃ、ボクの出番はここまで！ 次は、今日の為に結成された、リーンボックスが誇る超イケメンユニット…ユピテルの登場だよっ！」

「やあ、みんなっ！ 僕達はユピテル！ リーンボックス中の女の子を魅了する為に、爽やかに参上したよ！」

「もっとも、僕達の魅力の前には、男の子だってメロメロになってしまうだろうけどね…」

「構わないさ。僕達は少女の愛も、少年の愛も等しくこの身に受け止めるよ!」

『『『………』』』

……ええー…

「…なんていうか…変なのが出てきたわね…」

「わたし、ああいう感じの男の人、嫌いかも…」

なんていうんだろう…なんか、なんかヤダ。

「わたしも、ああいうキザっぽいのは嫌いね」

「わたしも…」

「うーん…私もあれはちょっと…」

他の皆も同じような意見だ。

というか、男の人ばかりの会場にこんなの出したら…

『ふざけんな！ 男の歌なんて聴きたくねえよ！』

『かーえーれ！ かーえーれ！』

『女神を信仰するってことは、あいつらを信仰するってことか？
だったら女神なんて願い下げだ！』

ですよー…

「あーあ、これじゃ信仰回復も難しくなったんじゃないかな…？」

「というか、下手したら前よりも悪くなるわよ…」

「まったく、この国の教会はなにやってるのよ！」

まあ、ああいうので喜ぶのは男の人っていうより女の人だからね、
わたしはやだけど。

「って、うわわっ！ お、押さないで！」

「ちよっと！ 今触ったの誰よ！」

「こ、怖いよお…」

「まずいね…暴動寸前だよ」

「とにかく、一度ここから避難するわよ！」

とりあえずこれによって暴動寸前となり危険になったので、一度わたし達はここから離れることにした。

「はあ…はあ…この辺りまでくれば…大丈夫だよね…」

「もう！ ドサクサに紛れて触ってくるなんて、最っ低なヘンタイよ！」

「怖かった…（ふるふる）」

安全地帯に逃げてくると、同じく逃げてきたのかネプギアさん達やユニさん達もいた。

とはいえ、これってかなりマズい気がするよ…このままじゃ最悪リーンボックスのシェアがマジエコノミ一色になるかもしれない。

どうにかしないとまずいよね…

「ユニちゃん、ロムちゃん、ラムちゃん、フウちゃん！ 力を貸して！ 私に考えがあるの！」

この場をどう治めるか考えていると、急にネプギアさんがわたし達を呼んでそんな事を言ってきた。

「考え？」

「…なあに？　ネプギアちゃん」

「ヘンな思いつきじゃないでしょうね…」

「わたしに出来ることだったら…」

ということと呼ばれたわたし達は、ネプギアさんの案を聞いてステージへと向かった。

ステージに上がってくると、5 p d. さんがあわあわと慌てていた。

「あ、あわわわわ…ダメ…もうどうしていいか、わかんないよ…」

「5 p d. さん！　ここは私達に任せてください！」

「ネプギアさん？　それに女神様達も…」

…ネプギアさんの案に従うことにはしたんだけど…やっぱり恥ずかしいなあ…

「…絶対うまくいくんでしょね。失敗して大恥じかいたら、タダじゃおかないわよ！」

「ふふーん！　わたし達の魅力で、ばっちりシェアを取得しちゃうんだから。頑張ろうね、ロムちゃん、フウちゃん！」

「…恥ずかしい。けど、頑張る」

「…ロムちゃんもそう言うなら…わたしだけ恥ずかしがってちゃダメだよ」

でも…うう…恥ずかしい…

「み、みなさん！　聞いてください！」

そうこうしている間にネプギアさんがステージに立って会場の皆にそう呼びかける。

『なんだ？ 今度は女の子が出てきたな』

『見たことない子達だけど…ふん、今更新キャラの女の子が出てきたって！』

『でも、結構可愛いぞ。一体誰なんだ？』

ううう…みんなこっちみてるよお…

「私は、プラネテューヌの女神候補生、ネプギアです。それで、こちの子が…」

「ラストেশヨンのユニよ…な、何よ！ じろじろ見ないでよね！」

「ルウィーのラムちゃんとロムちゃんとフウちゃんでーっす！ みんなよろしくーっ！」

「（びくびく）」

「うう…よ、よろしくっ、です…っ！」

できる限り声を絞り出したつもりだけど、やっぱり聞こえないかな…

…あ、マイクあるから聞こえるよね…

『女神候補生…てことは、女神様の妹か！ あんなに可愛いんだな』

あ、女神様は』

『ああ。しかも優等生にツンデレ、性格がそれぞれ違う三姉妹…見事なバリエーションじゃないか!』

『これは確かに、犯罪神には無い魅力…!』

ひ、評価はいいのかな？ わたし、ヘンじゃない、よね…？

「今日は私達…お、踊ります！ みなさん、楽しんでいてください！」

そう、ネプギアさんの言った案というのは、わたし達女神候補生全員でダンスをするということ。

歌は流石に今から覚えられないけど、ダンスならみんな少しはできるということ、こうなった。

うう…こ、こうなったらもうやぶれかぶれ、だよっ！

『『……………』』

ダンスが終わると、会場が静まりかえった。

う、うう…や、やっぱり、ダメ、だったのかな…

「ちよ、ちよっと、みんな黙っちゃったじゃない！ どうすんのよ！」

「なんで？ わたし達のかわいさが理解できないってゆーの！？」

「ダメ、だったの…？」

「……！ ち、違うよ、みんな！」

会場みんなの様子を伺っていると、ただ黙っているんじゃないのがわかった。

『う…うおおおっ！！ 女神最高おお！！！！』

『ネプギアちゃんは俺の嫁えええ！！！！』

『じゃあフウちゃんは俺の嫁な！！！！』

『何言ってるのよ！ フウは私の嫁よ！！』

『時代は女神信仰だ！ 犯罪神なんていらなかったんだ！』

『女神！ 女神！ 女神！ 女神…』

せ、成功…なの…？

…というか、一部聞いたことのある声が聞こえたような…

「や、やった！ 大成功だよ、ユニちゃん！」

「…気に入らないわね。アタシより、アンタとフウへの声援の方が多い気がするんだけど」

「とーぜんよ！ フウちゃんはかわいいもんね！ みんなー！ これからもルウィーの信仰、よろしくねー！」

「よろしく…」

「…あつ、よ、よろしく、です！」

「みなさん、今日は本当にありがとうございました。これからも私達のこと、よろしく願います！」

『『『うおおおおおっ！！』『』』

何はともあれ、うまくいったみたいだからいいよね…？

「いやー、昨日のダンス、すごくよかったねー」

あれから会場の片付けなどを手伝って一夜を明かし、ネプギアさん達と別れてわたし達は復旧したラストেশヨン行きの船に乗ってルウィーへの帰路を辿っていた。

「ふふん、とーぜんよ！　なんていったってわたし達はルウィーの女神候補生なんだから！」

「確かによかったわ。特にフウがかわいかった」

「つ、ツキちゃん！　からかわないでよっ！」

うう…恥ずかしいから思い出したくないのに…

「でも…ちょっと楽しかった…」

「そうだね、ステージで踊るなんてそうそう経験できることでもな

いから、いい経験になったんじゃないかな？」

「できたらあんな恥ずかしい経験はもう遠慮したいけどね…」

そんな昨夜の事で盛り上がるわたし達。

その時だった。

「わわっ！ ふ、船ってこんなにゆれるのね」

「…ちょっと怖い…」

「…あっ！ 危ないっ！」

さっきから話している間、視界の隅に船から身を乗り出して海を眺めていた小さな子が、今の揺れで海へと投げ出されていた。

わたしは言うと同時にその子のもとへと駆け出して、手を伸ばして助けようとする。

でも、手は届きそうになく、子供は海へと落ちていく――

「っ、やあっ！」

「え、ふ、フウちゃん！？」

「フウちゃん（フウ）！？」

諦めるよりも先に、身体が動いていた。

わたしは船から子供の所へジャンプし、子供の腕を掴む。

「（…戻れない…なら、この子だけでも…っ！）」

体勢の事もあり、ここから船に戻るのは無理だと思ったわたしは、子供を船の上に向かって投げとばした。

乱暴だったから泣き声が聞こえてきたけど、なんとか子供は船の上に戻れたみたいだ。

よかった…

「「フウちゃんっ！」」

ラムちゃんとロムちゃんかわたしを助けようと手を伸ばしてくれる。

わたしも二人の手を掴もうと手を伸ばすけど、もう届かないくらい離れていた。

「フウ、ちゃんっ！」

「…ごめんね、みんな」

その言葉を最後に、バシヤン！ という音と共にわたしの視界は青く染まった。

飛ぶ時に足をぶつけて吊ってしまったみたいで泳ぐこともできないし、なぜか身体に力が入らなくて女神化もできなかった。

それに、なんだか眠くなってきた。

海中へ沈んでいく中、わたしは意識を手放した。

第十七話 ライブダンス（後書き）

——椿の花と黒い風の舞台裏——

黒フウ「……第十七：と、第一章：読了ありがとうございます…」

ツバキ「今回で第一章はラストだったります！ ではあとがきコーナーです！ ……といっても今回は話すこと特に無いんですけどね」

黒フウ「……明るいノリは何処へ…」

ツバキ「な、なるべくだからいいの！」

黒フウ「……じゃあ…あれ…服装の事…」

ツバキ「あ、そうだね。フウちゃん達の服装ですが、流石にあの暖かそうなコートのままというわけではなく、長袖シャツとワンピースを合わせたような服装になってたりします」

黒フウ「……ラステイションの宿屋辺りに服を変えた描写が追記してある…」

ツバキ「詳しいことは原作のダンスの部分のCGでラムちゃんロムちゃんが来ている服を見ればわかるかと思います！」

黒フウ「……それじゃ…今回はここまで…次回…次章もお楽しみに…」

第二章主要人物紹介

○フウカ

フウの内に存在する、もう一人のフウ。

流されたフウを助けることができない事を嘆きつつ、フウを見守る。
だが、ある存在にあることをされ：

今回の主役キャラクター。

○フウ

本作の主人公、だが、海に流され意識不明の重症となる。

そんなとき、ある存在が現れ：

○夢見ツキ

リーンボックスの廃墟マンションでフウが出会った、フウカ曰く幽霊の少女、特殊な力で変身したりする能力を持っている。

海に落ちて行方不明になったフウを、能力を使って探しに出る。

○ステラ

白の魔導書。

フウカの事を知っているようだが：

第十八話 偽りの風と臆気な月（前書き）

視点切り替えが多い上に意味不になった感が否めない十八話です。

第十八話 偽りの風と朧気な月

—side f u c a—

フウが船から落ちそうになった子供を捨て身で助け、海中に飲み込まれてから既に数日。

奇跡的にどこかの海岸に打ち上げられた彼女は、偶然通り掛かった旅人に助けられ、助けてくれた旅人の棲むエレシアンシティという街の家で世話になっていた。

とはいうものの、あれからフウが目を覚ますことは一度も無く、ずっと眠り続けている。

（あれから五日、か…時が経つのは早いわね）

そう、五日間もの間、一度も、だ。

私だって、目の前で敵でも無い者が苦しんでいるのに、黙って見ているなんてことはしない。

でも、私には何もできない。

ただ、見ているだけしかできなかった。

（これほど自分が無力だと感じたのは、初めてかもしれないわね…）

…いや、そんなことよりも、だ。

海を彷徨ったのは半日くらいで、その後海岸に打ち上げられたフウをこの家主である旅人の、確か…ファルコムだったかしら？ に助けてもらい、今現在に至る。

問題は、四日近く眠っているのにも関わらず一向に目を覚ます気配がないことだ。

女神は常人よりも傷の治りなどが早い傾向があって、たとえば今回のような目に遭ったとしても四日も経っていればもう目を覚ましてもいいくらいだ。

だが、フウには目を覚ますような様子は見られない。

…本来ならありえないのだけれど、私には思い当たることが一つある。

（…ルウィーのシェアが、減った…？）

女神は信仰を力とする存在。

だから先程話した回復力も、信仰力が関係している。

多ければ回復力も増え、少なければ効果も減る。

だから、この状態はシェアの減少が原因だと考えたのだけれど…

（…でも、シェアはつい最近集めたばかり。それなのに急に無くなるなんて事は…）

ともかく、ここから動けない事には情報も手に入らない。流石に眠っている子の前で話してくれるような人はいるとは思えない。

（何もできない私は、ただ待つしか無い、か…）

今の私にはただ、フウが目を覚ますのを待つしかできなかった。

あの日、フウが子供を助けて海に落ちた日から数日が経った。

ラムとロムはあれからずっと元気が無く、ステラは表面上は前とあまり変わらない様子に振舞っているけど、内心はかなりのダメージを受けてるっぽい。

私だって知り合って日も浅いけど、知ってる人がいなくなるのは堪える。

その上、悪い事は更に続いた。

ルウィーに戻った時にラムとロムの様子がおかしかったので早く教会で休ませようと急いで行った私達を待っていたのは、慌てた様子のルウィーの教祖のミナという人と、衝撃的な言葉だった。

——ルウィーの、九割近くのシェアがマジエコンヌに奪われた、と。

ラムとロムの体調が悪くなったのは、ルウィーのシェアが失われたから、ということだ。

ということは…フウもどこかで危険な状況に陥ってる、ということ。

それを聞いて私はすぐさま教会を出て、フウを探しに出た。

「とは言ったものの、そう簡単には見つからないわよね…」

私の力の一つで魔女の姿になり、箒に乗って空から海岸線に飛びながらフウを探しているが、未だフウらしき人影はみつからない。

そんなとき、教会を出るときにミナに渡された通信機に通信が入った。

『ツキさん、聞こえますか?』

「ええ、聞こえてるわ。どうしたの?」

通信の相手は教祖のミナ。

何か情報が入ったら連絡すると言ってたから、何かあったのだろうか。

『はい。先程、フウらしき人物を見たとの情報が入ったので、連絡を…』

「本当!? どこにいるの…って、ここからどうやって向かえばいいかわからないわ…」

『ご心配なく。その通信機には発信機もついてますので、ナビゲー

ト可能です』

なんていうか、用意がいいわね…

「ともかくわかったわ。それじゃ、フウのいるところまでの道のりを教えてもらえる？」

『了解です。ええと…今ツキさんのいる地点からずっと西に向かったところにある、プラネテューヌ領の島にあるエレシアンシティという街です』

「エレシアンシティね、わかったわ。今から向かってみる」

『こんな事を頼むのもどうかと思いますが…どうかフウをお願いします』

「任せなさいって、フウは必ず連れ戻すわ！」

そう言って通信を終了し、エレシアンシティという街に私は全速力で向かっていった。

あたしはファルコム。ゲームギョウ界を旅するしがたい冒険家さ。

ある日、あたしの故郷がマジエコンヌの襲撃されているという知らせを受けて故郷のエレシアンシティに戻る途中の海岸で、あるものを見つけたんだ。

それは、倒れている小さな女の子だった。

服が濡れているから、多分運良く海から流されてきたんだろう。

女の子に触れてみると大分冷えていて放っておいたらまずいだろうと思い、ひとまずあたしはその女の子を背負って街へと向かった。

それから女の子をひとまずあたしの家に寝かせ、後から来た女神様達に力を貸してもらいながら、なんとか街を守ることができた。

だけど、助けた女の子はあれから一度も目を覚まさない。

息はしているから死んではいないみたいだけど：

とりあえずは復興の手伝いもあるし、しばらく様子を見るしかない、

か。

「うわわわっ！ ど、どいてーっ！！」

「…うん？」

ここ最近で色々起こった事を街の少しはずれた所で纏めていると、不意にそんな叫び声が聞こえてきた。

何事か、と声のした方角を見ると、ヘルメットを被った金髪の女の子がバイクに乗ってこっちに向かってきていた。

「うわっ、と」

「く、ぐぐ、ぐ…っ…！」

とりあえずそのままだったら轢かれていたのでさっと避けると、女の子は車体を横にしてキュルルルルと音を立てながら停止した。

「…、ごめんなさいっ！ ちょっと急いでたので…」

「ああ、いいいいいよ。あたしもぼーっとしてたから。でも今後は気をつけなよ？」

「すみません…急いでたので…」

まあ、悪い子には見えないから、次からはちゃんとしてくれるだろう。

「…あの、貴女はこの街の人ですか？」

「え？　ああ、まあ、そうだね」

急いでる、と言っていたからすぐ発進していくだろうと思っていたら、女の子はあたしにそんなことを聞いてきた。

「それじゃ、最近この街に小さい女の子とか、来ませんでしたか？」

「小さい女の子…？」

それって、あの子のことだろうか？

「君が言ってる子かはわからないけど、その子ならウチにいるよ」

「ほ、本当ですか！？」

あたしがそう言った途端、女の子は嬉しそうな表情になった。

よかった、まだ確定ではないけどあの子の知り合いが来てくれたみたいだ。

「うん。まあ、少し問題があるんだけどね…」

「…?」

ひとまず、詳しい話は歩きながら、だね。

—side tuk i—

「そう、なんですか…」

あの後思い切って聞いてみたら当たりだった女の人：ファルコムをバイクの後ろに乗せ、彼女の家に向かう間にフウの今の状況について色々聞かされた。

今、フウは私の目の前にいる。

けれど、彼女は眠り続けてる。

ファルコムの話では、フウはファルコムに助けられてから一度も目を覚ましていないらしい。

「で、どうする？ 一度連れ帰る？」

「…ええ、皆を安心させないといけないから…」

「そうだね、その子の帰りを待っている人がいるのなら、早く連れ帰ってあげるといいよ」

「はい。…フウのこと、ありがとうございました」

そうお礼を言うと、ファルコムは黙って部屋を出て行ってくれた。

「…フウ…」

ベット横のイスに腰掛け、そっとフウの頭を撫でる。

…いや、死んではないないけど。静かな寝息を立てて眠っているだけ
なんだけどね。

「…そういえば」

フウの頭を撫でながら、ふとあることを思い出した。

それは、フウと出会った時から感じていた気配。

いつもフウと一緒にいると、どういうわけか一つ気配が多くなる。

…何かが、いる…？

「ひとまず、これで…」

私は自分の顔に手をかざし、能力でメガネをかける。

そして、メガネのレンズを通して見た先には…

「……誰？」

『…え…？』

私が目の前の、フウとそっくりだけど目の色が紅い少女にそう言う

と、その少女は驚いたような顔になった。

—side fuc—

今、この少女は誰に、何をした？

——私に、話しかけてきた？

ファルコムに連れて来られ、ぼうつとフウの事を見つめていた、名前は確か：ツキ、だったかしら？ は、突然自らの顔に手をかざしメガネをかけたかと思うと、私の方をみて声をかけてきたのだ。

——私の姿は、フウにしか見えないはずなのに…なぜ？

『…私が、見えるというの？』

「ええ、見えるわ。このメガネはそういうものが見えるようになる特殊なものだからね」

ふむ…変わった能力を持っているのね。

とはいえ、フウ以外の存在と会話するなんて、いつ以来だろうか？

「それで、貴女は誰？ いつもフウの近くにいたみたいだけど」

『気配にも気付いていたの？ 何者よ貴女…』

…と、いきなり話が脱線するところだった。

『私は、この子…フウであって、そうでない。…いわば半身のような存在よ』

「半身…？ もう一人のフウってこと？」

『まあ、そう捉えて貰って構わないわ。この子が記憶喪失なのは知っているわね？』

私がそう聞くとこくり、と頷くツキ。

『私は、この子の失った記憶を持った、この子の欠片、みたいな存

在よ』

「フウの、欠片？」

まあ、そんな反応になるわよね。

「で、でもさ、それだったらアンタがフウに無くなった記憶を教えて思い出させればいいんじゃないの？」

『それでは意味が無いのよ。私が教えた所でそれは仮初に過ぎない。どの道この子自身が自らの力で思い出さなければならぬ』

「……………」

『私は、欠けた本物の一欠片…要するに、偽者ってことよ』

言葉としてはこれで間違っていない。

「…フウの記憶は、辛いこと？」

『…なぜそれを聞くのかしら？』

私の話を黙って聞いていたツキがそんなことを聞いてきたので、そう問い返す。

…質問を質問で返すのはあまり好きではないのだけれどね。

「辛い事だったら、思い出さなくてもいいんじゃないかって…」

『それは甘えよ。いくら失った過去が辛かったとしても、それは受け入れなくてはならない。自分自身が体験してきた事として』

「でも……じゃあ、フウの記憶が完全に戻ったら、アンタはどうなるのよ？」

『消えるわ』

どうしてそんなことを聞くのか理解できなかったけれど、私はそう即答した。

「…消えるのが、怖くないの？」

『それが運命なのならば、ね』

…本当は、運命なんて言葉は嫌いなのだけれどね。

でも、これは私が決めたことだから。

「運命なら、なんでも従うの!？」

突然そう叫ぶツキ。

唐突だったので、少し驚いてしまった。

「みんなそう言って！ 運命だのなんだの言って…なんなのよ、本当に…あの子だって…」

最初は叫ぶように語るツキだったが、次第に声が小さくなっていく。最後の方は最早聞き取ることすらできないくらいだった。

『…聞きたい事はそれだけかしら？』

「……………」

うなだれるツキにそう聞く。

が、返事は返ってこない。

『…はあ…今夜はもう遅いわ。帰るのは明日よ。いいかしら？』

「…わかったわ…」

そう言って無理矢理会話中断させると、ツキは部屋を出て行った。

：それにしても、まさか私の姿が見える能力だなんてね、本当に驚かされたわ。

とにかく、もう日も沈みかけている時刻だ、詳しい話などは明日すればいいだろう。

『…おやすみなさい…』

私は眠り続けるフウにそう語りかけ、意識を手放した。

第十八話 偽りの風と臆気な月（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏―

黒フウ「……最近、ここで話す事も減ってきたよね…」

ツバキ「まあまあ、今はまだあるんだからそんなこと言わないの。と言うことで、今回はフウちゃんの覚醒についてです！」

黒フウ「……あっちのわたしの覚醒…つまり『内なる狂気』の回みたいなたいな状態の事…これを狂気解放というの…」

ツバキ「これにはまずあれみたい意識はフウちゃんだけど状態は解放ってのと、意識がフウカになっている解放の二種類があるんだ。能力は後者の方が上だね。後者は今後出るかわからないけど」

黒フウ「……まあ、だからなんだというのだけど…」

ツバキ「ま、まあ、一応の説明だね。一応の」

黒フウ「……はい、今回はこれで終わり…次回もお楽しみに」

第十九話 鎖鋸少女（前書き）

余り進まない回っす。

…ぶっちゃけこれ、いるのかな…？

第十九話 鎖鋸少女

—side tukii—

「…よし、さて、と」

「もう行くのかい？」

あの後、もう遅いという理由でファルコムの家泊めてもらった次の日の朝。

フウにヘルメットを被せてバイクに乗ろうとしていると、後ろからファルコムが声を掛けてきた。

「あ、ファルコム。ええ、この子の帰りを待ってる子達がいるからね」

「そうなんだ、だけど気をつけなよ？ 最近は前よりも凶暴なモンスターが増えたみたいだし」

「ご心配、ありがとう。でも、そこまで弱くないから大丈夫」

ファルコム言葉にそう返し、エンジンをかける。

「それじゃ、本当に色々ありがとう」

そしてバイクに跨りフウが落ちないように掴ませ、ヘルメットを被りながらお礼を言う。

「いいよいいよ。そんなことより早く帰って待ってる子を安心させてあげなよ」

「ええ、そうさせてもらおうよ」

そう言った後、またね、と言って、私はルウィーに向けてバイクを発進させた。

エレシアンシティを出発して数時間後。

私はチェーンソー片手にプラネテューヌとルウィーの間の平原を走

っていた。

え？ ギャザリング城辺りの湖はどうしたのかって？ 勿論まじよの筈で飛んだわよ。

あ、道路無視とかバイクの持ち運びについては気にしたら負けだから。

『あまり荒い運転はダメよ？ フウが落ちるわ』

「それくらいわかってるわ、よっ！」

後ろから話しかけてくるフウカ（名前は移動中に聞いた）にそう答えながら、手に持ったチェーンソーで邪魔なモンスターを切り裂いていく。

片手でチェーンソーとか無理があるだろうって？ それも気にしたら負けよ。

『それにしても、まさか本当にルウィーのシェアが奪われていたとはね…』

「私達もびっくりしたわよ。ルウィーに着いたと思ったらロムが体調を崩して、教会にいったらシェアが奪われただなんていうんだもの」

『ふうん…一体どんな手を使ったのやら』

それは教祖が知りたいでしょうよ。

……、………はぁ…面倒なのが来たよ…

「ちょい寄り道するよ」

『…一人で行けるのかしら？』

「大丈夫だ、問題ない。ちょっとキツいかもしんないけど、早めに仕留めてくるよ」

後ろから大型モンスターの気配を感じ取り、フウカとそんな会話を
して丁度良く近くにあった岩陰にバイクを止めヘルメットを脱ぐ。

「それに、最近は人間相手ばかりで本気出せなかったから良い運動よ」

『そう』

心配…してくれてるのかどうかわからないけど、そう言うてからそれじゃ、と言い岩陰から出る。

向かってきているのは…ドルフィン系一匹とその他四匹か。まあ大丈夫ね。

といってもこの辺りでドルフィンって言うところドルフィンくらいなんだけど…うん、大丈夫大丈夫。

「さあて、久しぶりのモンスター戦！　せいぜい楽しませてよ？」

言いながら私はチェーンソーを構え、モンスターの群れの前に立ち塞がる。

とりあえずまずは…

「【おおかみ】　っと」

小さくそう呟くと、私の姿が変化する。

金髪の頭からひょこつと獣耳が生え、髪の色と同じ尻尾が生えた、文字通り獣の姿。

詳しい外見はpixivで調べれば出てくると思うわよ。

「さ、行くわ…よっ！」

チェーンソーを背負い軽く屈み、まずは取り巻きの雑魚を仕留める為に一気に近付く。

そして取り巻きの…ええと、なんていうモンスターだっけ？ …まあいいや。とにかく緑色で黄色い耳のついたベーター系のモンスター（多分ベーター系だよね）を背負っていたチェーンソーで叩き斬る。

突然の奇襲で動揺している隙に一匹、また一匹と取り巻きを切り裂いていき、まずは四匹の取り巻きを撃破。

もうわかったと思うけれど、おおかみはただの外見変化だけでなく、身体能力（主に素早さ）が上がる。

もちろん疲労は溜まるけど、今みたいな瞬間移動並みにのスピードで動くこともできるのだ。

「ふう…さて、残るはイルカさんだけね」

雑魚掃討を終え、おおかみを解除してチェーンソーを構えなおす。

なんで一緒にいたのかは知らないけど、仲間をやられたドルフィンはお怒りの様子。

雄叫びを上げながらドルフィンはこちらに水の弾丸を放ってきた。

「おお、怖い怖い。けどね…」

普通なら避けるところだけど、あえて私はそれをせずその場から動かない。

「っ、この程度…」

そして放たれた水の弾丸を真正面からチェーンソーで受け止め、出力を最大にする。

ヴォオオオオン、とチェーンソーの刃が高速回転し、弾丸をガリガリと削り、そして、

「無駄なのよッ！」

水の弾丸を真っ二つに叩き切った。

「それじゃ、今度は私の番よ！」

そして再びチェーンソーを前に構え、ドルフィンへと突撃する。

ドルフィンは身の危険を感じたのか、今度は水のレーザーを放ってくるが、

「だから無駄だって言ってるでしょッ！」

今度は前に構えたチェーンソーで受け、切り裂きながら進んでいく。

…バイクの置いてある岩の方に飛んでないよね…？

「これで…チェックメイトよッ！」

攻撃の届く範囲まで近付いたところで、素早く身を屈めてレーザーを避けつつドルフィンドルフィンの首元を目掛けて思いっきりチェーンソーで切りつける。

「っ…はあああああッ！！！」

流石に強いモンスターだけあって中々硬かったけれど、返り血を浴びつつなんとかドルフィンの首を切り落とした。

切断された箇所から勢い良く血飛沫を上げ、ドルフィンは動かなくなり消滅した。

「あーあ、急いでるからって強引過ぎたかな。武器も私自身も血塗れだわ…」

これは後で洗わなきゃダメね…なんて愚痴をこぼしつつ、フウ達の

待つ岩陰へと戻っていく。

『お疲れ様。それにしても凄い事になっているわよ、貴女』

「んー、自分でもわかってるわよ」

『そう。今の貴女ならホラーゲーム辺りに出られそうね』

まあ、血塗れの人が血塗れのチェンソーなんて持ってたら怖いわね。今の私の事なんだけど。

『それと、先程の敵の攻撃をも切り裂いたのには驚かされたわ』

「まあ、コレならあれくらいの飛び道具、余裕で両断できるわよ」

『ええ、凄いわ。だけど切った水がこっちまで飛んで来たのだけだわ』

「…あー…」

やっぱりー？　みたいな感じで頭を掻く。

確かによく見たらフウが少し濡れていた。

「…とりあえず、乾かしてからいこうか…」

『はあ…』

フウカがため息をつく横で、【カンテラ】を使ってフウを暖める。

無駄にカッコつけようとするところなる、と。…覚えておこう…

それからしばらくしてフウの服を乾かすのを終え、再び私はルウイ
ーに向けて走り出した。

第十九話 鎖鋸少女（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏―

ツバキ「はい、今回はツキちゃんの戦闘回でしたー」

黒フウ「……まああの数の能力エフエクトが出たね…今回は…」

ツバキ「うん。ちなみにツキちゃんの言ってたpixivでの検索ワードは『うろつき おおかみ』で出ると思うよ」

黒フウ「……ちなみにおおかみの能力…一部は元のと違うから、注意…」

ツバキ「あと、オリキャラ設定にツキちゃんの項目が増えてるから、そっちも見てみてくださいねー」

黒フウ「……で、今回の残りは…あるお話の予告みたいなのを載せる…」

ツバキ「何の予告かは、分かる人には分かると思うよ」

黒フウ「……では、どうぞ…」

――あの剣…どこかで…

――あれは…！ あれを使ってはダメ！

それは、一つの剣から始まる――一つの物語。

——あれは…あれだけは…絶…に…

——え…？——？——！？

古の記憶は、失われ——

——…ちゃん…

——な、なんで…どうして…

少女は、かけがえのない絆をも失う。

——……さない……ゆる、サナイ……

そして、少女は——

これは、一つの魔剣から始まる——絶望を刻む物語——

——……もう、こんな世界……どうなろうと知らない…

わたしは…——さえ——せれば——

ツバキ「ということで、意味不な予告でしたー」

黒フウ「……もはやバッドエンドしか見えない予告だね…」

ツバキ「ま、本当に書くかはまだ決めてないけどね」

黒フウ「……おい…」

ツバキ「では！　今回はこれにてー、次回もお楽しみに！」

第二十話 分離（前書き）

学園の戦闘のネタが出てこない…

第二十話 分離

「ツキさん、どうもありがとうございました」

「いやいや、私が好きでやったことだから、気にしないで」

あれからなんとか無事にルウィーの教会に到着、フウはステラとラムに任せて私は教祖ミナと話をしていた。

ミナもこの状況で数日の間眠ってないらしく、顔色が悪い。

「それで、何かわかったの？」

「いえ…まだ何も…」

「そう…何があったのかしらね」

ほとんどあのマンションから出たことのない私でも、度々外に出ていたからこの世界の常識くらいは身につけている。

だから、急にそんな大量の信仰シエアがなくなるのはそうそうある事ではないということはある。

「…あら、二人とも。様子はどうだった？」

そんな話をしていると、フウを運んでいったステラとラムの二人が戻ってきた。

「フウちゃんもロムちゃんと同じ感じ。疲れてる時にシェア不足になっちゃったから、それが原因みたい。ラムちゃんも辛そうだし…」

「うう…」

ステラに言われてラムを見ると、本当に顔色が悪く、辛そうな様子だった。

ふむ…本当にどうしたものかな。他国に助けを呼ぶにしても、色々と問題があるだろうし…

「失礼します!」

そんな時、教会の扉が開き何者かが入ってきた。

確かあの子達は…リーンボックスで見かけたプラネテューヌの女神様とお供達だったっけ? 名前だけならフウに聞いてたから多分あってると思うけど

「あ、あら? 貴女方は…何故、ルウイーに…?」

「かおいろが悪いのです。だいじょうぶですの？」

「大丈夫なわけ無いでしょ。ミナはここ数日ほとんど寝てないんだから」

「そんなにひどい状況になってるですか…」

妙な帽子を被った子…がすとだっつけ、の言葉にそう返すと、桃色髪の…コンパ、よね？ が心配そうな顔になる。

「あ、あの、ロムちゃん達三人は平気なんですか？」

「あんまり、平気じゃない…」

「わ、女神様も顔色悪いよ…」

プラネテューヌの女神様のネプギアがそう聞いてきて、ラムがステラに支えられながらそう言う。

「ラムちゃんだけ？ ロムちゃんとフウちゃんは？」

ラム一人しかいないことに気付いたのか、ネプギアがフウとロムについて聞いてきた。

「二人とも寝てるよ。ロムちゃんは帰ってきてからほとんど目を覚まさないし、フウちゃんは眠ったまま…」

「原因はわかってるの？」

「いいえ、いまだ不明です…。ただ突然シェアが奪われたという事実があるだけで…」

「そう…じゃあ、まずはそれを調べるところから…」

このメンバーの中では一番マトモそうなアイエフがそういいかけた時、待ってください、とネプギアがアイエフの言葉を遮った。

「それを調べるのより、三人を助けるのが先です！」

「え…？」

ネプギアの予想外な発言に、ラムが驚いたような顔をする。

「助けるって、どうやって助けるの？」

「シェアを回復するんです。そうすれば、きっと三人も元気になつて…」

んー、まあ、悪い考えではないんだけど。

「でも、回復してもまた奪われたら同じことよ」

「う、それは…そうだ！ ミナさん、シェアクリスタルは作れますか？」

「は、はあ…一応、方法は知ってますけど…」

「じゃあ、回復したシェアをすぐクリスタルにしてください。ちっちゃいクリスタルならすぐ作れますよね？」

あー、なんかこういうタイプの人って前にも見た事あるなあ。

「いやー…そういうことじゃないと思うんだけど…」

「無駄よ、この子は言い出したら聞かないタイプだから…」

呆れ顔でそう言うアイエフ。

ああ、今に始まったことじゃないのね…

「…ホント？ ホントにロムちゃんとフウちゃんのこと、助けてくれるの？」

「二人だけじゃなくてラムちゃんも助けるよ。待っててね、すぐに

シェアを集めてくるから」

「ま、待ってください！ お気持ちはありがたいですが、他国の方にそこまでしていただくわけには…」

ラムにそう言って教会を出ようとするネプギアを、慌ててミナが止める。

「気にしないでください。私がやりたくてやるんですから」

「そういう問題ではないんです。あまり他国に借りを作ってはルウィーの自主性とか政治的な立場とか色々…」

うーん、まあそうなるわよねえ。

「それじゃ、三人を助けちゃいけないんですか!？」

「い、いえ。助けてほしいのは山々ですけど、その、私にもこの国にも立場というものが…」

んー、私もミナを説得してみようかな。

「あんまり頑なに断るもんじゃないわよ？」

「いえ、ですが…」

はあ、妙に頑固ね…

「ミナ？ 今この国にいる女神は誰かしら？」

「はい？ 今現在はあの三人しかいませんが…」

「でしょ？ だから早いとこあの子達をどうにかしないとシェア回復も難しいわよ？」

「で、ですが…」

「ああー！ もう、面倒ねえ！ そんなに借りを作りたくないなら助けてもらう代わりにアイツらの目的…打倒マジエコノミと一緒に行くとかを交換条件として出せばいいでしょ！？」

何かと断ろうとするミナに痺れを切らし、そう怒鳴ってしまった。

うわー、めっちゃ注目されてるよ…

あ、ちなみにネプギア達の目的は前にフウに聞いたわ。

「い、いえ、それはなんかこちらにばかりメリットがあって妥当な取引にならないんじゃない？」

「ええい、少し黙りなさい！ アンタもそれでいいかしら！？」

「へっ？ え、あ、は、はい」

「わたしもそれでいいから、ロムちゃんとフウちゃんを助けて！」

「あ、ダメですよ！ 勝手にS「はい！ 交渉成立！ んじゃさつさとシェア集めに行くわよ！」 え、あつ、ちょ、ちょっと！」

「は、はい！ それじゃ、急いでシェアを集めてきますから！」

そんな感じで半ば無理矢理押し切って、ネプギアを連れて教会を出た。

「…本当に大丈夫なのかしら…？」

「私もツキとは知り合ってまだ短いけど、アイツも言い出したら聞かないタイプだから…」

「じゃっかんきょうそが凹んでるのですの」

「ま、まあ、いいじゃないですか」

後ろからそんな声が聞こえたけど、気にしない気にしない。

「そこそこシェアも回復しましたね。これだけあれば大丈夫でしょうか？」

「わかりません。でも、またうばわれないうちにクリスタルにした方がかくじつですの」

あれから結構色々やって、多少のシェアを回復することができた。

でも実際シェアクリスタルを作るのに必要なシェアの量なんて知らないから、一旦戻るかどうかの相談をしていた。

……ん？

「そういえば、結局原因わかってないよね。シェアが奪われた…」

「うん、どこかに悪いヤツがいるはずなんだよ！　くやしいなー、見つけれないなんて」

「…あのさ、アレとか怪しいくない？」

「なんですか？」

そんな話をしているネプギア達に、私は路地裏の入り口を指差しながらそう言う。

「ちゅ、ちゅちゅ…こそこそ…」

そこには、見るからに怪しい灰色のネズミがいた。

「ネズミさん…？ 何をなさってるんでしょう？」

「…これは尻尾を掴んだかもしれないわよ」

どうやらネプギア達はあのネズミと面識があるようで、ネズミを付けて路地裏に向かっていくネプギア達に私も続いて行く。

そこでは、ネズミが人々にマジエコンを配っていた。

どうやら一気にシェアが奪われたのは、アイツが裏でマジエコンを配っていたのが原因みたいだ。

「なるほど、アレが原因だった訳ね」

「あんな物を、国中に配ってたんだ…」

「……へえ………」

なるほどねえ…アイツがあんな物をばら撒いたから…フウがあんな目に遭ってる、と…

「……ふ…ふふ……」

「あ、あのー、ツキさーん…?」

そうか、そうなのね。うふふふ…

ジャキン!

「ひゃあっ!? つ、つつツキさんおお落ち着いてですー!」

「か、顔が本気だ…」

ピンクいのと青い、ぺったんこのh「ぺったんこってゆーなっ!」
…が何か言ってるけど、無視してネズミに歩み寄っていく。

「ん…? デュツ!? な、何事っちゆか!？」

「うふ、ふふふふ…さあ、覚悟はいいかしら…ネズミさん…?」

チェーンソーを唸らせながら、ネズミにそう問いかける。

まあ、イヤと言っても無駄だけどねえ。

「な、なんだかよくわからないっちゅうが、とてつもなく身の危険を感じるっちゅう…こ、ここは…三十六計逃げるに如かずっちゅう！」

ネズミはちゅーちゅーとわめきながら、マジェコンを回収して逃げ出す。

「逃がすかあッ！ 【バイク】っ！」

それをただ見守る気なんてさらさら無いので、素早く能力でバイクを使って追いかけようとする。

が、ネズミからマジェコンを受け取っていた子供達が邪魔で追いかけられない。

「チッ、邪魔な…」

このままではあのネズミに逃げられてしまう、と思ったとき、視界の隅のガラクタ山に丁度ジャンプ台に使えそうな感じの板があるのを見つける。

それを見て私はなんの迷いもなくそれに向けて走り出し、子供達を飛び越えてネズミを追いかける。

一方、ネプギア達は：

「うわー！　かっこいいー！」

「なんて無茶な真似してんのよ、アイツは…」

「あれにはがすともよそうがいですの」

「って関心してる場合じゃ無いですよ！　私達も追いかけてみましょう！」

というわけで、ネプギア達もワレチューとツキを追いかけていった。

「はあ…はあ…でも、もう流石に追いかけてきてないっちゅね…？」

「そうね。もう捕まえたも同然だから追ってはいないわ」

「そ、そうっちゅよねー…ってちゅうう…っ!？」

安堵の表情を浮かべるネズミに先回りして背後からチェーンソーを振り下ろすが、避けられる。

…チツ。

「し、しつこいっちゅよ!　こんなところまで追ってくるなんて…」

「うっさい。さっさとそのマジエコンを寄越しなさい。細切れにするから」

「ダメっちゅよ!　物は大事にしろと親に習わなかったっちゅか!？」

「少なくとも、そんなものを大事にするとは習ってないわね。…それに、私に親なんて、いないわ」

親、ねえ。

…なんて感傷に浸ってる場合じゃないね。

「ま、どのみち力づくになるのはわかってたけどね」

「ちゅ、ちゅー…小さいからって舐めてかかると痛い目を見るっち

ゆよ！」

「アンタみたいな汚そうなネズミなんて舐めるわけないでしょ」

「ホントに失礼ちゅね！ そんなに汚くないちゅよ！ あ、でも愛しのこんぱちゃんになら舐められたいちゅー…」

なんか勝手にトリップしてるし、なんなのかしら、コイツ。

「とりゃっ」

「ちゅううーっ！！ あ、危ないっちゅー！」

「痛い思いをしたくないならさっさとそれを置いて消えてくれない？」

なんか相手にするの面倒になってきたし。

「ちゅ、ちゅー…こ、こうなったら奥の手を見せてやるっちゅー！」

そういつてネズミがディスクのようなものを取り出す。

すると、機械型のモンスターが三匹ほど現れた。

流石に機械モンスターについては詳しくないからよくは知らないけど、そのモンスターは私にエネルギー弾を放ってきた。

「ふーん、そんなこともできるのね」

関心しながらエネルギー弾をチェーンソーで払っていく。

逃げてばかりだったから、それしかできないのかと思ってたわ。

「ええい、遠くからうざりたい！」

三四で遠くから地味に撃ってくるので鬱陶しくなり、私はその内の一匹にエネルギー弾を払いながら近付き、真上から真っ二つに叩き切った。

「まず一匹。さて次は…」

「ちゅー！ これでも喰らうちゅー！」

一匹目を撃破して続いて二匹目も倒そうとしていると、突然そんな声が聞こえてきて私の頭上から雷が落ちてきた。

「ぎゃー！ ぐ…う…！」

咄嗟にチェンソーを構えて直撃は防いだけど、電気なので感電してしまう。

しかも中々強い電撃だったので、地面の土が巻き上がり、視界が利かなくなる。

「や、やったっちゅか…？」

土煙で何も見えないけど、ネズミのそんな台詞が聞こえてきた。

ネズミ、それはフラグってやつよ。

「ふ、ふふふふ…私の弱点を突いてくるなんて、少しはやるんだね。ネズミだと思って甘く見てたわ」

「ちゅ、ちゅ！？ まだ生きてるっちゅか！？」

私が喋ると、ネズミの驚いたような声が聞こえてくる。

「確かに電気は苦手よ。だけどね…」

そう言い、土煙を晴らす為にチェンソーを一振りする。

「電気は弱点でもあって、得意な属性でもあるのよお！」

すると土煙が晴れ、視界がクリアになる。

さっきと違うのは、私の持つチェーンソーがバチバチと電気を放っている事だけだ。

「ちゅちゅちゅ！？　　な、なんっちゅかそれは！？」

「何って、アンタの電撃を受けたからこうなったのよ。それよりも、覚悟はいいかしら？」

言って、雷を放つチェーンソーを雑魚モンスター達の方を向いて横に振る。

するとチェーンソーから雷の斬撃が放たれ、バチバチと音を立てながら二匹とも同時に真っ二つになった。

「な、なんてヤツっちゅ…」

「さ、次はアンタの番よ」

残ったネズミに、まだ電気を纏ったままのチェーンソーを向ける。

「こ、こうなったら…戦略的撤退っちゅ！」

「させるとでも？」

再び逃げ出そうとするネズミを見据え、手を指パツチンの形にして掲げる。

「眠りなさい。真昼の夢！」
デイ・ナイトメア

そして、指を鳴らす。

「ちゅ？　　なんだか眠くなってきた…っちゅ…」

すると突然ネズミが動きを止め、パタン、とその場に倒れこんだ。

死んだ訳ではなく、私の能力で眠らせただけだ。

どんな夢を見るかは、その人によるけれどね。

「さて、と。…一足遅かったね」

「はあ…はあ……っつ、ツキさん早すぎです…」

ネズミが寝ている隙にマジエコンを壊そうと思っていると、ここま
で走ってきたのか息を切らしたネプギア達がやってきた。

「仕方ないじゃない。思いのほかこのネズミが早かったんだもん」

「つて、こいつはなんでこんなところで寝てんのよ？」

「…うーん…こんぱちゃん…うーん…っちゅ…」

うなされるネズミを見てアイエフが呆れた様子でそう言う。

「な、なんだかうなされてるみたいですけど…」

「居眠りしてるヤツなんて放っておけばいいでしょ。それよりさっ
さとこれ、壊すわよ」

「あ、そういえばそうだったね」

「忘れてたですよ…？」

そんなこんなで、私達はネズミが寝ている間にマジエコンを全て破
壊し、シェアクリスタルを作るためにルウィーへと戻る事にした。

…なんだろう、なんか胸騒ぎがする…

妙な胸騒ぎもあって、ネプギア達を置いていかない程度のスピードで急ぎつつルウィーへ向かった。

――side fuc――

「っ…何が起こっているというの…!？」

私は今、自分でもわかるほどに驚愕し、混乱していた。

何が起こっているのかというと…

「な、なんだあ？ このガキ分裂しやがった!？」

「これは流石に予想していなかったな」

私の目の前に黄色い人形のような巨体と、いつかフウを誘拐した……
下っ端だったかしら？ がいて、その傍に先程まで眠っていた筈の
フウとロムが立っているのだ。

そこまでならまだ少し驚く程度だけれど、一番の問題は――

――私が、実体化していること。

「……っ……」

身の危険を感じ、咄嗟にダーインスレイヴを喚び出して構える。

事の発端は、この部屋に運び込まれたフウと元々この部屋で眠っていたロムを見守っていた時の事だった。

突然部屋の天井を破壊してこの二人が部屋に侵入してきて、何かをフウとロムにしたかと思ったらこのような状況になったのだ。

まあ、過去の事は今更だ。今はこの現状をどうにかしなくてはならない。

「「……………」」

部屋が狭くて戦うのに適していない、というのもあるのだが、何よ

りも厄介なのはフウとロムだ。

気配を感じてわかったことなのだが、恐らく今のあの二人には何かの術がかけられているようで、一種の洗脳状態にあるのだ。

うかつに二人を斬る訳にもいかない為、構えたはいいものの何もできずにいる。

「しかし、どうしたのだ？ 立派な獲物を持っている割には何もしないのだな？」

「チツ…煩いわ」

「アククク！ そうかわかったぞ。この二人を攻撃する訳にもいかないから何もできないのだろう？」

「……………」

冷静に考えれば分かる事だろう。

しかし、これはかなり危険な状況ね…

「へっ！ 攻撃できネェんじゃこっちのもんだな！」

「その通りだ。予定には無かったがその幼女も連れて行くぞ」

「了解っす！」

「くっ…」

逃げようにも、扉は下っ端が邪魔で使えない。

どうしたものか…

「フウちゃん！ ロムちゃん！」

「ぶふえあっ！？」

そんな時、突然部屋の扉が勢いよく開き、扉の近くにいた下っ端を吹き飛ばした。

…いいタイミングね。

「え…?! フウちゃんが、二人？」

「フウカ…?!」

最初に部屋に入ってきたロムに続いてステラ、ツキ、ネプギア達が部屋に入ってくる。

と、いうか、部屋がとても狭いのだけれど…

「イテテ…と、トリック様！」

「仕方が無い…その少女は諦めるとしよう。では少女達よ！　さらば！」

状況が逆転して分が悪いと感じたからか、トリックと呼ばれた黄色い人形は下っ端を連れて部屋の壁を破壊して逃げていった。

…直すのが面倒そうね。

「ろ、ロムちゃん！　フウちゃん！」

「ら、ラムちゃん落ち着いて！」

「とりあえず、詳しい話を聞かせてもらおうわよ」

「……………」

取り乱すラムをネプギアが落ち着かせ、アイエフが私にそう言ってくる。

…本当、面倒な事になったわね…

第二十話 分離（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏―

ツバキ「いやいや、大変な事になって来たねー」

黒フウ「……わたしは操られてる時の記憶：曖昧なんだけどね…」

ツバキ「あ、そうなんだ。ということで今回はツキちゃんについてー！」

ツバキ「ということで、ゲストとして呼びました、夢見ツキちゃんですー！」

ツキ「どうも」

ツバキ「では早速、ツキちゃん的能力についてをいくつか教えてねー」

ツキ「わかったわ。私の能力の一つの色々な姿に変身したりする能力…もうエフェクトでいいわよね、は大抵何処でも使う事ができるの。だから今回路地裏でいきなりバイクに乗ったりできたってわけ」

ツバキ「へえ、そのエフェクトって壊れたりするの？」

ツキ「一応壊れるわよ。ただ、壊れてもしばらくの間使えなくなるだけでしばらく待てばまた使えるようになるわ」

ツバキ「なるほど、では今回では技について！」

ツキ「あれはもう一つの能力ね。範囲内の相手に夢を見せる事ができる、という技よ。今回の場合は直接的な描写はないけれど眠らせる魔法と同時に使っているわ。敵に使う場合は眠らせる魔法と夢を見せる能力がセットだと思ってくれて構わないわ」

ツバキ「ほうほう。相手に見せる夢は決められるの？」

ツキ「自分が想像したものを夢に登場させることはできないけど、いい夢とか悪夢とかなら決められるわ」

ツバキ「なるほど！ わかったようなわかんなかったような感じだ

けどオツケーだね！」

ツキ「おい」

ツバキ「それでは今回の舞台裏はここまで！ 次回もお楽しみに！

！」

黒フウ「……今回はやけにテンション高い……」

ツキ「あ、フウいたの」

黒フウ「……いっぺん、死んでみる……？」

ツキ「ゴメンナサイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549w/>

超次元ゲーム ネプテューヌmk2 Goddess of lost memories

2011年12月2日02時55分発行